
月並町の魔法使い

其場凌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月並町の魔法使い

【Nコード】

N9908S

【作者名】

其場凌

【あらすじ】

セーラー服の高校生、あきちゃんは、ひょんなことから、好きな先生が魔法使いなんじゃないかと疑いを抱く。同じく魔法使いの大学生、吏一の協力で先生への告白を決意するあきちゃんだが、セーラー服を脱いだ彼女の正体は実は……。小さな田舎町の小さな恋の物語はやがて、月並町の魔法使いたちの運命をめぐる物語へ。

セーラー服を脱がさないで（１）

先生が、おかしくなっちゃったんじゃないかと思った。

事件が起こったのは夏休み直前。二学期末のテストを間近に控えて、教室内はどことなくピリツとした空気で。

私は窓際の、日当たりの良い席で先生の話を生懸命聞くフリをしながら実のところその顔ばかり見ていた。先生は、それほどイケメンってわけじゃない。背は高いけど、いつもポロシャツにチノパンで、近所をちよつと探せばすぐに見つかりそうな、どこにでもいる普通のお兄さんだ。

でも、その気安さが良いのか、化石みたいな先生ばかりのこの学校内ではちよつとした人気者だった。私のほかにも先生のことをイイって思っている子はたくさんいる。でもね、メガネの奥の目が真っ黒じゃなくてちよつと青みがかっていることを知っているのは私だけだと思う。だってほかのどんな女の子も、あんなに先生に接近できるはずがない。

そんな優越感に浸りながら、摂関家の壮絶な権力争いについて説明する先生の顔を見ていた私は最初、教室内のざわめきの理由を理解できていなかった。

「せんせーい、彰子あきこって誰ですかー？」

くすくすって笑いながら、クラスメートが声に出して聞いた。

黒板に書かれているその名前を、指さして。

先生は一瞬なにを言われたのかわからないって顔をしてから、示された黒板を振り返る。赤いチョークで書かれた「彰子」という文字を見て、先生はそりやもう誰が見てもしつかりわかるほど動揺した。顔を真っ青にして、あわてて黒板消しをひつつかんで、赤い文字を消す。勢い余つてとなりの藤原道長まで消してしまったけど、先生はそんなことにも気づいてないみたいだった。

「ごめん、間違えた」

照れたように笑う先生に、教室内は和んだけれど、私はそれこそじゃなかったんだ。

だって、彰子って――。

それからだ。先生は時々ちょっとだけおかしくなった。

黒板に文字を書くとき、チョークを持つ手を一瞬止め、ゆっくり、震える手で書くようになった。授業中にぼうつとすることが多くなった。それから、時々黒板に「彰子」の名前が現れるようになった。何度となく。

私はその名前を見るたびにぎゅっと胸が締め付けられる思いがしたんだ。

先生は、どうしちゃったんだろう。

そればかりが気になって私はテスト勉強どころじゃなかった。テストが始まって、授業はなくなったから先生の「彰子」の文字を見ることがなくなったけど。

午前中でテストを終えて家に帰った私は必死に数学の演習問題を解いていたけど、そんなことより気になるのは先生のことばかり。「ダメだ！」

教科書とノートを一斉に閉じて、シャーペンを放り投げて、なんにも持たずに部屋を出る、のは面倒だったので、いつもやっているように押入から茶色のローファー引っぱりだして、二階の窓から瓦を踏み外さないようにゆっくり屋根の端っこまで這って行って、庭の大きな木に飛び移った。セーラー服のスカートを引っかけないように、気をつけながら。

私の家はちよつと大きい。ちよつとなんてもんじゃないのかもしれない。大きなお屋敷のわりと奥のほうにある私の部屋から玄関までは長い廊下を歩かなければいけないし、居間を避けては通れないから、祖母に見つかって、そんな格好でどこに行くんだなんてう

るさく言われるに決まっている。そんなのこめんだった。

広い庭を突っ切り生け垣を乗り越えて外に出る。良い天気だった。これで明日もテストでなければ最高なのに。

行く先は決まっていた。家から徒歩2分。商店街の隅っこの、喫茶またたび。カフェと呼ぶには古ぼけすぎていて、絶対に同級生は来ないだろうこの場所が私には好都合だった。平日の昼下がりなんてそれこそ訪れるのは近所のおじいちゃんおばあちゃんくらいだ。

中は適度にひんやりとしていて、コーヒーのにおいがしていた。喫茶店のマスターにしてはむさ苦しい髭面のおっちゃんが入れるコーヒーの味がここのウリだった。私はここでコーヒーの味を覚えたんだ。

「こんにちはー」

がらんがらんと重たい鈴の音をさせる扉を開けて中をのぞくと、髭面マスターがこちらを見てにつこりと笑った。

「今日は早いな。サボリか？」

「違うよ！ 家は抜け出すけど学校はサボらないもん。ね、おジイいる？」

「いるよ。いつもどおり、パソコンいじってる」

くいつとマスターが親指で示した先は、大画面で薄型の最新デスクトップがある。この店は見た目はレトロそのものののに、なぜか全部の席にLANが完備してあって、パソコンを持ち込めばインターネットができた。だから、それを知っているサラリーマンには案外、重宝されているのだという。生憎とこの町はビジネス街からは離れているので、利用客は少ないようだったが。一つだけあるデスクトップ席には、大抵は固定客がいた。おジイだ。

「おジイ、なに見てんの？」

もう九十歳だというおジイはマンガの中に出てきそうな真っ白な髭を蓄えた、見るからに正しくおじいさんだ。曲がった腰でパソコンの前に普通に座ると、画面に近づきすぎてしまう。真っ白の眉毛がやけに長くて、瞼が半分くらい隠れていたもので、画面なんか本当

は見えてないんじゃないかと疑いたくなる。

「グーグルアースじゃ」

おジイはパソコンの画面をクリックして私に見せてくれた。

「ここが月並町じゃな。駅がここ、商店街、喫茶店はここかのー。ほれ、趣味の悪い赤い屋根が見えるわい」

「悪かったな悪趣味で」

ちょうど私の水出しコーヒーを持ってきてくれたマスターが、渋い顔で文句を言った。

おジイはそんなこと聞こえてませんみたいな顔して、グーグルアースを使いこなしている。

「この町は綺麗に山に囲まれとる。小さい盆地なんじゃな。線路が通って国道もつながって大分切り拓かれとるが、山を越えるんは大変じゃ」

「ふうん。中学校はどこ？」

「北じゃな、この山の上に見えるじゃろ」

おジイはこの町の話をするのが好きだ。

ずっと昔から月並町に住んでいるからかもしれない。

言い忘れていたけれど、おジイは私の祖父ではない。私の家もずっと昔からこの町にあつて、おジイの家とも仲が良かったから私が小さい頃から知っているってだけ、親戚とかそういうんじゃない。

「高校は？」

「町の外じゃからな、もつと東のほうじゃ」

そう言つて、おジイは町を東西に横切っている線路に沿って、マウスを右にずらす。画面に入りきらないところに、私が今通っている学校はあるらしい。

そうだ、学校。

「ねえおジイ！ 魔法使いはこの町以外にもいるのかな？」

私のいきなりの質問に、おジイはすぐには答えなかった。まあ、普通の人だったらまずこの質問の意味そのものがわからないだろう。ただとおジイは普通の人ではない。

「……おらんわけではないがの。見つけたんか？」

おジイは曖昧な答え方をしてから、尋ねてきた。これには私も曖昧に首を傾げる。

「たぶん。そうなんじゃないかと思うんだよね。でも、分かんなくて、こう、てつとり早く見分けられる方法とかあればいいのにね」

おジイは「魔法使い」だ。けれどもべつに黒いとんがり帽子をかぶっているわけでもなければ、黒猫を従えているわけでもない。足が悪いので杖はついているし、白い髭もそれっぽくはあったけど、見た目は本当に普通のおじいさんだ。

「見分ける、か。方法がないこともないがの。だけど知ってどうするんじゃ。もしかしたら相手は隠しとるんかもしれん」

本当！？と身を乗り出しかけた私に、おジイは眉毛に半分隠れた鋭い目を一瞬、こちらに向けてきた。おジイは優しいんだけど、時々厳しい。魔法使いの話だから余計に、なのかもしれないけど。

「どうって……助けたいんだもん。たぶんね、先生、自分が魔法使いになっちゃったってこと、気づいてないんじゃないかな」

おジイみたいな魔法使いが側にいるなら別だが、普通の人は、ちよつとおかしなことが起きたからってそれで自分が魔法使いになつてしまったなんて思わない。

だけど、この町ではちよつと違う。

言っておくけど、月並町みんながみんな魔法使いのことを知っているわけじゃない。

知ってても、昔からの言い伝えだつてバカにする人もいるし、外から来た人はほとんど知らないはずだ。おジイや、私みたいに古い家の人間は知っているし、実際に魔法使いだったりするけど、そうじゃない人のほうが圧倒的に多いんだ。これは別に最近そうなったわけじゃなくて、ずっと昔からそうだ。魔法使いは一定数いて、ずつとひっそりと暮らしている。減るでもなく、増えるわけでもなく。「わざわざ気付かせてやる必要もないんじゃないよ。知らんほうが幸せなこともある」

おジイの口からそういうことを言われると、そうなんじゃないかって思ってしまう。

そりゃ突然、自分が魔法使いですなんて言われたら、すぐには信じられないだろうし、意味が分からないだろう。

「でも先生、苦しそうで……見てられないよ」

「恋、じゃな」

「ふー！？」

おジイが急に改まってそんなことを言うので、私は思わず変な声を出してしまった。

おジイにはなんでも分かっちゃうんだなあ。それとも私がバレバレなだけ？

「知って対処ができるならそれもいいじゃろ。まあとりあえずは本当にその先生が魔法使いなのか、というところじゃな」

おジイはあごひげを緩く撫でて考え深げな口振りで言うと、その手をキーボードへと伸ばした。そして、ものすごい早さでタイピングを始めた。当然ながらブラインドタッチだ。

「おジイ、なにやってるの？」

私は現代っこのくせにどちらかというとパソコンには疎い。

「スカイプじゃよ」

おジイはこともなげに言った。ちょうど協力を頼めそうな人がオンラインだからと。

「へー。おジイ、スカイプもやるんだ」

「スカイプなら会話もできるしの。タイピングは疲れるわい」

華麗な指裁きを見せたあと、おジイは皺だらけの手をもみもみしてた。うーん、この調子だとツイッターに手を出す日も近いのかもしれない。案外もうやってたりして。

「お、返事が来たぞ。すぐ来れるそうじゃて」

「誰なの？」

おジイのパソコンに表示されている登録名は「メガネ」だった。変な名前。

「来れば分かるわい」

数分もしないうちに、喫茶店の扉が開いた。

入ってきた人物はメガネをかけていなかった。だけど、迷わず奥のデスクトップまでやってきて、おジイを見つけると軽く手を挙げた。隣の私にも気付いて、愛想良く笑った顔は、うん、今風のイケメンだった。ちょっとつり上がった涼しげな目は先生とは違うタイプだったけれど。歳は先生よりも若い。二十歳くらいに見えた。

「ジイさん、どうした？ 俺に手伝ってほしいことって？」

「大学生なんぞどうせ暇じゃろ。アルバイトせんか？」

「いや、ちゃんと授業あるし、バイトだって別でしてるし」

彼は文句を言いながらもおジイの頼みを断る雰囲気はなかった。

「この子、見ればいいの？」

むしろ今すぐやるよ、という感じで、彼はおジイに尋ねる。この子、というのは私のことらしい。

「いやいやこの子は違うんじゃない。見てほしいのはこの子の恋の相手じゃよ」

「おジイ！」

さすがに初対面の相手の前では恥ずかしすぎる。あっさり暴露しないでもう！

「長い間生きてるくせにまだ乙女心が理解できねえのかジイさん」

「今度ウィキペディアで調べてみるかの」

二人はずいぶんと仲が良いみたいで、遠慮ない口調で言い合っていた。私が顔を真っ赤にしているのをよそに。

「ねえおジイ、本当に先生が魔法使いかどうか分かるの？」

失礼かとは思ったけど、私は半信半疑で目の前の彼を見た。

「できるとも。吏一はそういう魔法を持つとる」

ああやつぱり、この人も魔法使いなんだ。おジイの周りには魔法使いばかりだ。私は妙に納得した。

「先生はまだ学校におるかの。しっかりやるんじゃないよ、吏一」

「学校かよ」

吏一君はちよつといやそうな顔をしたけれど、今さら行くのをやめるとは言い出さなかった。

「行って確かめておいで」

「うん、ありがとう。おジイ」

おジイの骨と皮だけみたいな首元にちよつとだけぎゅって抱きついてから、私はお礼を言った。

これが、物語の始まり。

私の恋の物語。

そして、私の町の魔法使いたちが、決して派手ではないけれど、密かに活躍する小さな物語だ。

セーラー服を脱がさないで(2)

俺はジイさんには逆らえない。

べつにジイさんが強い魔法使いだからとかそんなんじゃないで、単純に借りがあるのだ。

よくある話だが、俺が昔いわゆるやんちゃをやって、親からも友達からも見離されていたとき、ジイさんだけは俺のことを見捨てずにいてくれた。それで俺は大学に行けるほどともに戻れたわけで、ジイさんがいなかったら俺の人生は全く別のものになっていただろう。

だから、ジイさんの頼みならば断る理由がなかった。それに、運がいいことに助手席に乗る女子高生は結構可愛い。彼女が通う隣町の高校まで、電車よりも車の方が早いからと助手席に乗せて——いや、べつに変なことをしようなんて気はさらさらない。俺はジイさんを裏切ることだけはしたくないから。

「名前なんていうの？」

緊張しているのか、表情の硬い彼女の横顔をちらりと盗み見てから、俺はなるべく優しく聞こえるような口調で話しかけた。

「……おジイたちは、あきちゃんって呼ぶよ」

答えには、言葉を選ぶような妙な間があった。どことなく、フルネームは？とは聞きにくい雰囲気だ。警戒されているのか、あるいは名前を知られたくない理由が何かあるのか。俺の考え過ぎか。

ジイさんの周りは大抵、なにかしら複雑な事情を抱えている人が多いから、俺はあまり気にしないことにした。

「あきちゃん、先生が魔法使いだって思ってたんだって？」

隣の少女が無言で頷く。癖のあるショートカットの毛先が、ふわりと小さく揺れた。

「俺、まだ魔法使いのことよくわかんねえんだけど、あきちゃんもそうなの？」

俺が魔法使いになったのは、実はほんの3年前のことだ。魔法使いになるつつつても、別に何か修行をしたわけじゃない。呪文を覚えただけでも、箒で空を飛べるようになったわけでも。

魔法使いになるには、何かきつかけが必要らしい。俺の場合は、大学受験のストレスだったようだ。たぶん。おそらく、そうじゃないかと思っている。

「分かるんでしょ？」

あきちゃんは、思いのほか挑戦的な口調で返してきた。

「いや、眼鏡かけねえとわかんねーんだ。あきちゃんはいつから？」
「小学校6年生のとき。……吏一君、ねえ、どんな魔法が使えるか、とかも分かっちゃうの？」

「人の魔法のこと、あんまり聞いちゃいけないんだってジイさんは言ってたよ」

あきちゃんはこちらを振り向いた。斜めに流した前髪の隙間から、ぱつちりとした大きな目が見つめているのを俺は運転に集中しているフリをして気付かないように努めた。

魔法使いは、自分の魔法のことをあまり人に喋ってはいけない。ジイさんから教わったことだ。多くを知られると悪用される可能性も出てくるから、なるべく知られずにいるならそれが一番いいんだと。

年寄りの言うことは聞いておくにかぎる。まあ、あきちゃんみたいな子に教えたって害になるとは思えないけど。

「拗ねるなよ。あきちゃんだって、俺が聞いても自分の魔法のこと言わないだろ」

「吏一君、彼女いるの？」

突然話をころつと変えた彼女に、俺は一瞬ついていけなかった。女の子ってわかんねえな。

「もしいたら、いくらジイさんの頼みでも女子高生を助手席に乗せて不用意に走ったりしてません」

残念ながら。

「そつか、そうだよね」

「こら、納得するな」

「もったいないね。吏一君かっこいいのに」

あきちゃんに慣れてきたのか、急に素直になった。そうだろう、と答えかけた俺を無視して、彼女はほかの誰かを思い出したらしい。

「先生の方が、かっこいいけどね」

その言い方がちょっと誇らしげで、いじらしくて、なぜか俺の方が照れる。

そんじゃまあ、俺よりかっこいいという先生の顔を拝みに行きま
すかね。

国道をひたすら西へ。

隣町へと抜け、途中で県道に逸れて川沿いを北上すると、あき
ちゃんの通う高校はすぐだ。

結論から言うと、あきちゃんの好きな先生はそれほどイケメン
でわけではなかった。正直、俺の方が勝ってる。

社会科準備室の窓から俺とあきちゃんは不審者よろしく中をのぞ
き込み、先生の顔を拝見することに成功したわけだが。

先生はまだ二十五歳だというのにもう少し老けて見えた。あき
ちゃん曰く、本当はもっとカッコイイのだそうだ。ただ、ここ数週間
でずいぶんと老け込んでしまったのだと。

「悩んでるんだよ、先生は。自分が変なんじゃないかって」

ああ、そつか。その気持ちは分かるよ。

魔法使いならば、きっと誰もが一度は通る道だ。俺だってジイ
さんがいなければ、受験ノイローゼで自分の頭がおかしくなっちまっ
たんだと思って狂っていただろう。

「吏一君、先生を助けてあげて。魔法使いだってことが分ければ、
救ってあげられるかもしれない」

あきちゃんが期待のまなざしを俺に向けてくる。まったく、恋す
る女の子の視線はなんでこんなにもキラキラと曇りないのだろう。
「任せなさい」

頼もしい返事とともに、俺は胸ポケットから眼鏡を取り出した。

俺の魔法は、これがないと始まらない。

スクエアタイプの黒ぶち眼鏡には度が入っていない。だけど、かけると少しだけ、世界が変わった。

彩度の落ちた世界の中、見えないものが見えてくる。

先生の周りには、ぼんやりと赤い色が泳いでいた。

正解。

「魔法使いだ」

見分け方はわりと簡単だ。普通の人間の周りには、なにも色が無い。

「本当に！？ 先生、魔法使いなの！？」

少しだけ声を大きくしたあきちゃんの方を見ると、彼女の周りにも色が見えた。彼女のそれは、海の色だった。

「間違いないよ。色が薄いから、たぶん最近なっただけだと思っ何につて、魔法使いに、だ。」

「何があつたんだろ……」

魔法使いになるには何かきっかけがあつたはずだ。あきちゃんは先生がなんの魔法を使えるのか、ということよりもそちらのほうに興味があるようだった。いいけどね。

「あなたたち、何かご用かしら？」

後ろから、不意に割って入ったのは少し強めの女性の声。

「あなた、卒業生？」

私服で茶髪の俺をじろじろと見て、教師なのだろう——女は容赦なく問いかける。俺は上手い答えを探しながら、隣のあきちゃんに目を向けた。教師もつられるようにしてあきちゃんへと視線を移す。

「あら、あなた、学年章がついてないわね。何年生？」

「一年生です」

「何組？」

「二組です」

「本当？ 二組なら受け持ちクラスだから大体の子の顔はわかるは

ずなんだけど……」

女教師は怪訝そうに眉をひそめている。あきちゃんの顔をじっと見ようと距離を詰めたが、あきちゃんはさっと俺の背中に隠れるようにして俯いた。

「吏一君」

あきちゃんが俺の服の裾を引っ張る。助ける、という意味なのかと思ったが、違った。

何が起こったのか、俺はよく理解しないままに物凄い力で引っ張られて、走り出していた。

前に行くあきちゃんが俺の手を取って走っている。あきちゃんの細い手は思ったよりも頼もしく、しっかりとしていた。ていうか、握力が強すぎて痛い。そして驚くほどに、足が速い。

俺は情けないことに彼女に引っ張られるままだ。

女教師など当然ついて来られるはずもなく、あっという間にまいて学校の外に出てしまった。

「あき、あきちゃんっ！ちよっ、ストップ、止まって！」

俺、もうダメ。息も絶え絶えに訴えるとあきちゃんはようやく止まってくれた。死ぬかと思った。俺は必死で息を整えているというのに、あきちゃんはけろっとした顔をしている。

「あきちゃんて……陸上部、とか？」

「違うよ」

あっさりと首を横に振って否定するあきちゃん。じゃあこの違いはなんだ。これが10代の力か。

これだけ足が速かったら、相当いいところまでいけるんじゃないか……。もったいないなと思うと同時に、高校時代に部活動などやろうともしなかった自分が言えることではないなと思い直した。

それよりも、

「あきちゃん、べつに逃げなくても、適当に誤魔化せばよかったんじゃないの？ あきちゃんはちゃんと生徒なんだしさ」

「……うん、そうだね。ごめんね、吏一君。私、全然頭回らなかった

た」

どこか自嘲気味のあきちゃんは、話をそらすように息をつく。

「あーあ。先生、やっぱり魔法使いだったんだね」

「どうすんの？」

あきちゃんは乱れた髪の毛を手櫛で整えながら振り向いて、ちょっと困ったような顔をした。

「先生に、魔法使いだってこと言うの？」

重ねて問う。

「……うーん、吏一君、お願いがあるんだけど」

そう言って、可愛らしく小首を傾げるあきちゃんの願いを、俺は断ることなどできるはずもなく……。

翌日、俺は再び先生に会いに来ることになる。今度は一人で、だったが。

仕事を終えて帰宅する先生の後をつけるのは難しくはなかった。

先生の自家用車はよく目立つ緑色をしていたし、国道に出るまで道は一本だ。月並町に入ってほどなくして、先生はアパートの下に車を止めた。

さて、どうするか。

近くのコンビニに車を止め、牛乳とあんパンを調達。一回やってみたかったんだよな、張り込み。

あきちゃんのお願いはこうだった。できるかぎり先生を助けたいが、自分の存在は知られたくない。だから代わりに、俺になんとかしてほしいと。

要は丸投げだ。

そのいじらしいお願いを二つ返事で引き受けてしまった自分も自分だが。

あんパンを牛乳で流し込んで、一息つく。時刻は九時を少し回ったところだ。

「そろそろ行くか」

あれこれと作戦を練ってみたものの、見知らぬ自分が先生に接近する良い方法など残念ながら何も思いつかなかった。正攻法しかない。

佐々倉と表札のかかった扉のチャイムを鳴らす。

「ごめんくださーい」

なるべく不審者にならないよう、明るい声で呼びかける。心の準備はしていたはずだった。

しかし、

「はーい」

応えたのは高い声。

同時に、扉から顔を覗かせた女の顔に、俺は用意していた台詞をすべて忘れた。

「あら、あなた！」

「……」

「夕方学校にいた子よね？」

「……すみません」

強い口調と視線に反射的に謝ってしまう。そもそも教師という人種は苦手だ。それが気の強そうな女教師ならば、なおさらだ。

落ち着こう。ここは佐々倉先生のアパートだ。それは間違いない。ではなぜ、先ほど学校で会った女教師がここににいるのか。

答えはひとつしかない。

「ここ、佐々倉先生んちですよね」

「……佐々倉は、少し外出してるわ。あなた、一体どういう……」

「あ、俺、佐々倉先生……佐々倉先輩の、後輩です。後輩。今日学校に行ったのも先輩に用があったからで……一緒に居た子は親戚なんですけど、実はあの子、佐々倉先輩のファンなんですよ。恥ずかしがって逃げちゃってすみません」

一気に喋ってから、勢いよく頭を下げた。嘘は得意ではない。すぐ顔に出てしまう。頭を下げたおかげで表情も隠れたのが幸いだっ
た。

「……そう、なんだ。じゃあ、あがって待ってなさいな。すぐ戻って
くると思うから」

「えっいや、そんな、夜遅いですし出直してきます！」

「わざわざ訪ねてきてくれたんでしょ？ 悪いじゃない。いいから入
って。ほら、早く」

教師というのはなぜやたらと世話焼きな上に人の意志を無視しが
ちなのだらう。偏見たつぷりなのは認めるが、だから、苦手なんだ。
上手く断れずに部屋にあがるはめになった俺は、コーヒーまで出
されてしまった。逃げるに逃げられない。

先生が帰ってきたら、嘘は一発でバレてしまう。

先生の部屋は男の一人暮らしの割にはきれいに片づいていて、目
の前にいるこの女教師がこまめに訪れているんだらうという気がし
た。

あきちゃんが知ったら、悲しむだらうなあ。

先生のことを好きだという彼女の思いを知ったその日に、本人よ
りも先にその思いが叶わないことを知ってしまうとは……。

ま、教師と生徒なんて現実的じゃないよな。

女子高生が担任教師に抱く恋心など、憧れに毛が生えた程度のも
のだらうと俺は思っている。

コーヒーを入れてくれた女教師は、ローテーブルを挟んで俺の向
かい側に座った。部屋でくつろいでいるからか、昼間ほどの威圧感
はない。

「あの、佐々倉先輩と……付き合ってるんですよね」
一応確認しておく。

「え、ええ……親戚の子には内緒ね。て言ってももうすぐバレちゃ
うんだけど」

少し照れたようにはにかんだ女教師は、年下好きな俺でもちよっ

と可愛いと思ってしまった。

「結婚するんですか？」

「うん」

あきちゃん、失恋確定。

「おめでとうございます」

「ありがとう……」

「……どうかしました？」

「えっ？」

「気がかりなことがあるんじゃないですか？ 佐々倉先輩、最近元気ないんですね。それとなんか関係ありますか？」

「一か八か、カマをかけてみる。そろそろ先生が帰ってくるんじゃないかと気が気ではないが、問いかけはほどよく確信を突いたようだ。」

「そうねえ……元気ないというか、様子は変ね。生徒の話だと、黒板に時々、彰子って、書くらしいのよね。本人は何も話してくれないけど、ね」

女はそこで一度言葉を切った。黒板に女性の名前の件は、俺もあきちゃんから聞いて知っている。それが先生の魔法なのかどうかは、まだ分からないが。

「プロポーズの後くらいなのよね。おかしくなったの……本当は、結婚したくないのかしら」

笑い飛ばすようにして言った言葉は、妙に痛い。

「でも、結婚しなくなったらプロポーズなんてしないと思いますけど」

「違うわよ……」

「え？」

「プロポーズしたのは、わ・た・し！」

「ええっ？」

「女からなんて、やっぱりするもんじゃないわねー」

サバサバと言ったのけた彼女は、横を向いてふっと息を吐いた。

そんな自分を諦めてるみたいに。

「や……あの、なんかすみません」

気まずい。逃げ帰りたい衝動をかるうじて押しとどめながら、俺はふとテーブルの上に眼鏡が転がっているのを見つけた。フレームのないタイプの。

「これ、佐々倉先輩のですか？」

不自然にならないようにそれを取り上げて、眺めてみるフリなんかしたりして。

彼女は頷いて肯定する。

好都合だ。

「先輩、目え悪かったんですね」

知らなかったなーなんて言いながら、自分の眼鏡を外して、先生のものに掛け替えた。

ぼんやりとした視界は、色を変える。

「外ではコンタクトなの。かけるのは家と休日だけよ」

答える彼女の顔が、先ほどよりも可愛く見えるのは先生の眼鏡というフィルターを通して見ているせいだと分かっているけど、少しだけドキドキして困った。

「……なるほどね」

人の眼鏡をかけると、俺はほんの少しだけ、その眼鏡の持ち主のことが見えてしまう。

先生の眼鏡で、見えたことは三つだ。

一つは、先生の魔法がどういう魔法なのかってこと。

「先輩に、伝えてあげてください。授業で赤チョークは使わないほうがいいってことを。たぶん、それで悩みの一つは解決しますよ」

魔法使いには、魔法を使うための道具が必要になる。俺の場合は眼鏡。おジイの場合はパソコン。あきちゃんのは知らないけど、彼女には彼女の道具があるはずだ。

先生の場合は、赤色のチョークだ。それを使って黒板に文字を書くとき、先生の魔法は発動する。

「どういう意味なの？」

「騙されたと思って、しばらく試してもらえば分かります」

分かったこと二つ目。先生の悩みはもう一つある。たぶんそっちが、先生が魔法使いになるきっかけだろう。

「先輩、結構言いたいこと言えない人でしょ」

俺は正直、先生のことなんてよく知らない。あきちゃんの恋するフィルターのかかった情報と窓から顔を見た程度で。だけど眼鏡をかけると分かった気になれるから本当に不思議だ。魔法ってそういうもんなんだろうけど。

「あなたに言いたいことがあるみたいです。ちゃんと聞いてあげてくださいね」

「言いたいことって、何？」

俺がそれを伝えるのはあまりにも無粋だろう。

「……何してんだ」

割り入った声は、掠れていた。

たぶん、困惑と怒りで。

まずい。

「先輩！ 待ってましたよー。でも俺、用事は済んだんでもう帰りますね」

眼鏡を外した俺は立ち上がり、玄関へと続く廊下に立ちすくんでいる先生へと大腿に近づいた。

先生が何かを言う前に、その肩を軽く叩いて、

「男ならビシッと決めるよ、佐々倉先生」

先生だけに聞こえる声でハツパをかける。俺も案外お節介だな。

「——じゃあね、彰子さん」

先生の眼鏡のおかげで名前を知ることができた女教師にだけ挨拶を残して。

不意をつかれた先生が我に返る前に、俺は逃げるようにしてその場を離れた。

もう一つ、3つ目の分かったことがあるのだが、それはもう俺の

手には余る問題だ。そこまで世話焼きにはなれない。

その後、二人がどんな会話を交わしたのか俺は知らない。

二人には二人の物語があつて、そこには俺は含まれない。今回はたまたま片足を突っ込んでしまったが、これ以上は野暮つてもんだろ。

俺の物語はまた別のところにあつて、それを続けるためには一つの問題をクリアしなければいけない。

——さて、このことをなんて言つてあきちゃんに伝えよう。

セーラー服を脱がさないで(3)

吏一君は、嘘が下手。

喫茶またたびで向かい合わせに座って、私は吏一君から昨夜の報告を聞いた。

吏一君には、二つのことが分かったんだって。

一つ目は、先生の魔法のこと。

先生は、赤色のチョークを持つと、心の声が漏れてしまう。

だから、黒板に「彰子」って書きちゃったんだ。赤色のチョークを持っている時に「彰子」のことを考えていたから。

しばらく赤チョークを使わないようにって吏一君が先生に言ってくれたから、きつともう、大丈夫。魔法使いは、道具が手元になければ魔法を使えない。

二つ目は、先生には「彰子」という妹がいて、最近悪い男と付き合っているようなのでそれが心配だということ。心配だったから、授業中もつい妹の事を考えてしまったんだって。

「吏一君、それ、先生本人から聞いたの？」

「そうだよ」

「嘘つき」

吏一君が一瞬目を見開いて固まった。

どれが本当でどれが嘘なのかは分からない。だけど、全部が本当じゃないってことは私には分かっちゃった。女の感ってやつかな。なんてね。

吏一君は困ってた。たぶん、本当のことを言おうかどうか迷ってる。先生に口止めされたのか、私に知らせるべきじゃないことなのか。両方かもしれない。

「覚悟はしてるよ」

最初から、障害のある恋だから。実る可能性のほうが低いってこと、私はちゃんと知ってて好きになったんだ。

だから、傷つく覚悟はちゃんとしてるんだよ。

眉間にしわを寄せた吏一君が考え込むように黙ってしまったので、私は待った。マスターの入れてくれたコーヒーを飲みながら。

ああ、苦いな。砂糖を入れないな。

だけど、苦いのもおいしいって思うんだよ。私だって。

ストローで氷をかき混ぜて、カランカラン。良い音。

その音に目を覚ましたみたいに、やっと、吏一君が顔を上げる。

真っ直ぐにこちらを見つめる吏一君の涼やかな目は、夏がよく似合う気がした。

「あきちゃん、先生に告白しに行こう」

吏一君、何を言い出すの？

急に、夏ばてになったような疲労感。まだ、倒れちゃいけないのに。今日でテストがやっと終わって、明日はクラスマッチなんだよ。

現実逃避する思考。だけど吏一君は逃げることを許してくれない。

「先生のことが好きなんだろ？ どうせもうすぐ夏休みだから、気まずい思いで授業受けなくても良いし」

「何それ。振られること、決まってるみたい」

「あれ、上手くいくって思ってたの？」

意地悪だ。

上手くいくなんて思ってない。思ってないけど、仮定と決定は違う。

「覚悟してるんじゃないの？」

吏一君は、意地悪だ。

私の覚悟が口先だけだったことを見抜いてる。

返す言葉が見つからなくて、誤魔化すようにしてストローを吸う。

ああ、もう。

我慢できずに、アイスコーヒーにガムシロップを二つ投入した。

やっぱり、苦い。

「あきちゃん。俺から聞くより、先生から直接聞いたほうがいいんじゃないの」

でろでろに甘くなったコーヒーに、ちょっとだけ口をつける。

私はまだ迷っていた。

「今夜、先生んちに行こう」

「え!？」

突然すぎるよ吏一君。

「時間がないんだ」

だけどその声が真剣で、やさしかったから、私は嫌とは言えなかった。言う隙がなかった。

考える時間はまだあるから、と夜にまた会うことを約束して、吏一君はバイトに行ってしまったのだ。

「どうしよう……ねえ、おジイ」

くるりと振り向けばいつものデスクトップ席におジイが一人、画面と睨めっこをしている。

「心配せんでも、あきちゃん可愛い。自信を持てばいいんじゃないよ」

「そういう問題じゃないと思うんだけどな」

可愛いは否定せずにありがたく受け取るけど。

「そういう問題じゃよ。自分に自信を持って当たって砕けてくればええ」

「おジイまで!」

失恋することを最初からわかっていて伝える思いに、意味なんてあるのかしら。

「それって自己満足なんじゃないの?」

「それはわからんよ。自己満足でしたことが誰かのためになることもある。逆も然りじゃ」

「先生次第ってこと?」

おジイは軽く頷いた。

「わしは吏一がわざわざ告白してみると言うことには何か意味があ

と思うとるよ。あれはあまり人にどうこうせいとは言わん子じゃ」
吏一君の目を思い出す。先生とは違う。くつきりとした涼しげな二重。

先生の目はどちらかというところぼやっとして重たげだ。だけど笑った顔がすごくやさしくて、大好き。

「私、先生に好きって……伝えたいのかな」

見ているだけで十分で。ただ、苦しんでいる先生のことを助けたかっただけで。

「あきちゃんの好きにしたらいいんじゃないよ」

それがわからないから困ってるんだよ、おジイ。

吏一君は考える時間をくれた。吏一君のバイトは八時まで。まだ十分に時間はある。

教科書とノートを広げて明日の英語のテスト勉強を始めてみたけれど、こんな状態で集中できるはずがなかった。考えなくちゃ。

私が先生と出会ったのは、入学式の日だった。

一目惚れだったんだ。

入学式が終わって、みんなが教室でホームルームが始まるのを待っているときに、私はなぜか一人、教室に戻れなくなっていた。恥ずかしい話なんだけど、迷子になっちゃって。

先生を廊下で見つけたのは本当に運が良かった。

「あのっ教室、教室ってどこですか？」

私は半ばパニックになっていて、自分が何年何組かもまともに伝えられない。なのに、先生は私を安心させるように、にっこり笑って、

「俺も今から行くところだから、ついておいで」

「え、え？」

先生が私の担任だったことも、すでにクラスの生徒全員の顔と名前を覚えているってことも、私は教室に無事に戻って席に着けてか

らやつと、理解した。

その後も、先生はいつもやさしくて、笑顔が素敵で、ちょっとだけ頼りない時もあるけど、毎日顔を見るたびに、先生に惹かれていく自分がいた。好きだなあって自覚するのに、そんなに時間はかからなかったよ。

「考えてもわからんことはたくさんあるんじゃない」

おジイの言葉はいつも正しい。

結局、英語の長文問題を解き終えても、先生に告白するべきか、答えは得られなかった。

バイトを終えた吏一君が戻ってきてても、まだ。決まらない。決められない。

私の気持ちは、その程度だったってことなのかな。

「吏一君は、どうして私が先生に告白したほうがいいって思っの？」

「あきちゃんに後悔してほしくないから」

「逆に、告白して、後悔しちゃったら……？」

私が後悔するかどうかなんて、吏一君に分かるのかしら。そんな、ちよつとした反抗心みたいなものも混じっていた。

「それって、先生が酷い振り方した時だろ？ あ先生があきちゃんを傷つけるような振り方すると思っの？」

吏一君がちよつと怒ったような顔で言う。

困ったな。吏一君の言うとおりなんだもの。先生が、酷いことなんて言うはずがない。告白したことを後悔させるような振り方をするはずがない。

「吏一君のほうが先生のことよくわかってるみたい」

吏一君は不本意そうな顔をしたけど、私はちよつとだけ悔しい。

「でも、私、振られるんだよ……」

最初から諦めているはずなのに、振られるのは怖いなんておかしい話だ。だけど躊躇ってしまう。わざわざ自分で崖に突っ込んでい

くような勇氣は私にはない。

「あきちゃん。振られる機会もないまま諦める恋の方が、苦しいんだよ」

「え……？」

吏一君の言葉の意味を掴みかねて、

「好きって事を伝えられないから、振られる事もできない。振られてないから、諦めたくても諦めきれない。がんじがらめになるよ」

「それって……」

真っ直ぐに私を見る吏一君の目は怖いくらいに真剣で。

聞けなかった。

それって、吏一君自身の話なの？

「ごめん。変なこと言った」

表情を緩めた吏一君が視線を外す。

「後悔、するかな」

「わからない。俺は、あきちゃんには後悔をしてほしくない。だけど強制はできないから、あきちゃんは今の自分の気持ちに正直に従ったらいいと思う」

自分の気持ち。

気がついたら、セーラー服の裾をぎゅっと掴んでいた。

「私ね、先生のこと見てただけなんだよ。本当に。遠くから。それで、満足してたんだよ」

話しながら、もうそれが過去形になっていることに私は気付いていた。

「でも、先生が魔法使いかもしれないって思ってた……」

急に、距離が近くなった気がした。もっと近づけるかもしれないと、期待してしまった。

生徒と先生ではなく、魔法使いと魔法使いのだと、同じ存在なのだと。

本当は、先生の事を心配していたわけじゃなくって、好きな人との共通点を見つけて単純に喜んでいただけなのかもしれない。

でもね、苦しんでいる先生を見てられなくって、助けてあげたいって思ったのも、本当なんだよ。

好きな人、だから。

「私、先生には笑っていてほしいな」

「こんな可愛い子に好きって言われて、喜ばない男はいないよ」

「本当？ 困らないかな、先生」

「困るのはモテる奴の特権だな。あきちゃんがどれだけ先生のことが好きで、どれだけ先生がいい男か教えてやればいい。そうすれば、先生はしばらくあきちゃんの事が忘れられなくなる」

「しばらく、なんだね」

「残念だけど」

吏一君は正直だ。

一つも期待を抱かせないまま、私の背中を押すんだ。

「あきちゃんのことをずっと考えてくれる男が欲しかったら——ま
ずは先生への恋を終わらせないと」

おどけた調子で付け足された言葉は、振られる私には何の慰めにもならない。

でも、決めたよ。

後悔しないほうを、選んでみようかなって。

一瞬でもいい。先生の頭のなかを、「彰子」じゃなくて「あきちゃん」でいっぱいにしてやれたら、それもいいかなって。

「お願い、吏一君。私を先生のところに連れて行って？」

おジイやマスターに見送られて、私は再び吏一君の車に乗り込んだ。

さあ、ここからクライマックス。私のどきどき告白タイム。どうか上手くいきますように、祈ってくれたら嬉しいな。

セーラー服を脱がさないで（４）

平日の夕方、町の片隅にある小さなカフェバー『ムーン&リバー』に訪れる客はまばらだ。真新しい椅子に腰かける客から見えない位置で、店長とバイトがお喋りに興じる暇が十分にある程度に。

現時点での客入りの程度でいえば、喫茶またたびにさえ負けている。夜の時間帯は多少増えるとはいえ、経営が心配になってくる。

当の店長はというと、呑気に自分で入れたコーヒーを啜っている。俺の話を聞いているのかいないのか、曖昧な相槌を打ちながら。

で、話を聞き終わっての最初の一言が、

「ロリコンだな」

客が少なくて本当に良かった、と思った。事実ではないにしても、いらん誤解をしてもらっては困る。

「どこがロリコンだよ」

「だって、高校生だろ？ お前、今いくつだっけ？」

「二十一。余裕だろ」

「六つ差か。際どいな。考えてみるよ、お前が高校生の時、その子はまだ小学生だぜ？ ロリコンだろう」

「そりゃその年齢で考えるとそうだけど、俺は今もう二十一なわけだ、あの子も高校生だし、つか、過去を見るな。未来を見る！俺が三十の時にはあの子は二十四だぜ？ いいじゃん。大体、あきちやんの好きな先生なんか二十五歳だ」

「あー、あの年頃の子って年上好きだよな。若い先生とか一番手っ取り早いんだろうね」

「だろ？」

「でもな、俺は問いたい」

急に、店長は改まって俺に顔を向けた。雇われ店長——川岸幸助^{かわぎしこうすけ}は、童顔だ。そりゃもう、スーツを着ていても高校生と間違えられくらいに。実年齢は俺よりも、佐々倉先生よりもさらに上のはず

だ。前に聞いたけど忘れた。男の年齢になど興味はない。

で、その童顔が真面目くさった顔で言うのだ。

「お前、その子のこと好きなくせになんでわざわざ告白すすめるわけ？ どうせ先生は結婚しちまうんだろ？ 待ってりゃいいじゃん。もし、まかり間違って先生が女子高生にクラっとしちまったらどうすんの？」

「先生は揺らがねーよ」

「婚約者、美人だった？」

「いや、まったく俺の好みじゃねーけど、先生は相当惚れてた」
「なんで分かるかって？ 先生の眼鏡で見たからだ。先生のフィルターを通して見る彰子さんはびっくりするほど綺麗だった。」

もちろんそんな説明を川岸にはしない。彼に話して聞かせたのは、あくまでも当たり障りのない部分だけだ。

「お前はロリコンだからな。大人の女の良さは分かるまい」

「自分こそ高校生みたいな顔しやがって」

「知らないだろ。俺の顔は年上受けいいんだぜ？」

勝ち誇った顔を向ける川岸を無視して、俺は店内の時計を見上げた。時間が早く過ぎればいい。バイトが終わったらすぐにまたたびに行つて、あきちゃんと一緒に先生の家に行く。彰子さんがいなければいいのだが。

あきちゃんと彼女を会わせてしまうのは、まずい。彼女はあきちゃんの学校の先生だし、一応口止めもされている。何より、あきちゃんのシヨックを考えると、鉢合わせは避けるべきだ。知っていることと目の当たりにすることは違う。

「ま、成功することを祈ってるよ」

「おう。……いや、成功したらダメなんだけどな」

「違う。お前が、失恋した女子高生が弱つてるところに付け込んで上手くモノにできることを祈ってる」

「……」

そんなつもりはない、と言ったら嘘になる。だけど、決してそん

な邪な気持ちだけじゃないんだ。

あきちゃんのため。それだけじゃない。あの先生にもきつと、あきちゃんの告白は力になる。先生の赤チヨークの魔法をセーブする鍵にもなるかもしれない。

その辺りの事は、先生の眼鏡をかけた自分だから分かることだ。

魔法で得た感覚を、川岸にうまく説明できる気がしない。

だから、いいさいいさ。俺のためにも、あきちゃんの恋を終わらせることが必要なのは、間違いじゃない。

そうは言ってもなかなか上手くいかないのが現実だ。

結論から先に言えば、俺の恋は始まらなかった。

バイトをさつさと上がって、またたびにあきちゃんを迎えに行つた俺は強引に彼女を説得して車に乗せ、先生の家へ。時刻は八時半を回っていた。

事件はそこで起こった。いや、起こっていたと言うべきか。

先生のアパートに着いた俺とあきちゃんが目撃したのは、黒服の厳つい顔をした男どもに両脇を固められ、強制的に路地裏へと連れ込まれる先生の姿で。

「なんだあれ……」

「吏一、くん。今の、先生だよね……？」

助手席に座っているあきちゃんの顔は可愛そうなくらいに真っ青だ。

先生は眼鏡をかけていた。ということは、家に居たところを連れ出されたのか。彰子さんは大丈夫だろうか。

車から降りて先生の様子を見に行くべきか、迷った。情けないことに。

会話だけでも聞こえないかと運転手側の窓を少しだけ開けてみる。響いてきたのは男の怒号。先生の声ではない。脅すような声音に、

不穏な空気を感じとる。分かつてはいたが、どう考えても友好的な関係ではない。

窓を開けたのは、完全に俺の失敗だ。

「あきちゃん！」

居てもたつても居られなくなつたのか、ドアを開けて飛び出したあきちゃんを俺は止められなかった。俺も後を追う。ちくしょう、相変わらず足はえーな。

先生が連れ込まれた細い路地に、あきちゃんは迷わず飛び込んでいく。

「危ないから、待てって！」

俺の制止の声なんか、あきちゃんはちつとも聞こえてないようだった。あきちゃんの向こう側、胸倉を捕まれている先生の姿が見える。

鈍く、嫌な音がした。黒服の一人、背の高いスキンヘッドの男が、先生を殴つたのだ。

眼鏡が吹っ飛ぶのが見えた。

「先生っ！」

あきちゃんの悲鳴みたいな高い声が、響いて。

黒服がこちらを見た。なのに、あきちゃんは怯むことなく突っ込んで行く。

スピードを緩めるところか加速して、男たちの数メートル手前で、飛ぶ。

翻るセーラー服のスカート。

真っ直ぐに伸びた細くて綺麗な足。

男の顔面にめり込む、茶色のローファー。

かるやかな飛び蹴りが、目の前で炸裂する。

これは現実なのだろうか。

あきちゃんが飛んで、黒服の男を一人、蹴り倒してしまった。

セーラー服の可愛い女の子が、だ。

頼む、誰か夢だと言ってくれ。

倒されたスキンヘッドは意識こそあったが呆然としていた。背の低いもう一人の男も、だ。

殴られた左頬を少しはらした先生も。

そして、こうして状況説明をしている俺も、正直なところ何かなんだか分からない。

「先生に酷いことしないでよ！」

呆然としてばかりの男どもの意識を引き戻したのは、あきちゃんの力強い声だった。

眼鏡をかけなければ。

なんでか分からないが、そうしないといけない気がした。たぶん、見なければいけないものがある。

「関係ねえガキは引っ込んでろ！」

男たちもさすがに女子高生相手にやられっぱなしはまずいと思ったのだろう。立ち上がったスキンヘッドがあきちゃんに凄む。

胸ポケットから取り出した眼鏡をかけた俺は、あきちゃんの背に、青い炎を見た。

やばい。これは、目がやられる。

焼けるような痛みを目の奥に感じて、たまらず眼鏡を外す。なんだ、今のは。

「関係なくなかないわ！　だって、だって私は……」

あきちゃんも急に勢いをなくしてしまう。そりゃそうだよな。なんで見知らぬおじさん経由で先生に告白せにやなんのだ。そんなのは可哀想だ。かと言って今の状況を俺がどうこうできるかというところちょっと難しい。情けねえな。

俺がただ突っ立っている間に、スキンヘッドがあきちゃんに近寄る。薄ら寒い笑みを浮かべて。

「ああ、そうか。分かったぞ。お嬢ちゃんは先生の生徒か。先生、まずいなあ。ダメだろ、教え子に手え出しちゃあ」

「え？」

これぞ悪党のテンプレみたいな奴だな。

「何言い出すんだ。関係ない子を巻き込むのはやめてくれ」

「関係なくないってこの子は言ってたぜ？　なあ、先生」

ああ、こりゃヤバいかな。

俺は胸ポケットから眼鏡を取り出して掛ける。

あきちゃんの周りだけ、空気が青い。しかし今の彼女のその色は酷く不安定だ。薄くなったり緑がかつたり。その色の不安定さは、そのまま彼女の魔法が不安定になっていることを意味する。

「……やめてよ！　先生は、私なんて相手にしてないんだから！」
自分が傷つく言葉をあきちゃんは自ら口にして、泣きそうな顔をしていた。

「だから、先生なんか、だいつきら、い」

とどめを刺す。自分の心に。

すっかり気迫の消えたあきちゃんの手首を、男が掴んだ。

あ、こら。あきちゃんに触ってんじゃねえ。

俺が動こうとしたときだ。

タイミングの悪いことに、思わぬ台詞が飛び込んできたのだ。

「何やってんのよ兄貴！」

聞き覚えのある強い口調。

路地の反対側の入り口から現れた彼女を見て、俺は大体のことを理解した。

俺が、先生の眼鏡を掛けたときに分かったこと3つ目。

先生は悩んでいた。

自分からはちゃんと彼女にプロポーズをしていないことと、彼女の兄に結婚を反対されていることを。

つまり、このあきちゃんに見事な蹴りを入れられたスキンヘッドの男が、彰子さんの兄貴というわけだ。顔をよく見れば似ていないくも……いや、似てない。

「なんてことしてるの！　結婚に反対するのは勝手だけど、この人を傷つけたら許さないわよ」

凄みは彰子さんの方が格段上だった。女の啖呵ってなんでこんな

に怖いんだろうな。

「こんな男、お前にプロポーズもしてないっていうじゃないか」

「されたわよ！　ちよつと遅かったけど、でも、ちゃんとしてくれたわ」

答える彼女は心なしに嬉しそうだ。

先生、ちゃんと言えたんだな。やるじゃん。

ここで先生がもう一步、前に出た。

あきちゃんと、スキンヘッドとの間に入るようにして。

「お義兄さんには、ちゃんと認めてもらえるように頑張りますから、だから、今日のところは……」

黙って頭を下げる。

少し、腰は引けていたが、それでも言葉には有無を言わさない強さがあった。

先生が顔を上げる。スキンヘッドはまだ渋い顔をしている。

「それに、この子は私の生徒です。生徒を傷つけるような真似は、教師として見過ごすことができません」

今度はしっかりと相手の目を見たまま、先生が告げる。教師の顔で。

そう言った方が、スキンヘッドの男も身を引きやすい、と先生がそこまで考えたのかは分からないが、義弟の言葉を大人しく聞くよりは生徒を守る教師の言う事の方が良かったのだ。結果的に。

「そういうことなら、分かった。……お嬢ちゃん、悪かったな」

スキンヘッドは、あきちゃんにだけ謝罪する。

しかし、あきちゃんには男の声など聞こえていない。焦点の定まらない目で、のんやりとスキンヘッドを認識して、微かに頷いたようだった。

多分、今の状況がまだ飲み込めていないのだろう。

こんなことになるなら、ちゃんと先に話せば良かったな。

先生には、婚約者がいるんだってことを。相手のことは口止めされた手前、言えなかったのだが、結果的にはこうしてバレてしまっ

たわけだし。

「ほら、行くわよ。兄貴。——佐々倉先生は、その子をお願いしますね」

彰子さんが先生に向けたのは、そんな他人行儀な台詞。

先生は一瞬戸惑った様子を見せたが、すぐにハイと返事をした。

あきちゃんは、いまいち焦点の定まらない目でゆっくりと先生の顔を見上げる。

やがて、決意したようにきゅっと唇を結んだ。

さて、多分もう気づいている人も多いと思うけど、俺は今、完全に蚊帳の外である。ああそうさ。一ミリたりとも噛んでない。

俺がこの話を続ける必要はまったくもってないわけだ。

これはあきちゃんの失恋の物語だからな。俺の出番はその後。もう少しの我慢だ。

セーラー服を脱がさないで（5）

初めて好きになった人は、近所に住むお兄ちゃんだった。毎日好ききつて言ってたんだけど、お兄ちゃんは引越していなくなっちゃった。

小学校の時に好きになった子にはバレンタインにチョコを渡したけど、何も言えなかった。

中学生。メアドを交換できただけで嬉しかった。他愛のないメールのやりとりで精一杯。生まれて初めてだよ。

本当の告白は。

「佐々倉先生」

先生を呼ぶ。

「はい」

真っ直ぐに私を見て、返事をしてくれる。

急に、怖くなった。

もう、私の気持ちなんて、全部バレてるのにね。結末まで全部、決まってるのにね。

でも怖いんだよ。何が怖いのかうまく説明できないけど、でもたぶん、それは私だからだ。ほかの女の子なら、きつとこんな気持ちにはならない。私が、魔法使いじゃなかったら、きつと。

「先生は、たぶん、私の事なんか知らないと思います」
だから最初に、予防線を引く。

さつき、先生は私の事を自分の生徒だと言ってくれた。見知らぬ私の事を。

逃げ道を用意したらちよつとだけ、冷静になれたんだと思う。覚悟が決まったから。

そのとき、初めて気づいたんだ。

いつの間にか、雨が降り出している。

良かった。これなら、泣いてもバレないや。

「私は、先生のこと……ずっと、ずっと見てました。遅くまで授業の準備してる事も知ってるし、ホームルームでちゃんと一人一人の顔を見て話してくれる事も知ってます。入学式前から、クラスメイト全員の名前と顔を覚えてくれてることも……。先生が、ちゃんと見てくれてること、私は知っています。私は、そういう先生が、大好きなんです」

声が震える。

鼻の奥がちよつとだけ、つんとする。

先生。

顔を上げればすぐそこにある先生の目。少しだけ群青色をした、大好きな先生の目が私を見てくれている。今だけは、私のことだけを。それなのに、私はその目をまともに見ることができなくて、代わりに、先生の唇を見ていた。そこから紡がれるだろう言葉に怯えながら。

雨に濡れて寒そうな青い唇は少しだけ震えていた。だけど、私の言葉を聞くうちに、少しずつ赤みを取り戻していった。

あ、ちゃんと伝わったんだなって分かった。私の気持ち。

「ありがとう。うれしいよ」

困ってしまうんじゃないかな。そう思ったのに、先生はこれでもかっけくらい笑顔で、応えてくれて——もう、十分です。

でも、ごめん。って、後に続く言葉を私はちゃんと知っているから。

「先生、これから、私の先生でいてください」

顔を上げることなんて、もうできなかった。

嘘だよ。本当は、私だけの先生になっしてほしい。

「もちろん。俺はずっと、ずっとみんなの先生でいるよ」

先生の声はやさしくて、とろけてしまいそうで、だけど、私だけ

の先生じゃないんだなあ。

そう思ったら、今さらみたいに悲しくなつて。

とつくに知つてたのに。最初から、失恋するって決まつてたのに。いつの間にか、気持ちを伝えるだけじゃ満足できなくなつてたんだ。これ以上悲しくなる前に、私は先生に頭を下げて、吏一君のところに逃げるようにして走つた。どん、つてぶつかるようにして足を止めた私を吏一君はちゃんと受け止めてくれて。

「もついいの？」

やさしい吏一君の言葉に頷いた。

その後のことは、よく覚えていない。

たぶん、吏一くんが送つてくれたんだろうけど。泣きじゃくつて私はとても面倒くさかつただろうな。

今度、ごめんとありがとうを言わないと。

家に帰つて濡れたセーラー服を脱ぐと、どつと疲れが押し押せてきた。

家族と顔を合わせるのが嫌で、シャワーも浴びずにベッドに潜り込む。

寝る直前に、三島先生のことを思い出した。

三島彰子。隣のクラスの担任で、英語の先生。

不思議なことに、三島先生を羨ましいとか憎いとかは一切思えなかった。そもそも私は、三島先生と戦つてさえないのだ。

戦おうと思えば、できたのかな。違う。争える位置にすらない。そつか、佐々倉先生と三島先生は結婚するんだな。

それは遠い遠い世界の出来事のように、私のなかに上手く収まつてくれない。収まりきれなかった分は目尻から溢れて涙になる。泣いて、泣いて、いつの間にか泣き疲れて眠つてしまった。

翌朝の私の顔は酷いことになっていた。

それでも私は、今日も制服を着て学校に行かないといけない。
泣きはらした目を長い前髪で隠すようにして、うつむいて、でき
るだけ人に顔を見られないようにして。

当たり前だけど、先生は何も変わっていないかった。殴られた頬は
少しだけ腫れていたけど、出席を取る声はいつもどおり優しい。私
の名前を呼ぶときも。

返事をする私の声は、震えてはいなかっただろうか。

「宮司」

ホームルームが終わって、先生が私を呼んだ。心臓が飛び出るか
と思った。な、なんで？

「大丈夫か？ 声枯れてたけど、風邪か？」

あ、いつもの先生だ。

やさしくて、生徒のことちゃんと見てて、目立たない私のことだ
って、ちゃんと。

泣いたからだ、なんて言えるはずもなく、私は頷いてそういう
ことにする。

「昨日雨だったからな、外で濡れたか？」

先生だって、濡れたじゃない。

「しんどくなったら保健室行けよ？」

「……はい」

私のかすれた声を、先生はちゃんと拾ってくれる。

先生、やっぱり好きです。

この笑顔が、私だけに向けられるものじゃないと知っていても、
少しくらい、私の事を考えてくれましたか？

一瞬でも、三島先生の事を忘れてしまいうくらい。

「せんせーい、女子着替えますよー。クラスマッチ始まっちゃう」
「あ、そうか。悪い。宮司も出よう。女子に怒られるぞ」

先生の笑顔を独り占めする暇もなく、私は体操服の入った袋を掴んで廊下に飛び出した。

隣のクラスに移動して、体操服に着替えるためにシャツと学ランのズボンを脱ぐ。

真っ白い体には筋肉なんかなくて、そこらの女の子よりよっぽど細くて、だからみんな気づかない。

セーラー服を着た私が、男だつてことには。

「彰彦。先生に何言われてたんだ？」

「風邪ひいてんのかつて……」

「ひいてんの？」

「ひいてるつて言ったらクラスマッチ休めるかな。サッカー嫌い」

「おいおい、人数ギリギリなんだから出るよ。そりゃ彰彦の運動オンチはひでーけど」

否定はしない。彼らの言うとおり、クラスメートの前で私はただの鈍くさい男子高校生。

その実、セーラー服を着たときだけ最強になれる魔法使いだなんて、誰が思う？

そんなことは知らなくていい。魔法使いは、自分の力を隠しておくものだ。

セーラー服を着て体育に出てもいいなら、いくらでもシュートを決めるんだけど。

そんな台詞を飲み込んで、体操服に袖を通した。

私の恋の物語は、これでおしまい。

上手くいかないことは最初から分かってた。たまたま、先生の書いた名前の「彰」って文字が私の名前と一緒にだったから、たったそれだけのことに、ほんの少し夢を見ていたんだ。

私が本当に「あきちゃん」だったら良かったのかな。

それでも先生にはもう、別の「彰ちゃん」が居たから、結果は一緒だったのかもしれない。

先生はあれから、黒板に名前を書かなくなった。正確には、赤チヨークを使わなくなった。

赤チヨークをどうしても使わなきゃいけない時でも、自分の魔法の力に振り回されることがなくなった。コントロールは、自覚することである程度できるようになる。

吏一君のおかげだね。

そうそう、吏一君にはまだ、私が本当は男の子だってこと言っていないんだ。

言わなきゃいけないかな、やつぱり。

吏一君は、怒るかな。軽蔑するかな。

拒否されるのは怖いし、失恋したばかりの私には、ちょっとだけしんどい。

告白したことを後悔はしてないよ。

吏一君の言うとおりだった。

告白して良かった、とはまだ思えないけど、いつかは——例えば次に私の物語が始まる頃には、そんな風に思えるようになってたらいいな。

だから、あともう少しだけ、お願い。セーラー服を脱がさないで、「魔法使いのあきちゃん」で居させてほしいの。

セーラー服を脱がさないで（6）

相変わらず客のいないカフェバー「ムーン&リバー」のカウンターの内側で、コップをひたすら綺麗に磨くだけの単純作業に飽きてきた頃だった。

彼女が、やって来たのは。

「見つけた。にいぬまりいち新沼吏一君」

聞き覚えのある声で名前を呼ばれて、反射的に顔を上げる。入り口に立つ女が、きりつとした強い目で、俺を真っ直ぐに見つめていた。

え、なんで。

驚く俺を余所に、彼女は強めの口調で続ける。

「吏一君は、魔法使いでしょう？」

閑古鳥の鳴いている店で良かったと心底思った。タイミングの良いことに、川岸も買い出しに出かけている。

「そんな突然、意味不明なこと言われても……どうしたんですか、彰子さん」

あきちゃんの失恋相手である佐々倉先生の婚約者——あの日、あきちゃんに告白の機会を与えてくれた女教師。その凛とした面差しを見返して名前を呼んだ。

すでに少々気圧され気味なのは仕方がない。だって、年上の女はいつだってしたたかで、恐ろしい。

「心配しなくてもいいわよ。私も月並町の人間だもの。魔法使いのことは知ってるわ。佐々倉もそうだとは全然知らなかったけど」

彰子さんは何の躊躇いもなく「魔法使い」という言葉を使う。そうか、彼女も。

俺は眼鏡を掛けるべきか迷った。が、すぐにそんな必要はないこ

とに気づく。学校に行った時と、先生の部屋に行った時。もう二度も、俺は彼女を眼鏡のレンズ越しに見ているんだから。魔法使いだったなら、その時に気付いているはずだ。

「彰子さんの『家』は、そういう『家』なんですか？」

ここで言う家は、普通の家とは大分ニュアンスが違う。月並町の旧家の中には、いくつか魔法使いを排出しやすい家柄というやつがあるらしい。

「うちは分家だから、最近は少ないけど。今生きている中だと祖母と兄くらいだし」

「あ、あのスキンヘッドも魔法使いなのか。」

「ちなみにどんな……？」

「それは秘密。あまり言うなって言われてるから」

さすがは魔法使いの家だ。その辺りの教育はしっかりしている。

「ねえ、座つてもいいかしら」

俺の目の前のカウンター席を示す彰子さんの申し出など断れるはずがない。注文までされてしまつてはなおさらだ。

大事なお客様にアイスカフェオレをお出しし、店の中で二人つきり、改めて相對する。

「内緒話をするには良い店ね」

「客がいなくてはつきり言ってくれていいんですよ」

改めて店内を見渡しても、彰子さんの視界の中に入るのはバイトの俺一人だけ。

「こんなお店あるの、知らなかったな。いつできたの？」

「五月くらいに……って、そういうばなんで俺の名前とこの場所！」

そつだ。魔法使いを知っていたことはともかく、彼女と俺のつながりなど佐々倉先生とあきちゃんを通したものでしかなくて。

「吏一君。昔、結構悪いことしてたでしょ」

ピシリ、指摘する声に容赦がないのは彼女が教師だからだろう。どうしてそれを、と尋ねる前に彼女は教えてくれる。

「あの時、兄と一緒にいた、兄の腰巾着きたいな子がね。ちよつと

小柄の。浅井君って言って、やっぱり昔ヤンチャしてた子で……彼が君のこと知ってたの」

「浅井？ 浅井……リヨウさん？」

ほんと頭の隅に浮かんだのは、それなりに世話になっていた兄貴分の顔で。

なんてこった。世間は狭いと言うけれど、月並町の中はもっと狭い。

「浅井君に君を探してもらったのはね、一言お礼を言いたくて」

椅子に座った彰子さんが顔をしっかりと上げて俺を見つめる。あれ、座っただけなのにな。視線の高さが明らかに違うからだろうか。威圧感がなくなっている。女つてのは本当によく分らない。

「佐々倉の悩みは解決したみたいだし、プロポーズしてもらえたし……兄貴はもう少し時間がかかりそうだけど」

「あれって、いわゆるシスコン……？」

「正しく、そうよ」

彰子さんは心底面倒くさそうに答えた。ため息が重い。

妹の婚約者を脅すような兄貴だ。これまでの彰子さんの苦労と、これから先の佐々倉先生の受難は眼鏡をかけなくとも想像できる。

「頑張ってください」

「ええ。本当に、色々ありがとうございます」

礼を言うときりしたのか、彼女はようやくストローに口を付けた。

べつに、礼を言われるようなことはしていない。俺はただジイさんとあきちゃんに頼まれただけで、最終的にはあきちゃんの失恋の手伝いをしただけだ。

彰子さんのカフェオレが見る見るうちに減っていく。その勢いが、不意に止まった。

「ん、でもあなた、佐々倉の後輩っていうのは嘘だったんでしょ？ どうして助けてくれたの？」

「あーそれはですね」

話せば長くなる。さて、どこからどこまで話すべきだろう。嘘は得意ではないし、ついてもバレそうな気がする。

結局、あきちゃんが大好きな先生の挙動がおかしいのを心配していて、俺は彼女に惚れていたから協力した、という、大分端折ってはいるが嘘偽りのない事実を話した。

彰子さんは特に疑うわけでもなく聞いてくれていたが、残り少なくなったらカフェオレをずっと吸って、首を傾げる。

「変ねえ。あの、あきちゃんって子、やっぱり私一度も見たことがないのよ。しかも佐々倉のクラスの生徒でしょう？ 私も英語の担当持つてるから顔を見たら絶対に分かるはずなのに」

「え……？」

「フルネームは？」

「……知らない」

そうだ。俺はあきちゃんのことを何も知らない。最初に名前を聞いた時、彼女は「あきちゃん」としか名乗らなかった。学校で彰子さんに見つかったときも彼女は、一目散に逃げる道を選んだ。

それはつまり、本当は、あの学校の生徒ではなかったから？ 調べられたらバレてしまうと分かっていたから？

だけど、あきちゃんはいつもあの学校のセーラー服を着ていた。だから俺は、あきちゃんが先生の生徒だということを全く疑わなくて。

ぐるぐると思考する。頭を使うのは苦手なんだ。

考えたって答えが出てくるとも思えなくて、困った時のスマートフォンを取り出した。あきちゃんの番号……それすらも知らないなんて、鈍くさすぎるだろう俺。

「そうだ、ジイさんだ」

時刻はまだ四時を回ったばかり。今ならジイさんはまたたびにいる。あのデスクトップパソコンの前に。案の定、スカイプでコールするとすぐに応答した。

『なんじゃらほい』

俺の焦りを知ってか知らずか、ジイさんの脳天気な声が聞こえてくる。

「ジイさん、あきちゃんそこにいるか？」

『おらんよ。夏休み中はずっと親戚の家でバイトしとる』

「マジかよ。どこで？　つか、あきちゃんの連絡先教えてくれ！」

『吏……あまりがつつくと嫌われるぞ』

「放っとけ！　だってあの子、何者だよ。名前は？　本当の学校は？　魔法だって、今まで見たことない力だったぜ」

彼女の背負った、眩むような強烈な青。それはそのまま、彼女の魔法の強さを表している。ああ、そうか。あきちゃんの色が強すぎて、あの時、彰子の兄の魔法はちっとも見えなかったのか。

まあそんなこと、今はどうでもいい。

彼女は一体、何者なんだ。

『あきちゃんは、魔法使いじゃよ』

「だからっ」

『あの子は、魔法使いでいる間が、セーラー服を着ている間だけが、唯一本当の自分で居られる時間なんじゃよ。お前にそれを邪魔する権利があるか？』

「なんだよ、それ」

『大丈夫じゃ。時が来ればあきちゃんはきちんと話してくれるじゃろつ。そういう子じゃよ、あの子は』

カランカラン、と氷をかき混ぜる音がした。彰子さんが訝しげにこちらを見ている。

「ジイさん、俺から聞いたらあきちゃんは困るかな」

『そうじゃな……くれぐれも早まったことをするんじゃないぞ、吏一。何事もタイミングが大事じゃ。特に恋愛事はな』

「んなもんジイさんに言われなくても分かってんだよ！」

スカイプの通話を終了する。

カフェオレを飲み終えた彰子さんが、くすくすと笑っていた。

結局、俺が主役に躍り出る物語はもう少し先の話になりそうだ。魔法使いあきちゃん。彼女が何者であっても、俺が彼女に惚れる事実は変わらない。

俺は待つよ。ジイさんの言うタイミングとやらが来る瞬間を。できればなるべく早くその時が来ればいい。

彼女がセーラー服を脱ぎ捨てて、魔法使いじゃなくなったとしても、大丈夫だと思える日が、早く来ればいい。

俺とあきちゃんの話は、今回はこれで本当に終わりだ。

魔法使いの話はまだまだ続くんだが、俺は魔法使いである前に勤勉な大学生で、高校生が夏休みに突入した今、前期のテストが間近に迫っている。

正直、魔法使いのごたごたに首を突っ込んでいる暇がない。

そう、ごたごただ。

佐々倉先生みたいに持っていても何の役にも立ちそうにない魔法もあれば、存在そのものが犯罪になりそうな、とんでもない魔法を使える奴もいる。

俺はまだ気づいていない。

俺がテストに苦しんでいる間に、それは少しずつ始まっていた。やがて巻き込まれていく、月並町の魔法使いを巡る物語。

だけどそれはもう少し後の、目と鼻の先の、また、別の話だ。

セーラー服を脱がさないで（6）（後書き）

月並町シリーズの第一話「セーラー服を脱がさないで」は一応ここで終わりです。

ここまでお付き合いいただきまして、ありがとうございます。次の話にいつ入れるのか分かりませんが、少し充電期間を置いて、あきちゃんや吏一はもちろん、ほかの魔法使いたちのことも書いていけたらいいなあと思ってます。

ジャンルに分ければ現代ファンタジーなんでしょうけど、どっちかというと、描きたい部分は今回で言えばあきちゃんの恋愛と吏一の片思いがメインで、不思議な力を持っていることは実はそんなに重要じゃないのかな、という気がします。

いや、登場人物にとっては大変なことなんでしょうけど。たまたま魔法が使えた。ただそれだけのことで。根本的には普通の人と何にも変わらないのよ、と。セーラー服着たりしてますけど。

ま、のんびりやっていきます。

では、また次の物語でお会いできたら幸い。

晴れた日に傘を（前書き）

「月並町の魔法使い」番外編
せん。

（注）あきちゃんや吏一は出てきま

晴れた日に傘を

時は放課後、場所は教室。

窓から射し込む夕日も、遠くでカラスの鳴く声も、グラウンドから聞こえてくるかけ声も、すべてが作られたようなシチュエーションで、私と彼は二人っきり。

これが、机を一つ挟んでイスに座り、顔をつきあわせて覗き込んでいるものが日直日誌でなければ、噂話の一つや二つはあったかもしれない。

私がそんなくだらないことを考えている間に、目の前の男は妙にカクカクした文字を綴りながら尋ねてきた。

「寺井さん、コメントのところどうする？」

憧れとか好きとか気になるとか、そんな感情はなかったはずだ。それでも卒業式を控えた前日にたまたま彼と二人っきりになれたことを、私はラッキーだと思ってしまった。それも、夕陽の射し込む放課後の教室——そんな狙いすまされたような絶好のシチュエーション——で、日直当番という名目のもとに、私たちは机を挟んで向かい合わせに座っている。

彼が日誌にシャーペンで几帳面な文字を書き込んでいるのを眺めながら、前にもこんな場面があったな、とふと思う。以前に、あれはまだ三年に進級してすぐの頃、同じように日直当番で、彼とこうやって向かい合って日誌を書いたことがある。

あのときシャーペンを握っていたのは私の方だった。

「最後のコメントのところ、どうする？」

手を止め、そう尋ねた私に彼はほんやりと空を眺めながら言った。
「雨、降るかな」

それはたぶん独り言だったのだろう。聞き流しても支障のない類の。

「でも外、晴れてるよ？」

夕陽で真っ赤に染まった窓の向こう側を見て、私はちょっと首を傾げてみせる。

「うん……でも、きっと降る。寺井さん、傘持ってる？」

妙に確信を持って繰り返す。尋ねられて、私は首を横に振る。
持っていないよ。

持ってるわけがない。天気予報に映し出された今日の日本列島には、傘マークなんか一つもなかったんだから。

今だって、空には雲一つ見当たらず、私はまた疑問符を浮かべる。

「傘、いるかなあ……？」

「……いつかは、降るだろうから」

急にくつつけられた妙な理屈に、「そりゃそうだけど」と反論しそうになって、やめた。代わりに、

「事前準備バツチりって感じ？」

冗談めかした調子で言ったら、彼はにこりともせず曖昧に頷いた。

靴箱のところで別れる時、じゃあ、と言いかけた私に、彼は無言で傘を差し出す。

「え……？」

「使つて。寺井さんち遠いでしょ。俺んちはすぐそこだから」
「すぐそこって……」

確かに私の家よりは近いかもしれないけれど、彼の家は決して「

すぐそこ」と言える距離ではないはずだ。それに何より、傘の必要性を感じないので、

「ありがとう。でも、いいよ。雨降らないと思うし」

私は彼の傘を断った。

結局その日、私は家に着く前に突然降り出した雨に打たれ、翌日、見事に熱を出してしまったのである。

一年間、同じクラスにいたって一度も口をきいたことのない人は結構いるもんだ。私と彼も、日直当番というつながりがなければ、そういう関係でしかなかったと思う。

だけど、「最後だから」

卒業間近になって、そんな言葉を頻繁に使うようになった。

最後だから、一緒に帰ろう。写真を撮ろう。気になるあの子に話しかけてみよう。

最後だから。まるでそれで全部許してもらえるみたいに……。

私もみんなと一緒だ。

最後だから、もう二度とこんなチャンスは訪れないかもしれないから。

「あのさ、もしかして堂本は、天気がわかるの？」

自分がものすごく突拍子もないことを言ってることはわかっていたし、変な目で見られることも覚悟していた。

なのに、彼は、堂本は、

「ちょっとだけ」

まるで外国人に「Can you speak English?」と尋ねられて「A little」と答えるような自然さで返してみせた。

やっぱり。と、どうしよう。が混在中の私の頭は、次の言葉を探している。「Really?」とでも聞けばいいのだろうか。無意

味だとわかっていても。

たぶん彼はそんな冗談や嘘を言うタイプではない。

「なんで？」

結局出てきたのはそんな問いで。

堂本は少しばかり困ったように眉を顰める。

「なんとなく」

なんだそれ。

「それより、寺井さんはなんでわかったわけ？」

私の心のツツコミが声になるよりも早く、堂本が問う。

今度は困ったのは私の方だ。

きっかけは、あの日直当番の日だった。だけどその時はまだ、ただの偶然だと思っていた。

しかし気をつけて見ていると、堂本が傘を持ってきている日は、朝どんなに晴れていても夕方までには必ず雨が降るのだ。言ってしまえばそれだけのことで。

堂本は天気がわかる、という結論も私の思い込みで片付けようと思えば片付けられるレベルのものだったはず。

けれども、その一連の流れを説明するのは面倒だったし、何より困るのは、私がそんなにも堂本を見ていたのを知られることだ。

そんな複雑な乙女心を抱えながら、結果出てきた返答は、

「なんとなく」

「なんだそれ」

堂本が笑った。

「明日は晴れるといいね」

卒業式という最後の行事は、できれば晴れの日で迎えたい。

日誌のコメント欄に、堂本がシャーペンを書らせる。

『明日は晴れる』

その予言は、見事に的中した。

駅の構内に溢れかえる人。誰もがみな、途方に暮れたように外を見て溜息を吐く。

外は土砂降りの雨だった。天気予報のお姉さんはそんなこと一言も言っただけなのに。

雨が降ると、いつも、彼を思い出す。

結局、堂本とは卒業式以来、一度も会っていない。どこの大学に行ったのかも、私は知らない。

もう二年が経っていた。

ぼつと立っている私の横に、ふと背の高い影が並んで、反射的に仰ぎ見る。

すぐにわかった。彼だと。

「寺井さん……使って。俺んちは、すぐ近くだから」

相変わらず気を使うのが下手な彼は、私に自分の傘を差し出しなから言う。

「ありがとう。でも、いいよ」

あの日を繰り返すみたいに、私は彼の申し出を断ってしまう。

鞆の中から、折りたたみ傘を取り出しながら。

「事前準備バツチリじゃん」

彼が笑った。

私たちの間にそれ以上の会話はなかった。

久しぶり、とか、また今度遊ぼうよ、とか言えばいいのに。堂本は残念ながらそういうタイプじゃない。

傘を差して雨の中に消えていく堂本の背を見送った私の隣に、また、別の人影が並んだ。

見上げてみると、今度は予想通りの男の顔がある。

糸のように細い目をさらに細めて、無言で問いかけてくる。今の誰？と。

「彼も、魔法使いなんだよ」

「へえ」

「妬ける？」

傘を持つ彼の手に、自分の手を重ねる。

「俺より凄い魔法使いならしょうがない」

彼は私の手をやんわりと退けて、傘を差した。

「それなら彼のほうが勝ってるかな」

何しろ堂本は、天気を当ててしまうのだから。

懲りずに腕を組んで歩き出す。傘は持ちにくそうだったけど、邪見にはされなかった。

少しは嫉妬してくれるかな、と思って顔を盗み見る。

変わらない彼の表情に不安になって、慌てて言い直す。

「でも、多聞たもんの魔法のほうが私は好き」

隣にいる魔法使いは、少しだけ悲しそうに笑った。

君がいない夏（1）（前書き）

大変、お姉ちゃんが帰ってきちゃった！逃げるようにして家を出たあきちゃんが、月並小学校で過ごすひと夏の物語。未だ失恋から立ち直れないあきちゃんに、新しい恋！？一方、冴えない夏休みを過ごす吏一は……。

君がいない夏（１）

一体、何から話せばいいんだろう。

あまりにもたくさんの方がありすぎたんだ。

長くて短い夏休みに私が向き合っていたのは、先生が出したたくさん課題と、魔法使いに関わるちょっとした問題。

それから、ある人との出会い。

早くおジイに聞いてほしくて、喫茶「またたび」に向かう足取りを急がせる。ああもう！ セーラー服を着ていれば、もっと早く走れるのに。

緩いハーフパンツに、体の線が分かりにくい大きめのＴシャツ。上からロングのパーカーベストを着てスニーカーで駆ける今の私は、ただの男の子だ。

もちろん、私がセーラー服を着ていない理由は「まだ学校が始まっていないから」じゃない。そんなの最初から、私にとっては関係ないってこと、説明するまでもないよね。

走りながら、思い出す。

この夏の間に、私と、私の周りの魔法使いたちに起きた物語を。少しでも長くなるけど、順番に話してもいいかな。

そう、お姉ちゃんが、家に帰ってきたところからだ。

八月に入ったら、私は毎年恒例のアルバイトに行くつもりだった。アルバイトって言っても、ただのお手伝いなんだけどね。

だから七月のうちに課題をなるべく終わらせておきたくて、英語のノートを開いた瞬間——つまり、佐々倉先生の恋人であり婚約者

である三島女史を思い出してブルーの底に沈みかけた時だ。

「ただいまー」

聞き覚えのある声が、私の部屋の外、長い廊下を伝わって玄関から聞こえてくる。

すぐに分かった。

お姉ちゃんだ。

なんで？ 帰ってくるの早すぎない？ いつも八月に入ってからじゃないの？

「あら、綾。もう帰ったの？」

「授業、もうゼミだけだから。発表が終わったから戻ってきちゃった」

お母さんへの説明で事情は分かったけど、分かったところで私の状況は何も好転していない。

お姉ちゃんの声に聞き耳を立てながら革靴を手に掴む。

足音が徐々に近づいてくる。隣の部屋の前で止まり、扉を開く音がした。隣は、お姉ちゃんの部屋。

ほとんど準備を済ませていたリュックの中身を最終確認。足りない分は悪いけど後でお母さんに持ってきてもらおう。

英語のノートを閉じて勉強道具一式と一緒にリュックに詰め込む。窓を開けた。白く眩むような強い日差しが目を焼く。

帽子、

「ちよつと彰彦！？」

ダメだ、諦めよう。

ヒステリックな呼び声を合図に、私は飛ぶ。セーラー服のスカートをふわりと広がらせて。二階の部屋の窓から。

着地、成功。そのまま庭を駆け抜ける。背後でお姉ちゃんの高い声が聞こえた気がしたけれど、かまうもんか。

荷物の重さだって気にならない。セーラー服を着た私は、どこまでだって走れるんだから。

あ、しまった。お気に入りのリップを机の上に忘れてきちゃった

よ。お姉ちゃんに見つからないといいな。
それだけを願って、私は逃げたんだ。

「あ！ あきちゃんだー！」

私よりもずっと小さな影が、太陽の下を全力で駆けてくる。両手を広げて。元気いっぱいのでその愛称を呼ばれると、お姉ちゃんから逃げてきた緊張感とか罪悪感とかが少しだけとける。

そのまま抱きついてくるのかと思って待っていたら、目の前で急停止した少年は、あるうことか私のスカートに手をかけて、

「えいつ」

「きやあああ！？ 直登、君！？」

慌てて押さえたけれど、遅かった。やばい。今のは絶対見えた。
やだ、恥ずかしすぎる！

だって、トランクスなんだよ！？

だけど直登君はけらけら笑ってた。いたずら成功に満足して。
直登君にとつてはスカートの中身なんかどうでもよかったみたい。
スカートめくりっていう行為そのものが、きつと楽しいんだ。

「もう！ こーら！ 去年はこんなことしなかったのに」

拳を握ってパンチの真似をすると、直登君はさらに嬉しそうな顔を
をして走って逃げていく。

追いかけようと踏み出した足を、優しく止める声があった。

「あきちゃん？」

振り向いた私は、みずずさんと、もう一人、麦藁帽子をかぶった
女の子を見つける。直登君よりも背の高い、線の細い女の子。

隣のみずずさんは、少しだけ不思議そうな顔をして私を見ていた。
私が、ここにいるから。

「こんにちは……あの、ごめんなさい。少し、早いですけど」
本当なら、ここには八月から来るはずだったのだ。

荷物を持つ手に力を込めて、みずさんの顔を見る。血色の良い、まん丸顔の笑い皺が深くなる。

「あら、大丈夫よ。あきちゃんが居てくれた方が助かるわあ。さ、暑いからお入りなさいな」

そう言つて、みずさんは私を校舎に招き入れてくれた。

木造の、古くて小さな小学校校舎。

『月並小学校』

校舎の入り口にある木の板には、今はもう使われなくなって久しい学校名が、色褪せたまま残されている。

「あきちゃん、走ってきたの？ 汗かいてるわ」

みずさんに言われて初めて、私は額や首筋がベタベタすることに気づいた。

セーラー服を着ている間は全然、疲れなんて感じないんだけど、こういうのはどうしようもない。

「着替えてくるね」

セーラー服が汗くさくなるのはイヤだし。

リュックを持ったまま近くの教室を借りて着替えることにする。

小さな机が並ぶ教室。古い黒板。木の教卓。

どれも懐かしい。

私を通った小学校は、ここじゃない。電車通り沿いの隣町との境に、比較的新しい校舎の小学校がもう一つある。

この月並小学校は、私が小学生の頃にはもうとつくに廃校になっていた。だけど、夏休みになると私は毎年ここに来る。私だけじゃない。魔法使いの子供たちが。昔は、お姉ちゃんも一緒に来てたんだよ。

さつさと着替えてしまおうと、リボンをほどいて裾を首元までたくしあげる。同じタイミングで、立て付けの悪い扉が、きしむ音とともに開かれた。

ヒツと変な声が出る。

「あ、悪い」

すぐに扉は閉められたけれど、一瞬だけ見えたのは大人の男の人で。

「び、びつくりしたあ……」

心臓がドキドキゆつてる。

別に、見られて困るわけじゃないんだけど。女の子じゃないんだから……うつん、変な目では見られるだろうから、困ると言えば困るのかな。

ゆつくりと息を吐く。頭の中が冷えていく。

変な目で見られるのは、イヤだ。

幸いにも私の周りの大人たちはわりと理解をしてくれていて、おジイもみずずさんも、またたびのマスターも、私を変な目では見ない。

お父さんとお母さんは見て見ぬフリをする。理解はしてないと思うけど、それはそれでありがたいからいいんだ。

やっと心臓が落ち着いてきて、着替えを終えた私は教室の外に出る。

さっきの男の人は誰だったんだろう。

みずずさんと直登君、麦わら帽子の女の子の三人はとなりの教室にいた。

「みずずさん、誰か来てたの？ 男の人」

「え、ええ。あきちゃんも会ったの？」

「会ったというか、見たというか……」

見られたというか……。

「大丈夫よ。きつともう、来ないわ」

私はそんなに不安そうな顔をしていたのかな。

みずずさんが、そんな風に言う。だけどその顔はちょっとだけ寂しそだった。

「さ、今から直登君と美佳ちゃんよしに魔法使いの話をするんだけどあ

「きちちゃんも聞く？」

「聞きたい！」

みずずさんが話を意図的に変えたのは分かった。分かったけど、わざわざ追求する気はない。

魔法使いの話も聞きたいしね。

夏休みにここに来るたび、何度も聞いた話。月並町の魔法使いの物語。

直登君と私、それから、美佳ちゃんが机を並べて座った。

教壇に立つみずずさんは、先生みたいにみんなの顔を見回して、につこり笑う。みずずさんは昔、本当に先生だったんだよ。だから今だって、授業はお手のもの。

「はい、授業を始めましょうかね。今日はね、音楽に愛された魔法使いのお話よ」

「私、その話知らない」

「それじゃちょうどいいわね。月並町にはみんなが思っているよりたくさん魔法使いがいるのよ」

みずずさんやおジイはとっても顔が広い。だから私も何人かの魔法使いの話を聞いたことがあったんだけど、そんなのはほんの一部の話みたい。

そういえば、吏一君のことも全然知らなかったもんね。

「せんせい、はやく話してよー」

待ちきれなくなった直登君が先を急かす。

「舞台は魔法使いの町、月並町。時は、今から何十年前も前ね。私はまだ学生だった。同級生にとっても綺麗な女の子がいたの。だけど、その子は生まれつき話すことができなかった。手話って分かるかしら」

コクリ、と首を縦に振る。となりの美佳ちゃんと直登君も神妙な顔で頷いた。

「私と彼女のやりとりはいつも、手話か筆談だった。仲良しだったわ。彼女は博識でね、いろんなことを教えてくれたの。それに、歌

がとても上手だった」

「さつきしゃべれないって言ったじゃん！」

直登君が大きな声を上げる。

「そうね。それは本当。でも、彼女は歌えたの。マイクを通すと…

…」

「あつ！ マイクが、魔法の道具なの？」

「あきちゃん、正解」

「そんなくらいおれだってわかったもん！」

拗ねてしまったとなりの直登君に、ごめんねと小さく舌を出す。

「月並町の魔法使いは、みんな魔法の道具を持ってるものね。私たちはきつと、魔法使いというよりも道具使いなの。相性の良い道具を使って、少しだけ、ほかの人にはできないことができてしまう。超能力者って言う人もいるけど……」

みずずさんはそこで、少し苦笑いをして見せる。

「どうして私たちが『魔法使い』なのか、わかるかしら？」

「えーと、んーと……」

直登君が一生懸命考えているから、私は答えを黙っておく。知ってるんだけどね。

「……おじいちゃんが、言ったから？」

遠慮がちな細い声は、私のとなりから。美佳ちゃんの声だった。

初めて聞いた。

「なんでさきに言っちゃうんだよ！ おれだってわかってたのにー」

再び出番を奪われた直登君が口を尖らせる。

「直登君が答える番もあるから大丈夫。ね？ 美佳ちゃんの言ったとおり、魔法使って呼ぶことに決めた人がいたの。それまではみんな、好き勝手に呼んでたわ。超能力者や超人、奇跡の人、神様だなんて言い出す人もいたけど、大半の月並町の人たちはそんなに大層なものじゃなくて、ただ、少し不思議な力があるだけだと思ってたのね」

みずずさんはそこで一度、言葉を切った。

私の力は、おジイや吏一君の力に比べたらきつと、周りの人に気づかれにくい。だって、運動神経が良いとか体が疲れないとか、運動が得意な人や体力がある人にとっては当たり前のことなんだ。

もしかしたら、セーラー服を着た私はオリンピックピック選手よりも速く走れるかもしれない（試したことはないけど）。

だけど光よりも速く走れるわけじゃない。

ただ、人を少しだけ追い越したところにいるだけ。

確かに、超能力者や超人って言うとかツコ良すぎて引け目を感じちゃうし、奇跡な人だなんて大袈裟だ。神様なんて言われた日には勘弁してって言いたくなっちゃう。

私は魔法使い。たった一つだけ、魔法が使える魔法使い。魔法の杖を振る代わりに、セーラー服を着るの。

「ねえみずずさん、おジイってもしかして偉い人なの？」

私は聞いてみた。宮司の家と同じで、おジイの家もかなりの旧家だけど、私は実はおジイのことをあまり知らない。でも、おジイが「魔法使い」って言い出したならみんなもそれに従ってことは、きっと、相当偉い人なんだろうなあって。

そこまで口に出して説明しなくても、みずずさんには私の聞きたかったことの意味が分かったみたい。

「偉い、のもあるんでしょうけど、あの人の家がちょうど、みんなのお世話をする当番の年だったから、町中に伝えやすかったのもあるんじゃないね」

「でもやっぱり変なのー。まほーつかいはほうきにのって空とんだり、杖ふってじゅもん言うんだぜ。そんでわるいやつをやつつけるんだ！」

直登君が語るのは、物語の中の魔法使いのイメージ。

うん、そうなんだよね。

私も、魔法使いって言ったらやっぱり、猫やコウモリなんかの使い魔を連れて、黒いローブを身につけて、魔法の呪文を唱えれば、病気を治したり変身したり、人を殺すこともできたり、そういうイ

メージなんだ。

「そうねえ……でも実は、いたのよ。あの頃、とっても名物になっていた魔法使いがいたの。魔法の杖を持った、おばあさんが」

「杖？」

「そう、本当に魔法使いが持つような杖。おばあさんはね、その杖で月並町の宝を見つけたたのよ。まるでおとぎ話の中の魔女みたいに、杖を振ってね。あの人がいなかったら、魔法使いっていう呼び方は定着しなかったかもしれないわ」

「おたから！？」

直登君は急に目を輝かせてそわそわし始める。

「そう、お宝。なんだかわかるかしら？ ヒントはこれ」

みずず先生は後ろを向いて、黒板に赤いチョークでマークを一つ描いた。

「あー！ はいはいはい！ おれ知ってる！」

「はい、直登君」

「おんせん！ 月並温泉だっ」

「正解。よくできました」

やっと答えを言えた直登君がとてもうれしそうに胸を張る。おめでとう、と笑った私は、本当にちゃんと笑えてたかな。先生が、いつも向けてくれるような優しい笑顔で。

まさか、赤いチョークを見ただけでこんなに悲しい気持ちになるなんて思わなかった。

みずず先生の授業が終わって、私は一人で校舎を抜け出した。学校にいるのがちょっとだけつらい。黒板を見るだけで、廊下を歩くだけで、教科書を見るだけで先生のことを思い出してしまう。

夏休みに入ってから折角、忘れかけてたのにな。

月並町を囲む山の一角にある月並小学校。校舎の裏手に続く森の奥へ、分け入っていく。

森の奥に流れている川へと、涼しさを求めて歩いた。セーラー服を着てないからサンダルを履いた足はすぐに疲れるし、ハーフパンツから出た素足は草が当たって痛いし、息もすぐに上がって、ああもう最悪だ。

長い前髪だけは分けてピンで留めていたけど、額に浮いた汗が頬を伝って落ちてくる。

辿り着くまで思ったより時間がかかった。川の傍は、水があるおかげか空気が澄んでいて、穏やかな流れの縁に腰掛け、迷わずサンダルを脱ぐ。

「つめた……」

ゆっくり、ひんやりとした水に足を浸ける。木陰に吹く風も汗を乾かしてくれる。

暑さにほてった体が徐々に落ち着いていくのと同時に、だんだん頭も冷えてきて、思い出すのは先生のこと。

折角、学校から出てきたのにダメだった。一人になったら、余計に思い出しちゃう。

先生の顔、声、チョークを持つ手、後ろ姿、少しだけ群青色に見える目。

想っても、しょうがないってわかってるのにな。

想像の中で笑う先生の隣に、三島先生の姿が勝手に浮かんでくる。振られたときは自分が振られたっていうことだけでいっぱいいいっぱいで、三島先生のこと、あんまり気にならなかったのに。

今さら、悲しい。

私がただ先生を見てることしかできなかった間に、二人は、付き合ってたんだ。

こういう気分、なんていうか知ってるよ。

「……みじめ」

口に出したら余計に。

しかももしかも！あの時たぶん、三島先生は知ってた。私が告白しようとしてたこと、わかってて、私と先生を二人きりにしてくれただ。

敵に塩を送られるってこういうことなのかしら。

悲しいのか悔しいのか、よくわかんない。たぶん両方。

どうせ誰もいないから、頬を伝った涙もそのまま。うつむいて瞬きしたら、川の水の中に静かに落ちて混じり合う。

後から後から、こぼれ落ちてくる。

もう、こんな思い全部流れ出してしまうばいいのに。持ち続けておくのも、拾い集めるのも、しんどいや。

蝉の鳴き声がうるさいから、安心して嗚咽を漏らす。家だと声を上げて泣くことはできなかったから。

蝉の声と私の泣き声と、川を流れる水音、風が揺らす木々の葉音。不意に混じる、カシャツ——機械音。

私はびっくりして、声も、涙も止まっちゃった。今日は驚いてばかり。

音のしたほうを見ると、いつの間に来たんだろう。男の子が一人立っていた。カメラを構えて。

「邪魔してごめん。でも、君を撮ったわけじゃないから安心して」
重たそうな一眼レフカメラに隠れていた顔を見せて、人懐っこく笑う。見たことない顔だった。同い年か、少し上くらいかな。

私はまだ心臓が縮こまったままで、上手く答えることができない。
「気にせず続きをどうぞ。泣いてていいよ」

カメラ少年は悪びれもせずにそんなことを言うもんだから、さすがの私もカチンときてしまう。

気にせずって……。

「泣けるわけない」

「ああ、そう？じゃあ、お詫びに胸を貸そうか」

思わず抗議した私に向かって、少年はさらりと提案して両手を広

げる。

ええっ？ って、なるでしょう。だって、意味が分かんない。呆れて返す言葉が見つからない。

それなのに、

「顔、真っ赤」

少年はにやつと人の悪い笑みを浮かべた。からかわれたんだ。

「んなっ……これはっ暑いんだよ！」

腹が立ったので、川に浸けていた足を思いっきり蹴り上げて水しぶきを上げてやる。セーラー服を着ていない私の蹴りなんて大したことなかったんだけど。

「わっ……それは反則だろ。カメラが壊れる。折角いい泣き顔が撮れたのに」

「え？ やっぱり撮って……！？」

そんなのって恥ずかしすぎる！

文句を言おうとした私の言葉を遮って、彼は笑う。

「冗談だよ。先生のこと、好きなの？ 失恋でもした？」

またからかわれた。けどそのことよりも、核心を突く質問が続けざまに飛んできたほうが大問題だ。

「なんで知って——！？」

「口から出てた。先生、先生、って」

うわあああ恥ずかしい！ もう嫌だ。穴を掘って埋まってしまいたい。

初対面の人に泣き顔を見られて、失恋さえもあつさりバレて、今日は厄日に違いない。そうに決まってる。

思わず覆った目元が、まだ熱い。だけど、涙はもうすっかり渴いていた。さっきまで、二度と止まらないんじゃないかってくらい溢れてたのに。

「良かったら、話してみる？」

「へ！？ なんで？」

となりの岩に腰掛けながら、彼は気安く提案する。

「話したら楽になることもあるじゃん」

「でも、初対面なのに……」

はじめましての挨拶代わりにそんなデリケートな話をできるほど、私の神経は図太くないのだ。

知り合い相手でも、話をしたのはおジイ一人だけだっていうのに。しかも、おジイは根ほり葉ほり聞いたりしないから、失恋したっていう結果報告しか伝えていない。

おジイは黙って私の頭を皺くちやの手で撫でてくれた。そのときも涙腺がやばかったんだけど、「またたび」にはほかにもお客さんが居たから、ぐつと堪えたんだよ。

だから、私がほかに話をできる相手がいるとしたら——吏一君。普通にしているとキリっとかっこいい顔が、私の頭の中で優しく笑う。

いつだって、吏一君は優しくかった。会ったばかりの私の恋に、嫌な顔一つせずに協力してくれて。

結局、吏一君にはあれつきり会わないまま、ここに来ちゃったな。学校の友達はもちろん、私が先生を好きだったことなんて知らないし——むしろ隠してきたことだ。言えるわけがない。

「初対面のほうが話しやすいことだってあるよ」

私の心の中を見透かすようなタイミングで、目の前の少年が語りかける。妙に落ち着いた声で。

「そう、なのかな……」

そうなのかもしれない。私の場合は、特に。

彰彦を知っている相手には、話せない。あきちゃんを知っている人でなければ。

隣の少年を見る。思いのほか近い距離で、黒目がちな両眼とかち合う。

私が迷っていることも、わかったみたい。

「今、話せないってことはさ、まだ消化しきれてないんだよ。話しながら整理する方法もあるんだけど、まだそこまで言ってないだけ」

「話せるようになる?」

「なるよ。今は悲しくて辛いばかりでも、ちゃんと気持ちの整理がつく日が必ずくるよ」

「いつ?」

「それはさ、人によって違うからなんとも言えないけど。君の場合は――ね、名前、何ていうの?」

「あ……」

尋ねられて初めて、不安になった。

どうしよう。

今の私は、セーラー服を着ていない。

少しだけしてたメイクだってきつと、涙で落ちてしまった。

今の自分は、果たして女なのか男なのか。

相手には一体どう見えているのか。

どうしよう。

わからない。

「……あ、きつて、呼ばれる」

「アキ?」

うつむき加減で告げた名前は、相手の耳にちゃんと届いたみたい。男でも女でも大丈夫な愛称で良かった。

「そ、そっちは?」

「じゃあ、俺はコウ」

「……コウ、君」

じゃあって何よ。と思ったけど、黙っておく。私の名前につっこまれても困るしね。

相変わらずの蝉の大合唱に混じって、それほど遠くない場所からチャイムの音が聞こえてくる。古い拡声器みたいな割れた素朴な音。月並小学校のチャイムだ。普段は使われてないんだけど、みずずさんがいる間だけは鳴るようにしてあるんだって。

それを合図にするみたいに、コウ君が立ち上がる。背、思ったより高いな。私が座ってるんだから見上げるのは当たり前なんだけど、

全体的に細いせいかな。縦にひよろ長い。着る人を選びそうな派手なチエツクの細身のパンツは、不思議とよく似合ってた。

「八月中は時々この辺で写真撮ってるから」

私の顔をのぞき込んでくるコウ君の口元が一瞬だけにやっと笑みの形を作る。目の前で、声には出さずに口だけが動いて。

——また会いたいな、アキちゃん。

たぶん、そう言ったんだと思う。私の勘違いじゃなければ。

コウ君は身を翻して、私が来た道とは反対方向へと足を向けた。一度だけ、振り返ってカメラを構える。みつともない顔を慌てて隠そうとしたけど遅かった。シャッター音一つ。

「今度会う時には、失恋話ができるようになってるといいね」

「もう！」

木立の中に消えていく後ろ姿に怒鳴ってみたけど、本当はそんなに怒ってなかった。

だって、コウ君と話してる間は、先生のこと苦しい気持ちも泣くことも忘れてたんだ。

「よし！」

少しだけ気持ちが上向いたのは、きつとコウ君のおかげ。不思議ね。初対面なのに、なんだかずっと前から知ってる友人みたい。

立ち上がって伸びをしたら、ちょうど、木々の間から月並小学校の屋根が見えた。

帰ろう。

水に浸けていた足を大きく振って、水気を飛ばす。サンダルを履き直して、一步を踏み出したところで気づいた。

そういえばコウ君、私のことアキちゃんって呼んでたな。

セーラー服を着てなくても、女の子に見えるんだ。

うれしい、のかな。

またわからなくなりそうだったから、今はとりあえず考えるのを放棄した。

君がいない夏(2)

大学二年生の夏休みなんて、遊ぶためにあるようなものだ。

同級生が海だ花火だ祭りだと滑り込みセーフで手に入れたカノジヨたちと遊び呆ける中、俺の夏休みといえば、最悪だ。

スタートは悪くなかった。テストが終わった直後は明けコンと称した飲み会がいくつかあったし、大学の友人と海にも行ったし、それほど寂しい日を過ごしたわけではない。

ただ、お盆に入ると県外組はそろって帰省。後半になってからはバイトが一人辞めたせいでクソ店長に鬼のようなシフトを組まれていた。「どうせヒマなんだろう？」と鼻を鳴らした川岸が恨めしいというわけで、暑さもうだる八月後半、貴重な大学二年生の夏休みの真っ直中に、俺はバイト先「ムーン&リバー」でせつせとアイスコーヒーを運んでいた。

あれほど閑古鳥の鳴いていた店内も、夏休みに入ってから「忙しい」と言えるほどに客足が増えている。良いことだ。良いことだが、もう少しバイトの人数を増やしてくれ。

狭い店なので基本的にバイトは二人で回るが、これが九連勤になると文句の一つも言いたくなる。

そのくせ今日は店長の川岸は欠勤だった。おい。

一番客の多い魔のおやつタイムを過ぎて店内が落ち着いてきたころ、階段を上ってくる足音が一つ。

扉の開く音に、手に持っていた伝票から顔を上げる。長い髪を下ろした、オフモードの彰子さんがいた。

「いらっしやいませ」

「こんにちは。いつ来ても、君はいるのね」

感心しているのか呆れているのか、なんとも言えない顔をして彰子さんは呟く。たぶん、バイトばかりしている可哀想な奴だと思われるに違いない。

彰子さんは時々こうやって客として店に来てくれる。どうやらこのアイスコーヒーが気に入ったらしい。

「俺だって、せっかくの夏休みがこれでいいのかと思ってはいるんですけどね」

「あれから『あきちゃん』には会えたの？」

いつものカウンター席に腰掛けながら、彰子さんはさらりとその名を口にする。

「彰子さん、お願いだからそんなにあつさり地雷踏まないで」

「あら、ごめんなさい」

お詫びのつもりだろうが、コーヒーをケーキ付きで注文した彰子さんは静かに笑った。夏休み前にプロポーズをされて結婚式の日取りも決めたばかりの彼女は、会うたびに綺麗になっていく。

あきちゃんのこと好きな俺でさえ、うっかりすると見惚れてしまっただけに。

「夏休み中はずっといないらしくて」

「どこに行ってるの？」

「それもわからないんですけど……」

我ながら情けない答えだ。好きな女の子のことを、俺は一つも知らない。

「ぼやばやしてたらほかの男にとられちゃうわよ」

彰子さんは容赦なく地雷源に踏み込んでくる。これだから気の強い年上女は苦手なんだって。

「あきちゃんはその子じゃありません。佐々倉先生に失恋したばっかだし」

「あら、失恋したばかりだからこそ、よ。弱ってる時に優しくされたら、そんなつもりなくなっただってうれしいし、好意だって持ちちゃうかもしれないわ」

そうですね。ってあつさり論破。ダメだ。口では勝てる気がしねえ。

でもそれでいくと、あの日失恋したあきちゃんをその直後に慰め

たのは俺だ。泣いてるあきちゃんの細い肩を抱きしめて——は無理だったので、肩に手を添えただけ。

「でも、あきちゃんには佐々倉先生のことすごい好きでしたよ」

ささやかな反撃を試みる。

だけど、彰子さんはレアチーズケーキをパクリと一口食べてから、につこり笑った。

「そりゃあイイ男だもの。しょうがないわよ」

幸せの絶頂にいる彼女には隙などどこにもなかった。

むしろ、そのノロケにダメージを受けたのは俺のほう。

「幸せそうで何よりです」

「ありがとう。吏一君も、頑張つてね」

何をどう頑張ればいいんだろうか。

彰子さんは、きつと頑張ったんだ。

逆プロポーズをして佐々倉先生をその気にさせた。

あきちゃんも頑張ったけど、彰子さんの頑張りのほうが上だったのかもしれない。

俺は、頑張ればなんとかなると思えるほど楽観的な性格をしていない。だけど彰子さんが言うところ、不思議と嫌な感じはしなかった。

「頑張ります」

「何を？」

「え？」

まさかそこを聞かれるとは思わなくて驚いた俺に、彰子さんはいたずらっぽく笑って、

「側に居てあげてね。本当に困ってる時に……助けてほしい時に側に居てくれる男は絶対に特別な存在になるから」

彰子さんの言葉は力強い。たぶん、彼女自身の実感がこもっているからだ。詳しいことは聞かなかったけど、彰子さんの特別な存在になった男が誰のことかは、言わなくてもわかるよな。

コーヒーを飲み終えた彰子さんは、またね、と店を後にする。手を振って見送った後、思わずため息が漏れた。

店にかかるカレンダーの、八月の残り日数を数える。あきちゃんの夏休みが終わるまで、あと十日余り。

八月が終わったなら、すぐに会いに行こう。決めた。それで、デートに誘う。

密かに決意して、カウンターテーブルに残った皿とグラスを片づけていると、先ほど閉まったばかりの扉が再び音を立てた。

「やあ、働いてる？」

暢気に顔を覗かせたのは川岸で。その童顔は笑うとますます幼く見える。しかしこんななんでも店長だ。

「てめえが働かせてんだろ」

「正解」

ふざけた調子で答える川岸は、暑そうに額の汗をぬぐいながらカウンターの席に腰掛けた。さっきまで彰子さんが座っていたイスだ。

「吏一、コーヒー一杯」

「は？ 客面する気かよ」

面倒くさいけどこんな使えない店長の注文にもちゃんと応えてやる俺はやさしいと思う。

コーヒーを準備する手を動かしながら、川岸の顔を見る。手をパタパタとうちわ代わりに動かす男は、喉元を晒して暑さと戦っている。

「その傷、どうしたんだ？」

顎の下辺りから顔の輪郭に沿って右へと数センチ、絆創膏が見えて、尋ねてみた。

「ああこれ？ 彼女に、ちょっと」

絆創膏に手を触れながら、川岸が殴りたくなるような答えを返す。川岸にでさえ彼女がいるなんて。

「今日もよろしくしてたってわけかよ」

「童貞の嫉妬は見苦しいな」

「童貞じゃねえっ」

声をひそめながら反論した俺の目の前に、川岸はいきなり一枚の

コースターを取り出して見せる。

「なんだこれ」

「今日は仕事だったんだよ。本店でこれの打ち合わせ。明日からのコースター使うから」

「ふーん」

そんなのは別にどうでもいい。だけど何かが引つかかって、俺はそのコースターを受け取って見てみる。

鮮やかなスカイブルーの空に浮かぶ雲。丸い円を縁取るように金に近いオレンジ色の文字が描いてある。

——Are you a wizard?

これと同じものをどこかで見た。わりと最近の話だ。どこだったっけ。

「コーヒーまだ？」

俺の思考をさえぎるようにして、川岸が催促する。

コースターをひとまず脇に置いて、カップソーサーを川岸の目の前へ。白い湯気が揺れるホットコーヒーを見て、川岸は心底嫌そうな顔をした。

君がいない夏(3)

月並小学校の一日はラジオ体操から始まる。

直登君と美佳ちゃんは小学生だからね。直登君なんて一番に飛び起きて、元気よく校庭に飛び出して行く。

私はラジオ体操カードにハンコを押す係。

二人が音楽に合わせて体操してる間、木陰のベンチに座って欠伸をかみ殺す。

みずさんの作るあさげの匂いがゆつくりと校舎のほうからだだよつてきて、自然と頬が緩んだ。

ここでの仕事はそんなに多くない。

朝ご飯を食べた後はみんなで少し掃除をして、小学生二人は宿題の時間。私は洗濯のお手伝い。

途中から私も宿題に参加するけど、直登君はすでに集中力をなくしていて、いつも私の邪魔ばかりする。おかげで課題がちっとも進まない。

「あきちゃんあきちゃん！」

今日も元気にまわりついてくる直登君が私を呼ぶ。聞こえないフリを試みる。あんまり効果はないんだけどね。

座ってる私の後ろから首に腕を回してぶらーんと、く、苦しい！いくらセーラー服を着ても不死身じゃないんだからね。

「こら！ 苦しいでしょ！」

「あきちゃんマンが怒ったー！」

怒られて嬉しそうな直登君はきゅきゅと私の周りを跳ね回る。
「もう……」

ここで本当に怒ったら思うつぼ。暑さのせいで苛つきやすくなっている頭を冷やそうとして、息を吐く。

だけど、ほだけかけていたセーラー服のスカートを直登君が引っ張るもんだから。

「あっ」

あっさりと引き抜かれた私のスカーフ。
途端に首もとが寂しくなる。

「こらっ！ 返しなさい、直登君！」

そのままスカーフを手に教室を飛び出して行く直登君。私もすぐに後を追いかける。

相手は小学生。すぐに追いつけるはずだ。いつもならば――。気付いたのは、階段を駆け降りる足がもつれそうになった時。

あれ、おかしいな。セーラー服を着ているはずなのに、変だよ。全然、速く走れない。

足が重い。息が上がる。腕が振れない。体が思うように動かない。これじゃあまるで、セーラー服を着てない時の私みたい。

渡り廊下に出たところで、直登君はなぜか立ち止まって私を待っていた。

「あきちゃんおっそい！ なにやってんだよー」

「だって、直登君が速くて……」

どう答えたらいいのかわからない。こんなのは初めてで。

気持ち悪い。きつと、走ったからだ。

とにかくスカーフを取り返さなければ。

そうすればこの気持ち悪さがなくなる気がして、私の手は、直登君が握りしめているスカーフの片端を掴む。

「返し……！」

「えーっやーだよー」

スカーフの反対側を掴んで離さない直登君と、二人で引っ張り合いつつこみたいになって。

あ、まずい。

そう気づいた時には遅かった。

耳障りな音。

私のスカーフが、二つに裂けて――

「あっ……うそ……」

崩れ落ちるみたいに膝をついた。自分の体を支えてられない。
きもちわるい。

どうしよう。

周りの音が何にも聞こえないのに、自分の心臓の音だけが異様に大きくて、気持ち悪い。

「……あきちゃん！」

これは、直登君の声だ。

ようやく、泣きそうな顔をしてこっちを見ている直登君の顔を認識する。私の方が泣きたい気分だ。

「あきちゃん、だいじょーぶだよ！」

大丈夫？

大丈夫じゃないよ。

胸が痛い。力が入らない。魔法が効かない。

「おれがなおしてやるよ！」

「……え？」

直登君がポケットから取り出したのは、小さなボンド。木工用ボンドだ。

「おれのまほうでなおしてやるよ！ あきちゃんのスカーフ」

小さな魔法使いは頼もしく言い切ると、破れたスカーフの切れ目にボンドを塗っていく。

木工用ボンドだよ？

スカーフは、布でできてるんだよ。

普通の人だったら笑ってしまう場面だ。

だけど、直登君は魔法使いだから、私は黙って見守ることにする。破れた切れ端の片方をボンドを塗った場所に重ねて、直登君はその上からぎゅっぎゅっと手のひらで押さえつける。ただそれだけ。

「よし、できた！」

直登君がスカーフを広げて見せてくれる。

「う、嘘……」

手品のようだった。

何事もなかったかのように、元の形のままのスカーフが、窓のない渡り廊下を通り抜ける温い風に、揺れる。

受け取って、確かめる。切れ目なんてどこにもない。ただ、ほんの少しだけ木工用ボンドの匂いが残っていたけれど。

「直ってる……」

魔法みたい。という言葉を食べ飲み込んだ。その表現は正しくない。だってこれは本当の魔法だもの。

「凄い。……ありがとう」

大事な大事なスカーフをぎゅっと握り締めて、襟の下に通して結び直す。胸の辺りにくすぶっていた吐き気は途端に収まって、気持ちもずいぶんと楽になった。

ああ、よかった。

「あきちゃん、ごめんなさい」

さっきまで得意げだった直登君が、思い出したみたいにしゅんと肩を落とす。

「いいよ。これで仲直りだね」

頭を撫でて笑ってみせたら、直登君も安心したように表情を緩めた。

「感心しねえな。むやみに魔法を使ってンじゃねえよ」

後ろから、不意に割り込んできた声。

振り返ると、背の高いスーツ姿の男が、眉間に皺を寄せて立っていた。どこかで見たことのあるような背格好だ。それに、この声。

「里中先生はどこだ？」

男が尋ねる先生が、みすずさんのことだと気づくには少しだけタイムラグがある。

だけど、この男こそが、ここに来た初日に私の着替えをのぞいた人物だと気づくにはさほど時間はかからなかった。

「あつ！ あ那时的……」

「ん？」

「着替えのぞいた！」

「あ？ あー…… あん時のペチャパイか」
「！？」

こういう場合に、赤くなればいいのか青くなればいいのか私はわからない。

頭の中は、真っ白だった。

堂本と名乗った男は今、みすずさんと一緒に校長室にいる。

私はその部屋の外で、扉にぴったりと片耳を押しつけて待機なう。本当は盗み聞きなんてしたくないけど、男をみすずさんのところに連れて行った時の、みすずさんの表情がどうしても気になって。

どこか諦めと呆れの混じった笑み。いつも明るくて優しいみすずさんの、あんな顔を見たのは初めてだ。

みすずさんに何かあればすぐに私が飛び込んで男をはり倒してやる。そんなつもりで。

「何度来られても、私はやめるつもりはないわよ。あの子たちには居場所が必要だわ」

先に口を開いたのはみすずさん。いつものやさしい声だったけど、頑として譲らない意志が見え隠れする。

「やっぱり考えを変える気はねえか。待っても無駄だったな。ンなことだろうと思ってたけど」

前回来たときも同じような話をしたのかもしれない。堂本はわざとらしく大きな息を吐いた。

「やり方を変えるよ。アンタらを監視化に置かせてもらう。悪く思わないでくれ」

「あら、随分と仰々しいのね」

「アンタはわかってないんだ、先生。事態は昔よりもずっと悪くなってる」

「私が言ってるのはそういう意味じゃないわ。監視だなんて、あな

たは『守って』くれようとしてるんでしょ？」

威勢の良かった男の声が途端に聞こえなくなる。違う。凶星だったから、答えられなかったんだ。

なんか、思ってたのと違うみたい。男がみすずさんに危害を与える心配はなさそうだ。

「あなたは昔からそう。あの人とはやり方が違うだけで、目的は結局一緒なの」

男はまだ口を噤んだまま。

みすずさんの言う、あの人が誰のことなのか、私にはわからなかった。

「この学校が買収されそうになったのを知ってるか」

男は気を取り直して話を変えたようだ。

「まあ……そんなこと一言も……」

「ジジイは言わねえだろうな。俺の周りにも最近きな臭えのがうろしてる。しばらく魔法を使わないほうがいい」

みすずさんもその言葉には同意したみたいだった。そこで話がひと段落したのがわかって、私は扉の前からそっと耳を離す。

「あれっあきちゃん何してんだー？」

ああもう、直登君。タイミング悪すぎ。

シートと人差し指を立てたけど無駄だった。

「盗み聞きとは品がねえな」

扉が開くと同時にそんな言葉が頭上から降ってくる。人のことペチャパイ呼ばわりする人に品をどうこう言われたくない！ けど、盗み聞きは事実だから何も言い返せない。

なんて嫌な奴。

ぐつと唇を噛んで睨みつける。私よりも、先生よりもずっと年上の男の人を。近くで見ると、厳しい両目には年齢を感じさせる皺があった。もしかしたら父親とそう変わらない年齢なのかもしれない。そのくせ偉そうで嫌みな言動はちっとも大人らしくない。

私の視線を無視して脇を通り過ぎ、男は直登君に近づいていく。

そして、その手から木工用ボンドを奪い取った。

「あつ何すんだよー！ 返せよおっさん！」

「没収」

——魔法を使わない方がいい。

男の忠告が頭の隅をよぎる。だから彼は直登君から魔法の道具を取り上げたんだろうけど、ボンドを持つ手を直登君の手が届くか届かないかの高さで餌のように掲げる姿はとても大人のすることとは思えなかった。

嫌な奴だ。

けれども男はその後、ここに何度も来るようになる。毎日ではないけれど、三日と開けずに。監視すると言った言葉通りに。

直登君がボンドを取り上げられたように、私もセーラー服を着れなくなった。男に言われたからじゃない。みずさんと話をして、そう決めたんだ。詳しい事情はわからないけれど、魔法を使わないほうがいいってことはわかった。

そういうことは、今までだってなかったわけじゃない。

この町で、魔法使いがひっそりと暮らすために必要なことなんだって、私は理解してる。

八月に入ると夏が加速する。お盆が近づくにつれ、どことなく落ち着かない気分になった。

だって、お盆がすぎた後の夏休みはもう、終着点まで超特急だ。

夏休みが終わる前に、行ってみようかな。

もう一度、あの場所に。

コウ君に、会いに行ってみようかな。

君がいない夏(4)

暑さで脳がやられるというのは本当だと思う。

少なくともそのときの俺の脳は正常な状態ではなかった。

あきちゃんの幻を見てしまうほどに。

バイト帰り、クーラーを効かせた車の中。強い西日は否応なく目を焼く。こういうときにサングラスをかけられないのは不便だ。あれも眼鏡の一種だから、見えなくてもいいものが見えてしまう。

信号待ちの間に冷房の温度を下げる。それにしても暑い。

アイスでも買って帰るか。

左手に見えたコンビニに心が引かれた。

その視線を少し右にずらしたところに、見えた人影。すぐにコンビニの角を曲がって見えなくなっただけで、歩くショートカットの少女を確かに見た、気がしたんだ。

あきちゃん。

信号が青に変わる。俺は迷わずコンビニの駐車場に車を入れた。

車を降りて、コンビニの扉の前を素通りすると角を曲がって。

その瞬間、きゃっと小さな声がした。角の向こう側から歩いてきた人とぶつかりそうになって、慌てて足を止める。

「ごめ——」

「いえ、こっちこそごめんなさ、い……」

謝ろうと相手を見た瞬間、それ以上の言葉が出なくなった。顔を上げた彼女も、同じで。

お互いに次の台詞を探して、変な沈黙が落ちた。先に立ち直った彼女が確認するように俺の名前を呼ぶ。

「吏——」

酷く優しい、懐かしい声で。

目眩がした。暑いせいだ。

俺は一度視線を外して、彼女の後ろへと続く道を確認する。そこ

にあきちゃんの姿はなかった。

久しぶり。偶然。元気だった？——うん、俺は元気だよ。じゃあな。

そんな風に当たり障りのない会話だけして、さっさと立ち去ってしまえばよかったんだ。

けどそんな気軽な会話を交わせるほど俺たちの関係は綺麗さっぱり片づいているとは言い難い。

そう、こうやってテーブルを挟んで向かい合わせに座ることに気まずさを感じるほどに。

時間があるならお茶しない？と誘ってきたのは彼女のほう。強制されたわけでも脅迫されたわけでもない。

断ればよかったのか。

そうできなかったのは、罪悪感のせいだ。

彼女は、男一人では入りにくそうな近くのおしゃれなカフェを選んだ。それもまた俺をどこか憂鬱な気分にする。

だってここは、彼女のテリトリーじゃないか。

「元気そうだね」

飲み物を注文した後で、彼女が唐突に口を開く。

「うん、そっちも変わってないみたいで、」

「変わったよ。髪が伸びたし、体重も落ちたし」

「よかった」と続けようとした俺の言葉を遮るようにして主張する声にはトゲがある、ような気がする。

「髪、結んでるからわかんなかったんだよ」

「前は結べなかったの！」

「そんなこと知らねえよ」

冷たく突き放すように返したら、彼女は黙ってしまった。怒ってる。これは絶対に怒ってる。

でももう、そうやって顔色を伺わなくてもいいはずなんだ。

「……なんか吏一、変わったね」

彼女はテーブルを見つめたままぼつりと呟く。頼んだアイスティーが二つ運ばれてきて、尋ね返すタイミングを逃した。

俺が、変わった？

彼女は勝手に答えを続ける。

「前だったら、ごめんって言って、そうだねって頷いてくれた」
確かにそうだ。

だってそうしないと、彼女は子供みたいに怒って拗ねてしまうから。

「私はそれが嫌だった」

「は……？」

思わず、声に出た。たぶん顔にも出ていた。

なんだそりゃ。

「私の顔色なんか伺わないで、我慢しないで、怒ってほしかった」
彼女は俺のほうを見ずに勝手なことを言う。

意味がわからない。理解できるとも思えない。

いつだって強気で、自己主張が激しくて、わがままで、そのくせ時々見せる弱さが可愛くて、俺はそれにずっと振り回されて。どうしたら彼女が笑ってくれるのかって、ずっと……。

それなのに、なんだよ。

「なんだよ、それ……」

今さらどうしようもない。

一つ、溜め息を吐く。

呆れた。

彼女を責めるつもりで吐いた溜め息じゃない。

彼女の本心を聞き出せなかった自分に呆れてんだ。そりゃ、若干、いや大分、彼女に対して怒りたい部分もあったけれど。

「ごめん」

そんな俺の怒りが伝わったのかもしれない。彼女はストローの袋

を握りしめたまま謝罪する。

「いや、俺も悪いんだろっし」

「だろっつて……悪いって思っていないなら謝ることないじゃない」
顔を上げた俺の目の前に、釈然としない憤りを抱えた彼女の顔がある。

これだ。いつも俺たちはこうやって些細な言葉の食い違いで傷つけ合う。

俺は彼女のそんな顔を見たくなくて、傷つけなくて、いつも「そうだな」で片づけてきた。それが嫌だったって、今さら言うんだもんな。

「じゃあ言うけどな。今さらそんなこと言われても知らねえよ！
なんでつき合ってた時に言わなかったんだよ。二年もつき合ってたのに、すっげえ悲しくなるだろ……」

泣いてしまふんじゃないかと思って、恐る恐る顔を上げる。

泣きそうではあったけど、真っ直ぐに俺を見る彼女は微かに笑っていた。

そして何の前置きもなく言う。

「今、好きな子いるでしょう」

質問がストレートすぎて頭の処理が追いつかない。

何がどうやってどうしたらそうなるんだ。女ってわかんねえ。

「いるよ」

嘘をつく必要も隠す必要もないので白状する。

少し緊張感が解けたおかげか、猛烈に喉が乾いていることに気づいた。

自分のアイスティーにストローをさしながら、くつついてきたシロップを彼女の方に押しやる。

「ありがとう」

シロップを二つ投入して、彼女は満足そうに礼を言った。
あれ？

「やっぱりお前も変わったかも」

「え？」

「前は礼なんか言わなかった」

前は、女王様みたいに当然って顔で黙って受け取ってた。

「……嫌な子だね」

もちろん、彼女だって最初からそうだったわけじゃない。

「俺が甘やかしすぎた」

それを聞いて、彼女は肩をすくめて薄く笑った。

年上の彼女のわがままを、俺だけが聞いてやれることが嬉しかったのも本当だったんだ。

もっと早くに怒ればよかったのかもしれない。今さらもう、遅いんだけど。

彼女から別れを切り出された時も、俺はただ黙って受け入れた。彼女が言うなら仕方がない。意志が固くて言ったことは絶対曲げない彼女のことだから、俺が何を言ってもその決意は変わらないだろう。そう決めつけて。

あの時、別れたくないって、まだ好きなんだって、ちゃんと言っておけばよかった。後悔したのは随分と後になってからで。

タイミングを逃した言葉はもう吐き出せない。

あきちゃんに出会って、あの子が先生に告白したのを見届けた瞬間に、やっと消化できた気がした。あきちゃんには悪いけど、俺のできなかったことを代わりにやってもらったのかもしれない。

あきちゃんに後悔してほしくなかったのも本当だけど。

「あなたは、魔法使いですか？」

不意に、彼女が妙な言葉を呟いた。

視線の先には、グラスの下に敷かれたコースターがある。俺も自分のコースターを見てみた。夏らしい青空に、オレンジ色の英字。

——Are you a wizard?

「なんか意味があるのか？」

答えを求めない独り言。

その答えは随分と後になってもたらされることになるのだが、そ

の時まで俺はコースターのことなど完全に忘れていたんだ。間拔けな事に。

店を出るころには西日は完全に沈んでいた。家まで送るといふ俺の申し出を彼女は躊躇いなく断る。

「助手席に女乗せちゃダメだよ。好きな子に見られたら誤解されるでしょ」

きっぱりと。

そついう潔さが、好きだった。

なんの期待も持たせずにあつさりと背を向ける彼女の強さが、好きだった。

名前を呼んでみる。

彼女は振り返らない。

それでも俺は、彼女のことを好きだったんだ。

「綾」

もう一度だけ、自分だけに聞こえる小さな声で彼女の名前を呼んだ。

途端に、うるさくなった蝉の声にかき消される。

ああちくしょう。暑いな。

だけど、夏の本番はこれからだ。

まだ八月に入っただけで、このときの俺は知らなかった。この先の夏休みがバイトで忙殺されることも、川岸に彼女がいることも、もう一つ、あまり嬉しくはない出会いが待っていることも。

君がいない夏(5)

コウ君に会いに行こう。

そう思っていたのに、その思いはなかなか叶えられなかった。盆踊りの準備に忙しかつたんだよ。

準備っていうのは、町内会たちの人たちと一緒にやぐらを組み立てたり、テントを立てたり、荒れ果てたグラウンドの草をむしったり、外の花壇を綺麗にしたり、飾り付けをしたり、そういうこと。力仕事がメインだから、準備の時だけはセーラー服を着ようと思つてただけど、堂本さんとその取り巻きみたいな人たちがたくさんやつて来て、重いものを運んだり組み立てたりを全部やつてくれた。おかげでセーラー服の出番はなし。

「私、手伝わなくても大丈夫かな」

花壇の手入れをしながら、それでも人手はあつたほうがいいんじゃないかと思つて、一度だけみすずさんに聞いてみた。

「いいのよ。あの人は自分がやりたいだけなんだから」

返ってきたのは、どこか突き放すような答え。

「あの人は魔法が嫌いだから、できることなら魔法使いには関わりたいくないって態度で、私がこうやって小学校で魔法使いの子供たちを受け入れているのも嫌がるんだけど、本当は凄く気に入ってるの。堂本の家に生れた以上は、無視もできないしね」

「魔法が嫌いって……堂本さんは魔法使いじゃないの？」

よくわからない。自分の魔法が嫌いって人は初めてだ。

「魔法使いよ。でも、昔から自分の魔法が嫌いみたい。私は、彼の性に合つてると思うんだけどね」

みすずさんは忙しくスコップで土を掘りながら、私の問いに答えしてくれる。

魔法使いになるのには、きっかけがある。私の場合は、お姉ちゃんのことが羨ましくて凄く妬ましかつた時期に、お姉ちゃんのセー

ラー服を着てしまったこと。

魔法使いになるのは一定のストレスが必要なんじゃないかっておジイは言ってた。魔法の道具との巡り合わせもあるけど、魔法が現われるかどうかはその時の心が色濃く反映されるんじゃないかってだから、「魔法」は大抵の場合、使う人にとっても合ってるはずなんだ。

体が弱くて引っ込み思案だった私を変えてくれたセーラー服の魔法。私は、好きだよ。

「どういう魔法？」

「本人に直接聞いてみたら？」

たぶん教えてもらえないだろうなと思ったけど、やっぱりそうだよね。

魔法使いの不文律。

魔法のことを人にあまり話さないほうがいい。魔法使い同士でも同じだ。

「あ、でもあきちゃんの魔法のことは知ってるでしょうから、フェアじゃないわね」

「えっなんで知ってるの!？」

「堂本の人間だから、かしら」

「あ、そうか……」

納得、しちゃった。

堂本家は、月並町の中ではちょっと有名な旧家だ。魔法使いがたくさん生まれているっていう意味で。おジイの名字も堂本だった気がするし——いつもおジイって呼んでるから記憶があやふやだけど、たぶん合ってる——、宮司家も元を辿れば堂本の分家に当たる。

「でも、別にいいや」

堂本さんの魔法の秘密を、そこまで知りたいかと問われるとノーだもの。堂本さんって人の神経を逆なでするようなちょっかいの出し方するから、話すと売り言葉に買い言葉で喧嘩になっちゃうし……。つまり、あまり関わりたくないってこと。

「悪い人じゃないのよ」

みずずさんはちよつとだけ肩を竦め、おざなりにフォローめいた言葉を口にした。

祭りの準備に追われていれば、一週間なんてあつという間。

八月十五日——本番の日はすぐにやってきた。

思い思いのお面をつけた人たちがやぐらの周りに円を描いて、音頭に合わせて踊るのがこのお祭りの定番。お面は必ずつけなきゃいけないってわけじゃないんだけど、月並町ではつけない人のほうが少ないみたい。狐や鬼のお面もあるけど、小さい子はアニメキャラクターのお面でカラフルだから見ているだけでもちよつと楽しい。

月並小学校の小さなグラウンドが、今夜ばかりはそこそこ多くの人で埋め尽くされる。

私は綺麗になったベンチに座って、ぼうつとそれを見ていた。

仮面ライダーのお面をつけた直登君がおかめのみずずさんに綿菓子をおねだる。その隣で、ドラミちゃんの美佳ちゃんはいつも通り静かだ。

私には、その中に入っていく気力がない。準備で疲れてるのもそうなんだけど、セーラー服を着ていないせいで元気が出ないのもそうなんだけど、そうじゃなくて。

「おい、折角の祭りだってんのに何やってんだ」

声が頭上から降ってくる。乱暴なその口調も大分聞き慣れてきた。堂本さんだ。

「ちよつと疲れてるだけです」

応える声もぶっきらぼうなものになる。

堂本さんは興味のなさそうな相づちを打った後で、隣に立ったまま私を見下ろして一言。

「孫にも衣装ってヤツだな」

言うと思っただけだね！

そんな挑発にはもう乗りません。ここ数日でわかったんだ。この人の言動に反応したら負けなんだってこと。

「堂本さんが選んでくれたんですね。ありがとうございます」

無理矢理につこり笑顔を作ってお礼を言っただけ。相手が子供みたいに来るのなら、私が大人の対応を見せてあげる。って、やってみたのはいいんだけど。

「やっぱり青で正解だな」

急に満足そうに笑うから、ちょっと困った。

私に似合う色、選んでくれたのかなあって。もっと、ちゃんとお礼を言わなくちゃいけない気がするじゃない。

「あのっ」

「知ってるか？ 浴衣とか着物は寸胴のほうが似合うんだぜ」

ああもう。なんでこの人ってこうなの。

前言撤回。

「堂本さんって絶対独身でしょう！」

こんな人のこと好きになる女の人、いるわけがない。絶対に。

「キスもしたことねえガキがわかったようなコト言っただけじゃねえよ」

相変わらず嫌みたっぷりでたけど、勢いがなかったから、たぶん私の読みは当たってる。悔しいことに堂本さんの言ったことも当たってるから、痛み分けてところ。

これ以上は泥仕合になる気がして——そうなら勝っても負けても気分が悪くなるだけってわかってるから——何も言い返せなくなる。

ああもう。なんだか調子が出ないのはきつと、慣れない浴衣を着てるせい。

正直なことを言うとね、セーラー服以外で女の子の格好をするの、初めてなんだよ。つまり、女装ってこと。

セーラー服は私にとっては戦闘服みたいなもので、だから、気分

的にはこれが初めての女装。

自分でもびっくりした。なんでこんなに恥ずかしいんだろう。セーラー服はちっとも恥ずかしくないのに、女の子の浴衣はとっても恥ずかしい。

どうしてかな。嫌なわけじゃないんだけど。

そういう感情に振り回されたのもあって、着るだけで疲れちゃったんだよ。

あと、この格好でうろろして下手に知り合いに会っても困るしね。たぶん誰も気づかないと思うけど。

月並町は小さな町だけど、当たり前前に誰もがみんな知り合いってほど田舎なわけじゃない。

今夜はこれだけ人がいるんだもん。きっと、大丈夫……

「あ……うそ……」

そうだった。これだけ人がいようと、関係なかった。狭いグラウンドの中で、私はいとも簡単に見つけてしまう。

「せんせ……」

どうしよう。目を離せなくなる。

久しぶりに見る先生。

少し、髪を切った？

どんなに遠くからでも、その横顔は優しい。ってわかってしまう。良すぎる視力がにくい。

違うな、盲目なんだ。

そう思ったら、急に視界がぼやけた。なのにまだ、先生を追い続けてしまう。

「どうした？」

急に黙ってしまった私に、堂本さんが怪訝な目を向けてくる。だけど私は、それにかまってられなかった。悪いけど。

先生が好き。まだ、大好き。

諦められるって、忘れられるって、どうして思ったりしたんだろう。そんな、簡単な気持ちじゃないんだよ。

私は私なりに、真剣だったんだよ。本気だったんだよ。最初から叶わないってわかってた。それでも好きになった人だった。

気がついたら、目が追ってた。どうしようもなかった。そうだよ。

失恋してすぐに諦めがつくようなハンパな思いで、好きになれる相手じゃない。

後から後から溢れてくる涙を止める術を知らなくて、浴衣の袖で拭う。ごめんなさい。

堂本さんは、気づいちゃったのかもしれない。

私の視線の先にいる人に。

遠くから顔を見るだけで辛いのに、どこかで、会えて嬉しいって思ってる私がいるのも事実なんだ。

前は嬉しいばかりだったんだよ。なのに、今は苦しいよ。

前は一日中見続けてても飽きなかったんだよ。なのに、今は見続けることが苦しいよ。

けどまだ目が追っちゃうんだ。自分の意志とは関係ないところ
で。

まだ先生を見ていたい。

もう先生を見たくない。

どっちも本当で、どっちを選んでも苦しいんだったら――

「……？」

揺れていた視界が、不意に真っ暗になる。

なに、これ。お面――？

堂本さんが、私の顔を隠すみたいにして、お面をつけてくれたんだってわかるのにちよつと時間がかかった。

お面に開いた二つの覗き穴から見える世界は、小さく丸い。ぐつと狭くなつた視界の中にはもう、先生の姿は見当たらなかった。

「みつともねえツラ見せんな」

堂本さんは相変わらず酷い言い様。そのくせ頭の上に置かれた手

は温かくて、困る。

なんにも言い返せなかった。喉の奥が苦しくて。
まだ、ダメなんだ。

いつになったら、ダメじゃなくなるんだろう。

コウ君は言ってた。

いつか必ずそういう時が来るって。

今日でも明日でもいい。早くきてほしい。

前は、先生のことを考えるだけで楽しくて、一目姿を見るだけで
一日中幸せだった。それなのに今は、苦しいよ。

好きな人のことを考えて苦しくなるのは、悲しいよ。

お面の下からぼたぼた落ちた滴が浴衣に染みを作る。せつかくの
かわいい浴衣なのに。台無しだ。ごめんなさい。

だけどどうすることもできない私の膝の上に、ふわりとハンカチ
が落ちてくる。

堂本さんって本当は意外と、優しい……のかな。

「あ、ありがとう……ごじゃ……ず……」

「鼻水だらだらで何言ってるのかわかんねえよ、きつたねえな」

「！？　ぎつぎつで、やぎじがったのに……っ」

やっぱり前言撤回。口が悪いのも性格悪いのも変わってない。

「ごちゃごちゃうるせえな、気が向いたただけだ」

「うー……あ、あしだは雹でも降るんじゃないですか」

悔しいから、鼻声でみっともないけど言い返してやる。

「降らねえよ。明日は台風だ」

堂本さんはやけにきっぱりと言い切った。

予言というより断言。

変なの。台風がきてるなんて話、誰もしてなかった。

今日の時点では。

状況が変わったのは、大分時間が経ってから。

祭りが終わって、片付けでくたくたになった私が寝こけていたこ
ろ。

——近海で急速に発達した台風がみるうちに北上し、朝には月並町を襲うだろう。

そんな予報が入った。深夜のことだった。

堂本さんの言ったとおりだったな。

朝方、風の音で目が覚めて、みんなでテレビを見た。かなり大きな台風が来ているらしい。月並町にも暴風警報が出ていた。

「あきちゃん、美佳ちゃんと一緒に、外に風で飛びそうなものがあったら玄関の中に入れておいてくれる？」

「花とか野菜は大丈夫かな」

「大丈夫よ。強く育ててるもの」

みずさんが力強く答えるから、そうなのかな。

「おれはおれは！？」

「直登君は私と一緒に教室中の窓が全部閉まってるか見て回るの。さあ、競争よ！」

競争と聞いて目を輝かせた直登君が一番に駆け出していく。

「美佳ちゃん、いこっか」

私が声をかけると、細っこい顎が、麦わら帽子の下で小さく頷くのが見えた。八月はもう半分が過ぎようとしてるけど、美佳ちゃんとはずっとこんな感じ。もうちょっと距離を縮めたいんだけど、私もそういうのがあんまり得意じゃなくて。

強い風に吹き飛ばされそうになりながら、私と美佳ちゃんは校舎の周りを歩く。こんな時、どんな話をすればいいんだろう。

直登君が相手なら楽なんだ。一緒に遊べばいいだけだから。美佳ちゃんはおとなしい子だから、おいかけてこをして遊ぶ感じではないし、かといって気の利いた話題も浮かばない。困ったなあ。

グラウンドの隅に立てかけられた箒を手にとって、一本を美佳ちゃんに差し出してみる。

「これ、飛ばされちゃうかもしれないから、中に持って入ろうか」
美佳ちゃんは躊躇ってるみたいだった。黙ったまま棒立ちで、両手の拳をぎゅっと握ったまま動かない。

「どうしたの？」

麦わら帽子のつばで隠れた顔をのぞき込む。今にも泣きそうに唇を噛みしめて、どうしたらいいのかわからないって顔をしてた。

え、え、どうしよう。具合でも悪いのかな。私が何か悪いことをしちゃったのかな。

どうしたらいいのか分からないのは私も一緒で。おろおろするし
なくなつて。

「あつ……！」

一際強い風が吹いて、美佳ちゃんの麦わら帽子をさらってしまふ。
美佳ちゃんの長い髪と一緒に舞い上がって、その向こう側に、麦わら帽子をナイスキャッチした背の高い男の姿が見えた。

「小学生いじめんなよ」

昨日の今日で、どんな顔をしたらいいのかわからない。

でも、堂本さんの態度は相変わらずで。

「いじめてない！」

堂本さんは私をいつも通りにからかってから、美佳ちゃんの頭の上に麦わら帽子を乗せる。

「ほら、しっかりかぶっとけ」

美佳ちゃんは頷く。帽子の下で、小さく、ありがとって口が動いたのが分かった。

しかも、美佳ちゃんは堂本さんの手にそつと触れる。それに気づいた堂本さんは、美佳ちゃんの小さな手をしっかりと握った。

すつごく、すつごく不思議なんだけど、美佳ちゃんは堂本さんには懐いてるんだ。下手したらみすずさんよりも堂本さんと一緒にいるときのほうが嬉しそうだ。本当に、不思議。

「台風来るぞ」

「知ってます。だから片づけしてるんだって」

つい、冷たく返してしまっけど、今はもうなんとなく私にもわかってるんだ。堂本さんが、何のためにここに来てるのか。

たぶん、この人は心配して来てくれてる。

一体何がそんなに心配なのかはわかんないけどね。

「あの、昨日はありがとうございました。ハンカチ、洗って返します」

「鼻水だらけのハンカチなんかいらねえよ」

「だから洗って返すって……！」

素直にお礼を言ったのに、ああ言うからこう言っちゃう。せつかく堂本さんのこと見直したのにな。とか言ったらまた「誰も頼んでねえよ」とか憎まれ口を叩くのだろうか。この人は。

話を変えよう。

「堂本さんの魔法って、天気がわかるんですか？」

ふっと湧き起こったのは——自分でも不思議だけど——そんな問い。

べつに聞かなくてもいいやって思ってたんだけどな。こうなったらなんだか気になっちゃうじゃない？

堂本さんはあからさまに嫌そうな顔をしていた。なんでそんなこと聞くんだったって感じの。

「私の魔法、知ってるんですよ。だったら、私に堂本さんの魔法教えてくれてもいいじゃないですか」

「知ってどうすんだ」

「どうって……」

「利用すんのか？」

いつもの嫌味な声とは少し違う。剣を含む、低い声。美佳ちゃんが不安そうな顔で堂本さんを見上げる。

『魔法が嫌いだから』——みすずさんの言葉を思い出す。

触れられたくないのかもしれない。だけど、今さら引きさがるのも癪で。利用するなんて考えてもなかったんだけど、

「……天気がわかるのは便利そうだから使えたらいいかもしれませ

んけど」

首を傾げながら言ってみたら、堂本さんは深々と長い溜息を吐いた。何なの。

「お前みてえなアホなガキにンな頭回るわけねーか」

「もつつ、いいです！」

そうやってすぐ馬鹿にするから、嫌いなもの。優しくない。『先生と違う』を奥の方に押しこめる。

「昔、母親に言われなかったか？ 学校行く前に、『今日は雨が降るから傘を持って行きなさい』って」

「へ？」

堂本さんが急に口を開くから、私は一瞬何を言われたのか理解できなかった。

「天気がわかるのは俺の母だ」

「へー……」

「雨が降る。中入れ」

促された途端に、鼻の頭に雨粒が一つ落ちてくる。

結局、五本あった筈のうち四本を堂本さんが持ってくれて、私は一本だけ抱えて校舎の中に戻った。

やがて、雨が降り始める。堂本さんは忙しいみたいで、雨足が強くなる少し前に帰った。

聞きそびれちゃったな。

天気魔法じゃないとしたら、堂本さんは一体何の魔法使いなのか。

「堂本さんって、何してる人なの？」

教室の窓を打つ雨音を聞きながら、なんだか宿題に集中できなかった私は世間話みたいに聞いてみる。べつに、堂本さんに特別な興味を持ったわけじゃない。

尋ねた相手はもちろんみすずさん。美佳ちゃんは図書室に行くって出て行ったし、直登君は集中力を切らしてどこかに行ってしまったから、今、教室の中は私とみすずさんの二人だけだ。

「社長さんよ」

「えっ！？ そんなに偉い人なの？」

「そうねえ……昔から頭の回転は早いし、勉強もできた子だったし、とっても努力家ね」

なんだか不思議な感じ。私の想像する社長はもっと年をとっていて、落ち着いていて、社員が困ってたら助けしてくれるような人なんじゃないの？

それとも、社長だから偉そうなのかな。あの性格は元からのような気もするけど……。

「いつから知り合いなの？」

「あら、言ってなかったかしら。昔ね、私がつもつと若かったころ、あの子の先生だったのよ」

「先生？」

「そう、担任の先生」

先生。

また、だ。

まだ思い出す。

喉の奥のほうに苦しい。吐き出してしまいたくなる。

「みずずさんは先生だったころ、生徒に告白されたこと、ある……？」

傷をえぐるようだった。みずずさんが驚いたような顔で私のほうを見る。たぶん、私はひどく切羽詰まった顔をしてたんだと思う。

「……あつたわねえ」

遠くを見るような目でみずずさんは言った。昔を懐かしむように。

「どう、思った……？」

怖い。でも、聞いておきたい。聞いておかなきゃ。

「そうね……嬉しかった、かな？」

目元に笑い皺を作ったみずずさんが、少女のようにかわいらしく首を傾げる。

「先生ってね、生徒にとっては、親の次に身近な大人でしょう。だ

から、生徒の前ではきちんとした大人でいたいといけない。だけど、まだ若かった私にはそれが難しくて、しんどかった。そういう時に、頑張ってる先生が好きって言うてくれた子がいて、励まされちゃったのよね」

「返事は！？　なんて返事したのっ？」

「ありがとうつて。先生は、君たち生徒のためにこれから頑張るから」

同じだ。

「やっぱり、ダメなんだ……好き、なのに」

顔を見られたくなくて、机に突っ伏す。小学校の机は低すぎて、丸めた背中が痛かった。

「あきちゃんの先生は、幸せね」

頭の上に、温かい手のひらの感触。

「気持ちに答えられなくても、先生はきつと忘れないわ。本当はいけないことだけど、そういう風に言ってくれた生徒のことはやっぱり特別になっちゃうのね。ずっと、忘れられなくなるの。その生徒が卒業して何年も経っても、自分が結婚して子供ができて、先生を辞めても、ずっとね」

「私、しんどの。先生のこと好きなのに、それだけで幸せだったのに、辛い。諦めたいの……でも、顔を見たらだめで……もう、好きでいたらダメなのに……諦めなくちゃいけないのに……」

早く忘れなきゃ。早く。先生を好きなこと、やめなきゃ。

「ダメじゃないわ。そんな風に否定したら、しんどいでしょう」

「え……？」

「無理に諦めなくてもいいの。大丈夫。ちゃんと、諦めがつくときが来るからね。……たまに諦めきれないときもあるけど、こればかりはどうしようもないのよ」

「ええ……？」

みずずさんは意味深なことを言っただけ、それ以上は何も言わなかった。

でも、そっか。無理に諦めなくてもいいんだ。

ゆっくりと顔を上げる。たぶん、酷い顔をしてるから、乱れた髪を整えるフリをして髪を留めていたピンを外す。長い前髪で顔を隠すようにしたら、いつもの視界が戻ってきて、ちよつと安心する。ああ、そっか。夏休みに入ってからずっと「あきちゃん」だったから。盆踊りのときに先生を見つけられたのも、きつと見えすぎてたからなんだ。

しばらくこれで過ごそうかな、なんて思った時だ。

「やめろよっ!!」

玄関のほうから、悲鳴に近い声がした。直登君だ。

みずずさんが素早く立ち上がる。私も後を追って教室を飛び出してる。

「どうしたの……美佳ちゃん!？」

靴箱の前で呆然としている直登君。その視線の先には、美佳ちゃんがいる。

昇降口に並べて置いていた箒を手を持った美佳ちゃんが。彼女の足下には、不自然に折れ曲がった箒が散らばっていた。

最後の一本も同じように壊そうと、美佳ちゃんは箒を床に打ち下ろす。雨と風の音が酷くて気づかなかったけど、力一杯に叩きつけられた箒は激しく痛々しい音を鳴らしていた。

「美佳ちゃん、やめよう。もう、やめよう」

みずずさんが止めに入って、その手からやさしく箒を取り上げる。美佳ちゃんは普段の様子からは想像できないくらいに息を荒くして、箒を取り上げられた途端に泣き出してしまふ。雨よりも激しく、悲しい泣き声が校舎の中に響く。

「あいつ、いじめられてんだ」

直登君が、誰に言うわけでもなく呟いたのが聞こえたけど、私にはどうすることもできなかった。

お盆が終わってしまえば、夏休みはもうあと少し。

「これ、川で冷やしてきてくれる？」

そう言ってみずさんに託されたのは、大きなスイカ。

川って、あの川だ。

結局あれから、あの場所には行つてない。

——また会いたいな、あきちゃん。

コウ君のことを思い出すと、あの時言われた言葉が勝手に出てきて、うわーっうわーっ！

慣れてないんだよ、こういうの。

変に意識しちゃって、盆踊りの準備や先生のことや台風や美佳ちゃんのこともあってごちゃごちゃしちゃって、行くタイミングを逃したフリをしてた。

ま、行つたつていないかもしれないしね。なんて期待と不安が混じったまま、重たいスイカを持って汗だくになりながらたどり着いた川には、涼しい顔をしたコウ君がいた。

振り返った顔にびくつてする。ドキッじゃないよ。たぶん。近いけど。

「あーやつと来た。久しぶり。会いに来てくれたの？」

「え、ちがつ……スイカ、冷やしにきたの！」

手に持った、破けそうなくらいにパンパンに膨らんだビニール袋を主張したら、コウ君は大笑い。

「マジで？ 川で冷やすの？」

「そうよ。冷蔵庫よりも早いしずっとごくよく冷えるんだから！」

あと、大きすぎて学校の冷蔵庫に入らないっていう理由もあるんだけどね。

「コウ君はまた写真撮りにきたの？」

「そうだよ」

「何撮ってるの？」

「水とか、花とか、でも人を撮るのが一番好きだ」

「こんなところ、人いないじゃない」

話をしながら、サンドルを脱いで川の中に入ると抱えていたスイカをビニール袋ごと浸けておく。持ち手のところを石で押さえて、これでよし。

「うん。だからあきちゃんを待ってた」

「え……!？」

振り返った拍子に、不意打ちのシャッター音。

「もう、なんで撮るの!」

「いいじゃん。かわいいよ。この間の泣き顔も良かったけど」

「消して! 今すぐ消して!」

でもコウ君は、嫌だよって笑うだけ。先生にフラれてからいろんな人の前で泣いちゃったけど、記憶に残るのと写真で残るのは全然違う。

うう、嫌だな。

「それで、先生のことは吹っ切れそう?」

コウ君はいきなり確信を突いてくる。川に足を浸けたまま、コウ君の座る石の隣に腰掛けて、私は首を横に振った。

「無理に諦めようとしたらしんどかったから、やめた」

状況は何も変わってない。これから、先生に思いが届くことはない。だけど、私の心はずっと軽くなってた。諦めなくちゃって思ってた頃よりはずっと。

「そのうち、自然と諦められればいいかなって。それまでは、好きでいてもいいかなって」

それがいつになるのかわからないけど。

隣を見たら、思いのほか近くに、穏やかな目をしたコウ君の顔があつて、少しびっくりする。

「辛い思いをせずに、自然に諦められる方法ならあるよ」

「え?」

急に真剣味を帯びたコウ君の顔がもつと近づいて、

「あきちゃん、俺と付き合わない?」

「……え、ええ!？」

今なんて言ったの？ この人。

「失恋の痛手を忘れるには新しい恋が一番ってね」

「え、ちょ、つちょ……! ま、待って!」

距離の近いコウ君の肩を押し返すように手を突き出して、ストツ
プをかける。

混乱中だから!

落ち着け私。

コウ君はちゃんと待っていてくれる。

「だって、まだ会ったの2回目!」

「そうだけど、あきちゃん可愛いし、好きだよ」
うわーっうわーっ。

そんな、ストレートに言っちゃうの!?

たぶん今の私、顔、真っ赤だ。

「キスしていい?」

コウ君があまりにもさうりと言うもんだから、私は何も答えられ
なかった。キスって、キス?

顔、近い近い近い!

ぶんぶんぶんぶん。全力で首を横に振ってしまったら、急にコウ
君が噴き出すように笑いだして、

「あはは、ごめん。冗談だよ」

あっさりと白状した。

なんてこと……。

「か、からかわないで!」

これは怒ってもいいよね。乙女心を弄びやがって!

「本気だったら良かった?」

コウ君は、心の奥をのぞき込むような問いを投げってくる。そんな
ものへの対処方法を私は知らない。

「ごめん。そんな顔しないでよ。あきちゃんのこと可愛いと思った
のは本当だから。正式にお願いしてもいいかな。被写体になってく

れる？」

「へ？」

これまた突然の申し出にびっくりする。正式って、そっちね。

「高校最後の写真展に出す作品なんだ。でもなかなか撮りたいと思うものがなくて、困ってた。やっと見つけたんだ。どうしても、あきちゃんを撮りたい」

不意に立ち上がったコウ君が勢いよく頭を下げた。

本気、なんだ。

「一度だけでいい。もう一度、会って写真を撮らせてくれたら、もう何もしない。……好きになってたら、分らないけど」

う……。

そんなこと言われたら、協力してもいいって言いにくいじゃない。だって、まるで期待してるみたいで。

まだ、心臓がどきどきゆつてる。これは恋じゃない。びっくりしてるだけだ。

告白されるのなんて、初めてだったんだから。

「お願いします」

顔を上げたコウ君が、最後のため押しみたいに真剣な目を向けてくる。

私、こういう目には弱いんだよ。

「一回、だけだったら」

「本当に？　ありがとう！　絶対可愛くする。約束する。あと、制服を着てきてくれる？」

「えっ！？」

何それ聞いてない。

「高校最後だから、そういうコンセプトなんだ。あきちゃんも高校生だろう？」

「そ、そうだけど……」

「どこ高校？」

「月高……」

「あそこセーラー服じゃん。ラッキー！」

すっごい嬉しそうなコウ君を見てたら今さら無理だなんて言えなくて、結局押し切られる形で被写体になる約束をした。

三日後の同じ時間に、またここで、と。

どうしよう。

セーラー服を着ないといけない。

でも、着ないって決めたんだ。みずさんと。ここにいる間は。

「アキちゃんのセーラー服、見たいな」

コウ君は言ってくれた。

私だって、セーラー服を着たいし、そんな風に言われたらちよつとだけ見せたくなるじゃない。

そんなことをぐるぐる考えてながら帰っていたら、一つ重大な忘れ物をしたことに校舎に戻ってから気づいた。

「あれーあきちゃんスイカはー？」

待ちくたびれた様子の直登君が真っ先に声を上げて、

「あ！……置いてきちゃった」

スイカはまだ川の中。取りに戻ったスイカはよく冷えていて、とっても美味しかったけどね。

君がいない夏(6)

俺の夏休み前半は結局、ほぼバイトで消えた。

これでいいのか、新沼吏一。いやよくねえだろ。

幸いにも、もうすぐ八月が終わる。高校生の夏休みが、終わる。

つまり何が言いたいかってーと、あきちゃんが帰ってくる。

この味気ない生活にもようやくうるおいが戻ってくるわけだ。自慢にもならないが、ここ数週間の俺の規則正しい生活っぷりはどこかのジイさん並みだ。

飲み会もない。夜出歩くこともない。デートの約束もない。バイト先と家とを車で往復するだけの毎日。変化といえばたまにコンビニに寄ってマンガを立ち読みするくらいで。

さすがに身体がなまってきたので朝の涼しい時間帯のランニングを日課にした。まったく、健全すぎて嫌になる。

これだけ健康生活を続けると、溜まるもんも溜まなくなるもんだ。

もともと筋トレなんかは毎日やってるけど、くたくたになるまで身体をいじめてやれば頭で余計なこと考えずに済む。

いつものコース。いつものスピード。いつもより少しだけ気温の低い朝。秋が近づいている、と言うにはまだ残暑の存在感が強すぎる。

そついう日だった。あいつに出会ったのは。

見慣れた道に、見慣れない看板。

どこにでもある住宅街の中で、その店構えはよく目立った。両脇に並ぶのが旧家だったからかもしれない。鮮やかな緑の吊り看板に金の横文字は、この古い田舎町では浮いてしまう。

なんでこんなところに？

思わず、店の前で足を止めた。

白壁に、これまたシャレた木のドアには「本日オープン」の張り

紙がある。

それにしても……毎日走ってたのに、気づかなかった。
不思議だ。

しかしこの町の中では、こういう不思議なことがわりとよくある。
深く考えないほうがいい。

でも、なんか、気になるんだよな。

そうだ。

もともとここには何があつた？

子供の頃、遊び場に使っていた空き地だつたはず。

唐突に思い出した。

そうだ。おばけの木が――。

ぼーっとして見ていた木の扉が急に開いて、身構える。出てきた
男と目が合ってしまったて、妙に気まずい。こんな早朝に、何事かと
相手も思つたのだろう。

沈黙が落ちる。一拍置いた後、男はともすれば人相の悪くなりそ
うな細い目をさらに細くして、思いのほか人好きのする笑みを浮か
べた。

「いらつしやいませ？」

「いやっ俺は……」

「ああ、大丈夫。さすがにこんな早くから店を開ける気はないから」
とつさに上手い言葉が出てこなかった俺に、男は気安い調子で話
を合わせてくる。

歳は俺よりも十近く上だろうか。だけど、くだけた口調は若さを
感じさせる。柄の入ったシャツに細身のジーンズというラフな格好
も、その辺のサラリーマンと比べれば、男の容姿をある程度、若く
見せているんじゃないかと思つた。

「ここ、でかい木がありませんでした？」

男のフランクな態度につられるように、気になっていたことを尋
ねてみる。

「ああ、柿の木？ あれなら庭に残してあるよ。見るかい？」

「え、いやそこまでは別に、いいです」

「べつにかまやしないさ。君は、あの木の秘密を知ってるのか？」

まるで既知の友人を誘うみたいに、男は自然に中へと招き入れる。店の中には、ずらっとありとあらゆる形状の椅子が、ところ狭しと並べられていた。家具屋なのかと思っただ、違う。ここにあるのは椅子だけだ。タワーみたいに積み上げられたやつもあれば、天井からぶらさがってるものもあった。

「……知ってるっつーか、あれですよ。夏なのに実ができる」

店内を見回しながら、問いに答える。

秘密というほどのものだろうか。確かに、不思議ではあるが。

本来なら秋に生るはずの柿が、まだ日差しの暑い夏のうちに、おいしそうな濃いオレンジに色づくのだから。

子供の頃からそれを見てきた俺は、柿が夏の果物だずっと思い込んでいた。いつだったかリュウさんにバカにされた覚えがある。

「そう。もう、生ってる」

店の奥側は、明るい日差しが入り込む一面のガラス窓。その向こう側に、老獪な枝ぶりの柿の木が見えた。確かに、実はすでに鮮やかに色づいている。

男は窓を開けて庭に出る。どこからか脚立を出してきて足場にすると、高いところに生っていた柿を一つもぎ取って戻ってきた。

「よかったらどうぞ」

「あ、どうも」

小振りの柿を受け取る。走って熱くなった自分の手のひらの中で、それはひやりと冷たい。

「まだ少し堅いけど、皮が薄いからそのままでもいけるよ」

じいっと柿を見つめていた俺に、男がすすめる。喉も乾いてるし、それじゃあ有り難く。

「いただきます」

その場でかぶりついて、

「……う」

口の中に入れた瞬間、広がる渋味。思わず地面に吐き出したが、舌に残る嫌な感じは消えない。

渋柿じゃねえか！

口の中の不快感と戦う俺の目の前で、さっきまで営業スマイルを浮かべていた男は一転して悪魔の笑みを見せて、

「渋柿だつてことは知らなかったのかい？」

コノヤロウ、白々と！

「知ってたら食わねえだろ！」

「そりやそうか。ま、待つてな。お詫びに冷たいお茶でも入れてくるから」

親切なのか何なのか、男は一度店に入って右手に引っ込むと、やがて盆にグラスを乗せて戻ってくる。

間仕切りの一角に手招きされて行くと、小上がりの小さな畳間があった。突然に和の雰囲気醸し出すテーブルと座布団に、違和感を覚える。変な店。

ここは椅子じゃねえのか。

テーブルに麦茶の入ったグラスを置いた男は、どうぞ、と愛想の良く笑う。まさか渋いお茶じゃねえだろうな。

靴を脱ぐのが面倒だったので、端っこに腰掛けてグラスに手を伸ばす。早くこの渋味をなんとかしたくて、冷たい麦茶を一気に半分ほど喉に流し込んだ。良かった、普通の麦茶だ。

「あーくそ。ひでえ目に合った」

「悪かったな。あの木を知ってる人に会えたのが嬉しくて、つい」

「ついって、なあ！」

つい、で人に渋柿を食わすのか。

「まさか本当に食べるとは思わなかった」

肩をすくめて言われると、食べた俺の方がバカだったみたいじゃねえか。確かに、思い出してみればガキのころにも一回食べてみて同じ経験をした覚えがあるので学習をしてない点ではバカかもしれない。

「この辺に住んでるのかい？」

「ああ、すぐ近く……そっちは？ わざわざこんなところに店構えるために引越してきたんだ？」

酷い仕打ちを受けた分、口調も遠慮のないものになる。

「静かでいいところじゃないか。俺は出戻りなんだ。昔、この町に住んでた」

「へえ、この辺……？ じゃねえな。近所だったら知ってるだろうし」

「うん、前住んでたのはもつと山手。名前は？ 俺は多聞^{たもん}だ。青柳^{あおや}多聞^{たもん}」

「た、もん？」

「そつ、多くを聞くと書いて、多聞。よろしく」

「珍しい名前だな。俺は新沼吏一」

それほど変わった名前なら、子供の頃に一度でも聞いたことがあれば覚えていそうなものだ。……いや、正直あの当時の自分の記憶力ほど当てにならないものはないけれど。

「新沼……」

その名前に聞き覚えがあるのか、多聞が何かを思い出すように視線を遠くに向ける。糸のように細い目が途端に鋭さを増す。

しかししばらくすると何事もなかったかのように再び弓なりに微笑んだ目を向けて、

「また、いつでも遊びに来なよ。帰ってきたばかりで知り合いなくて暇なんだ」

気安く誘う。

「おう。渋柿はもういらねえけどな。ごちそうさま」

空になったグラスをテーブルに返そうとして、ふと、そこに敷いてあったコースターに気づく。

店にありそうな紙製のコースターだ。つか、すげえ見覚えがあると思ったら、これって……。

「うちの店で使ってるやつと同じだ」

青空に浮かぶ雲のイラスト。オレンジのアルファベット。描かれている文面は――

「Are you a wizard？」

流暢すぎて、なんて言っただのかすぐには聞き取れなかった。

俺の視線の先を追って、多聞がコースターに書かれた英文を読んだんだ。

「カフェでもらったんだ」

たぶん、そのカフェは俺のバイト先の店のことではない。

今や月並町のあっちこっちの店がこのコースターを使っているらしい。川岸が言うには。

「町おこしだよ」

俺はそんなもんには興味がなかったから深くは聞かなかったけど、それにしても、この文面はなんだ？

メッセージに意味はないのかもしれない。

だとしても、なんだか気持ち悪い偶然だった。

俺の夏の物語はこれで終わりだ。

バイト、元カノとの再会、変な椅子屋との出会い。なんだこの面白くない夏は。

のん気なもんだと呆れるだろう。あきちゃんに近づく男の存在も、魔法使いに迫る危険も、全く知らずに。

ああそうさ。また蚊帳の外だよ。

だけど思い返せば俺は、この時もずっと味わっておくべきだったんだ。蚊帳の外にいられる幸せってやつを。

君がいない夏（7）

英語は終わった。現国も。化学と数学はもう少し。あとは日本史が残ってる。だってプリント広げるたびに先生のこと思い出すんだもん。

夏休みもう終盤。宿題の追い込みに入らないといけないのに。成績は悪くないよ。特別良いわけでもないけど、授業とテスト前の勉強をちゃんとやってるから、大丈夫。セーラー服を着て勉強すると集中力もアップするしね。

夏休み中はそれができなかったのはちょっと辛かったけど、だからって宿題ができないほどじゃない。

隣の直登君もやっぱり同じように、夏休み帳の最後の数ページに挑んでいる。

そういえば、美佳ちゃんは……？

みずずさんもない。

あの台風の日の後、美佳ちゃんはずっと喋らない。もともと口数の多い子ではないけど。

チャイムの音が鳴る。

宿題の時間は終わり。

直登君が待ってましたとばかりに教室を飛び出して行く。このあとは、直登君がテレビゲームをしてもいい時間だ。

私は、いつもなら本を読んだり直登君と一緒にゲームしたりするんだけど、今日は約束の日だから。

久しぶりのセーラー服。襟を整えて、スカーフを緩めに結ぶ。背筋が伸びて気持ちがいっきとする。夏ばて気味でだった体が嘘みたいに軽くなる。

鏡の前でくると一回転。スカートがひらりと舞って、気分も上がった。

「よし！」

みずずさんたちに見つからないように、そつと校舎から出る。大丈夫かな。見つかってないかな。

校舎をちよつとだけ振り返ったら、二階の廊下の窓のところに、小さな人影が見えた。あれ、美佳ちゃん――？

なんであんなところに。

あ、こつちに気づかれた。

みずずさんに言っちゃうかな。お願い、黙つてて。人差し指を口元に立てて内緒の合図。

美佳ちゃんがどう受け取ったかはわからないけど、私はくるりと背を向けて裏手の森に入っていく。

セーラー服の足取りはとっても軽い。スカートを木に引っかけないようにそれだけ注意して、私は小走りに川を目指す。心臓がドキドキしてる。悔しいけど、認めたくないけど、すごく、ドキドキしてる。

そつか。私、コウ君に会うのが楽しみなんだ。コウ君は、『あきちゃん』として私ができる、数少ない同じ年頃の男の子。魔法使いだってことも、学校も抜きにして、話ができる男の子。今までにはいなかった。だからきつと、気になっちゃうんだ。

約束の川辺まであともう少し。つてところで、

「おい、んな格好で何してんだ！」

呼び止める大きな声。

びつくりして足を止めた。

「堂本さん……」

「どこ行く気だ？」

怖い顔して、大股に歩いて距離を詰めてくる。

「……あなたには関係ないです」

「話聞いてたんじゃないのか？ 勝手なコトされるとこつちも困るんだよ」

話つて、堂本さんとみずずさんが話してたこと？
魔法を使わない方がいいって。

「でもっ」

どうして使っちゃいけないのかを聞いたわけじゃない。だから、そんなに怒るほどダメなことだとは思わなかった。

「でもじゃねえ！ 帰るぞ。早くソレ脱げ」

「えっ！？ うわっ 離し……！」

堂本さんが強引に私の腕を引っ張る。強い。セーラー服を着てるのに、振りほどけない。

「離してって！」

「ウルセーな……」

私は踏ん張って耐えてみるけど、堂本さんのほうが力は上だった。なんなのこの人！ おじさんのくせに！

ダメだ。引きずられる。

その時、パチリと乾いた音がした。

シャッター音？

「誰だ！？」

私の斜め後ろで草葉が音を立てる。逃げる足音。その方角に、堂本さんが怒鳴った。捕まれていた腕の力が緩む。その隙に、私は走った。

あの方角には、川がある。コウ君との約束の場所が。

嫌な感じが。

立ち並ぶ木をぬって、逃げる黒いスーツの後ろ姿を捉える。

「おい！ 深追いすんな！」

後ろから堂本さんの声がした。

大丈夫。追いつける。

だって、セーラー服を着てるんだもの。

あと数メートル。逃げる男の上着を掴まえる。男はあっさりと袖を引き抜いて、夏に着るには暑そうな黒スーツの重たい上着を捨てた。

「わっ！？」

捉えたと思って失速した私は、またわずかに引き離される。

それなら――

再び追いついて、今度は間髪入れずに足を振り上げた。直前で気づいたスーツの男が振り返る。顔を拝んでやろうと、キックを繰り出しながら注視する。だけど私の目に映ったのは、

「えっ？」

狐！？ の、お面？

男の顔に張り付いた、糸のように目の細い狐の面。盆踊りでよく使ってるやつだ。

お面に気を取られたせいで、私の蹴りは男の下顎辺りをかろうじて掠めただけで、空を切った。

着地で体勢を崩す。ああもう！ すぐに立ち上がろうとしたところで、男の手元で何かが光った。反射的に目を閉じる。男が手に持っていたインスタントカメラのフラッシュだと気づいた頃にはもう、男との距離は大分空いていて。

このまま道路に出られたら――車を用意されてたら。

「大丈夫か？」

「平気です！」

追いついてきた堂本さんと言葉を交わす。その時だ。

すぐにまた走りだそうとした私の横を、一瞬だけ、ものすごく強い風が通り抜けた。

風、じゃない。

「ええっ！？」

箒？ と、

「……美佳ちゃん？」

空飛ぶ箒と、それにまたがる少女はあっという間に男に追いついて、男の手からカメラを奪い取る。きつと、男も油断していたんだ。美佳ちゃんがその隙を上手く突いた。

にしても、箒で空を飛ぶなんて――

「すごい……魔法使い、みたい……」

「みたい、じゃねえだろ。つたく、美佳までホイホイ魔法使いやが

って」

堂本さんは、本当に怒ってるみたいだった。口調はいつもどおりだけど、怖い顔。

「あぶねーだろ！」

すぐにUターンして戻ってきた美佳ちゃんを、堂本さんは一喝する。そんな怒鳴らなくても……ほら、美佳ちゃんも泣きそうになってる。

でも、すぐに頭にぼんって手を乗せて、

「ありがとうな。でも無茶すんな」

びつくりするくらい優しい顔で笑う。

「待ってる、様子見てくる」

「私も行く！」

「ダメだ。ガキはすっこんでろ」

主張してみたけど、あつさり却下。堂本さんは私と美佳ちゃんを残して男を追った。この先は急斜面の下りになっていて、車の通れるアスファルトの道路まで道が続いている。

というか、あの狐面の男はどうして私たちの写真なんか――。

魔法使いだから？ でも、私の写真なんか撮ったってどうしようもないはずだ。私はただの高校生。大体、あの場所からだったら私なんて後ろ姿しか写ってない。

あれ？

じゃあ、何を撮りたかったんだろう。

答えにたどり着いて、背中がぞくつとした。

写されたのは、たぶん、私じゃない。

「……堂本さんだ。美佳ちゃん、一人で校舎に戻る？ みすずさんにさっきのこと話してくれる？」

「あき、ちゃんは……？」

美佳ちゃんが初めて私の名前を呼んでくれた。

「私は堂本さんを助けに行く」

美佳ちゃんは堂本さんのことが好きだから、それを聞いて素直に

頷いた。

よし、全力ダッシュだ。

この森は小さい頃からずっと私の遊び場なんだから。お姉ちゃんと一緒に日が暮れるまで隠れん坊したり、川でスイカを冷やしたり、カブトムシを捕まえたり。迷子にだって何回もなってる。だから、よく知ってるんだよ。

道路まで出る山道は一本じゃない。獣道をショートカットすれば、ほら、すぐにアスファルトが見える。

道路に立っている堂本さんの姿を確認する。見失っちゃったのかな。

緩やかに下る道の先には急なカーブがある。カーブミラーには、男の姿はなかった。

あっさり逃げてくれたなら、そんなに心配する必要もなかったのかなって、思った時だった。

山の道にはカーブがたくさんあって、それは上り方向も同じだったんだ。男は、たぶんその曲がった先に車を止めていたんだと思う。急にカーブから飛び出してきた車は一直線に坂道を下る——堂本さんのほうに。

セーラー服を着た私の体が、勝手に動く。

山の斜面を利用して、飛ぶ。

宙を駆けるようにして、堂本さんの体に思いつき体当たり。

道路から押しだされるようにしてガードレールのところにぶつかった堂本さんが、私を見て口を開く。「危ない」と言ったのかもしれない。だって、私がいる場所は、ちょうどさっきまで堂本さんが立っていた場所で。

エンジン音が近づく。フロントガラスの向こう側、運転席にはつきりと狐の面が見えた。

それを確認してから、もう一度、飛ぶ。

あ、失敗——！

宙に浮いた私の体の下を、猛スピードで車が通過する。

あと一步遅れてたら、完全にひかれてた。

妙に冷静に考える余裕があったのは、落下までにやたらと時間がかかったからなの。……あのね、飛びすぎちゃった。

しかも、落下点まで間違えた。大きな木の枝に着地した私は、ついでにその高い場所から車の行方を追ってみたけど、無駄だった。カーブを過ぎたらすぐに見えなくなっちゃって。どっちにしても山は一本道だから、車の行き先が月並町だってことは変わらないんだけど。

「おい」

木の上にいる私を堂本さんが呼ぶ。相変わらずぶっきらぼうな口調で、

「トランクス見えてンぞ」

「きゃあああ！」

ああもう！ この人つてはどうしてこうなの！

ていうか、見られた。知られた！ 最悪だ。泣きそう。

でも、堂本さんはそんなにびっくりしてないみたい。

もしかして、知ってた？

ああ、そうか。私の魔法を知ってるんだから、みすずさんが一緒に話をしててもおかしくはない。

地面に飛び降りた私は、堂本さんとどんな顔をして話せばいいのかわからない。

「助けられたな。ありがとう」

堂本さんでも、お礼、言うんだ。いつも偉そうなことから嫌みとかばっかり言うから、意外だった。

「どういたしまして」

つい、その顔をまじまじと見てしまう。

「あの、さっきのは……」

「俺の周りを嗅ぎ回ってる連中だろ。巻き込んで悪かったな」

「じゃあ、魔法使いは関係ないの？」

「さあな。心当たりが多すぎて、そっち絡みなのか会社絡みなのか

家絡みなのかわかんねえ」

「何それ」

呆れた。もしかしたら、死んでたかもしれないのに、けろっとした顔で言うんだもん。

「堂本さん、私がいなかったら死んでたんだよ！」

「あん？ 今さら恩売ろうってンのか？」

「そうじゃない、けど……」

そういう言い方をされると腹が立つじゃない。私の言葉をどう受け取ったのか知らないけど、堂本さんは、じゃあ、と一つ提案する。「借り作ったままじゃ気持ちワリーから、イイこと教えといてやるよ」

「いいこと？」

尋ね返した私に、堂本さんはニヤリと笑った。

「もしお前に何かあつて、どうしても困った時は、『公衆電話』を探せ」

「へ？」

きょとんとしてしまう。

だって、携帯電話があるんだよ。今の時代、公衆電話なんて誰も使わない。っていうかよく考えたら私、一度も使ったことがないかも。

堂本さんはそれ以上の説明をしてくれなかった。その視線は、私を飛び越えて道の向こう側に向けられている。振り返って見てみたら、校舎の方角から小走りにやってくるみすずさんがいた。

すっごく心配そうな顔で、息を切らして。

もう一度、堂本さんの顔を見た。皺の刻まれた目元が酷く悲しげで、愛おしげで、みすずさんを見ているその表情に、ぐっと胸がつかえる。

知ってるよ、こういう顔。

私、わかつちゃった。だって、隠しもしないんだもん。この人、無意識なのかな。だとしたら、私も周りにバレてるのかもしれない。

先生を見ている時の顔が、こんな表情だったら。

つまりね、この人は、私と一緒になんだ。

「みずずさんのこと、昔から好きなんですか？」

走ってくるみずずさんへと視線を向けて、尋ねてみた。みずずさんがここに辿り着くまでにはまだ少し、距離がある。

「諦めようって思ったこと、ないんですか？」

反応を待たずに重ねて問う。

「学生のころ、ほかの人を好きになったことは？」

ゆっくりと堂本さんを見上げる。思いのほか、疲れている大人の男の人の顔があつて、哀れに思った。

「ある」

小さく、乾いた唇が動く。感情を伴わない声だった。

「そう、ですか」

それでどうなったかは聞かなかった。どうにかなってたら、きっと今、堂本さんはここにはいない。

私は、どうなるのかな。

ほかの誰かを好きになるのかな。

誰か……。ふつと浮かんだ顔を慌てて打ち消す。

コウ君はそんなじゃない。写真を撮らせてあげるだけ。

そう、私はまだ先生の事が好きで、どうしようもなく好きで、今はそれでいい。みずずさんが教えてくれたから。

夏休み明けの教室で先生の顔を見るのは辛いかもしれないけど、三島先生を見て苦しい思いをするかもしれないけど、それでも好きなんだから。それくらい好きな人なんだから、しょうがないよ。

今はゆっくり向き合っていこう。例えば、次の恋が始まるまでは、焦らず、ゆっくり。

だけど恋に障害は付きものみたいで、私はコウ君に会うことができないかった。

事件の後、すぐに川辺に行ってみたけど、コウ君の姿はなかったんだ。しばらく待ってみてもダメで、次の日も、その次の日も、夏休みの最後の日になっても、コウ君は来てくれなかった。

何かあったのになって心配して、もしかしたら冗談だったのかなって傷ついて、でも、ほっとしてる私もどこかにいて。

こんな時、おジイならどうするんだろう。わからないことがあると、私はいつもおジイに聞くの。おジイは皺だらけの手は軽快にキーボードを叩いて、あっと言う間に答えを見つけ出しちゃうんだよ。もちろん、おジイ自身が教えてくれることもたくさんある。

答えをくれないこともあるんだけどね。そんな時は代わりに、答えを導き出す方法やヒントを教えてくれる。

だから、早く。早く、おジイに会いに行かなくちゃ。何から話そうかな。

先生のこと、コウ君のこと、堂本さんのこと、みすずさんのこと、美佳ちゃんのこと、直登君のこと、魔法使いのこと。

私は走って喫茶またたびに向かう。駆け抜ける商店街は、夏休みの最終日だからかな。いつもより人が多いみたい。

それに、開いている店が多い？

夕方にはいつもシャッター街みたいになってるのに。あれ？ あんなところにカフェなんてあったっけ？

新しくできたのかな。

こっちも、今までなかったよね、クレープ店なんて。コンビニの隣にも新しいうどん屋さん。

何か変だ。

町が、変わってる。

私がない夏の間、知らない町みたい。

足取りを急がせる。

ああもう！ だからセーラー服ならもっと早く走れるのに。しょうがないんだ。

念のため、あの後もあるべく魔法を使わないことに決めたから。

特に危ないことはなかったんだけどね。

現像に出したインスタントカメラに写っていたのは、私と堂本さん、それから、不意打ちのフラッシュをたかれた時の私のびっくりした顔。

ほかには何も写ってなかったらしい。っていうのは、後から堂本さんから聞いた話だ。

喫茶またたびの赤い屋根が見えて、私はやっと、帰ってきた気分になる。

もちろん、本当の家には先に帰って荷物だけ置いてきてるよ。お母さんにしか会ってないけど。

お姉ちゃんはお盆を過ぎてしばらくしたら一人暮らしの部屋に帰ったみたい。顔を合わさずに済んで良かった。

いつもどおりの喫茶店の古びたドアを開ける。いつもどおりのマスターが私を迎えてくれる。コーヒーの香りと一緒に。

いつもの定位置——デスクトップパソコンのある席に、いつもどおりのおジイの姿——を探す。

いつもの場所には、空っぽのイスと、電源の入ってないパソコンが置いてあるだけ。

「マスター……おジイは!？」

走ってきたせいで息が切れてる。呼吸を整えるよりも先に尋ねる私に、マスターはちよつと困ったような顔をして、首を横に振った。

おジイがいない。

この夏はいろんなことがあったけど、私にとってはこれが一番の
大事件。

夏休み最後の日。

おジイが、私たちの前から姿を消した。

君がいない夏(7) (後書き)

君がいない夏シリーズはここで終わり。

え、ここで？という感じですが終わりです。

こんな終わり方なので次の話はなるべく早くに入りたいな、
と思いつつ、秋に追いつかれないように頑張ります。

魔法使いなんていない（1）（前書き）

夏休みが終わるころ、ジイさんが消えた。再会した俺とあきちゃん
のまわりで起こる事件。そして次に狙われるのは？ シリーズ第三
弾。夏の続きがいま、始まる！

魔法使いなんていない(1)

今、俺の目の前にはあきちゃんがいる。

使っていない古いコンポとこの春に買ったばかりのノートパソコンがなかよく同居する机のとなりに、あきちゃんがいる。脱ぎ散らかした服に占領されたベッドを背にして。あきちゃんが床に転がった骨董品みたいなバイクのヘルメットをけげんそうに見るから、車を買ってからバイクには乗らなくなったんだと、俺は聞かれてもいないのに説明する。

セーラー服からのぞく細い足を体育座りでかかえて、あきちゃんはすこし泣きそうな顔をしていた。たぶん、本当に聞きたいのはそんなことじゃないんだろう。

「吏一君……」

心細そうに、あきちゃんが俺の名前を呼んだ。今すぐ抱きしめたくなる衝動を、右手をにぎってやりすこす。

「大丈夫だよ」

俺はあきちゃんの不安の正体などさっぱりわかっていないくせに、無責任な言葉をかけた。

「ほんとうに？」

うるんだ目で見あげられたら——やべ、かわいい。にぎりしめた手につめが食いこむ。どうしろってんだ。直視してられなくて視線をわずかにずらしたら、ベッドの上に投げっぱなしの工口本を見つけた。

どうか、あきちゃんがうしろを振り向きませんように。

「吏一君は私を、受けいれてくれる……？」

急に立ちあがったあきちゃんは、向かいに座っていた俺を見おろす格好になる。すらりと伸びた生足のなめらかなひざ小僧を目の前にして、俺は目のやり場に困ったりしたわけだが、そんなことより、急にどうしたの？ とたずねるよりも先に、あきちゃんは胸のまえ

で交差させた両手をセーラー服の白いすそにかけ、ゆっくりと持ち上げていく。脂肪のすくない白いお腹が見えて、ごくりとつばを飲みこんだ。

そんなことしたらダメだ、あきちゃん。一体どうしたんだよ!? 止めないと、と理性は叫んでいるのに、俺の頭は、いかにしてエロ本に気づかれずにベッドにうまく押し倒すかってことばかりを考えていた——ところで目が覚めた。

天井に貼ったKREVAのポスターが、まるでファンタジーだと笑っていた。

ですよね。ハハ。かわいた笑いがむなしく響く。

つか、どうせ夢ならさっさと押し倒せよ!

汗だくのシャツを脱いで、ベッドの足もとに転がるエロ本に向かって投げつける。部屋の温度は三十度を軽くこえていた。残暑だ。照りつける日差しはまだ強い。九月に入ったからといって、今日から秋ですとはいかないのだ。俺が未だあきちゃんに会えないままずるずるとバイトの日々を続けているのと同じように。

さすがにもうセミのうるさい声で起こされることはなくなったものの、だからといってあんな夢を見たあとの寝覚めがいいわけがない。だるい体にムチをうつて午後からのバイトに出掛ける準備をしながら、パソコンメールをチェックする。受信メールは一件だけ。差出人は「魔法使いのジイさん」。内容にざっと目を通して、了解、とだけ返事をして部屋を出る。

たっぷりと日差しをあびて熱くなった車のなかをエアコンで冷やすあいだ、フロントガラスに降参ポーズで転がったセミをそっと木の根元に移しておいた。ぴくりとも動かない。妙に感傷的なきぶんになっているのは、夏の終わりのせいだ。大学の夏休みはあとひと月残ってはいたが。

冷房をガンガンに効かせた車で、近所の椅子屋のまえを通りすぎようとしたときだ。しゃれた店の前に店主の姿を見つけ、あいさつ代わりのクラクション二つ。こちらに気づいたきつねのような面が

振り返り、愛想よく片手をあげる。こちらに手のひらを突き出した椅子屋の唇が「ちよつと待って」と動いた気がして、ゆるやかにブレーキを踏んだ。

一度店のなかへと引つこんで戻ってきた多聞は、手に持ったものでこつんと運転席の窓ガラスをたたく。開けた窓からぬるい風とともに多聞の声が聞こえた。

「これ前に話してたCD」

「ああ、サンキュ」

前に俺が貸してくれと頼んでいたものだ。この男に関しては初対面の印象こそ最悪だったが、音楽の趣味は不思議とよく合った。店の奥の一部屋がレコードやCDのコレクションでいっぱいになっていることを知ってから、こうやって発掘されたCDを貸してもらう間柄だ。大学を中退してしばらくヨーロッパを転々としていたらしい椅子屋は洋楽には特に強い。英語が話せるならTOEICの試験を代わりに受けてくれつつたら断られたけど。

「今からバイト？ 働くね。大学生はまだ夏休みなんだっけ？」

「そう、九月まで。そっちは暇そうだな」

「大学生よりはね」

椅子屋は涼しい顔をして、いやみをさらりとかわした。実際のところ本当に暇なのだろう。この椅子屋に客が入っているところを俺は一度も見ることがない。そりゃそうだ。こんな住宅地の真ん中で、いったい誰がわざわざ訪ねてくるんだ？ これで経営が成り立つのかと聞いてみたら、販売はもっぱらWEBショップ経由らしい。たぶんそれだけじゃないんだろうけど。

多聞に別れを告げ、俺はバイト先の「ムーン&リバー」へと向かう。九月に入ったばかりの最初の土曜日というのは、世間的にはまだ夏休みの延長線上らしい。若い奥さまの集団や派手なギャルのグループ、暑くるしいカップルの注文を聞きながら、魔のスイータイムはあつという間にすぎた。こういう忙しい日にかぎって店長である川岸が休みをとっているのはいやがらせだろうか。

ようやく、涼しげなノースリーブの女性客で目の保養をする程度の余裕ができたころには、夕方の休けい時間になっていた。

「新沼さん、お客さんからご指名ですよ。中学生かなー。将来有望って感じ。初めて見る子ですけど、またアレっすかね。」

奥に引っ込んで早い夕飯を食べていた俺を、もう一人のバイトが手招きする。言われてもすぐにはぴんとこない。モテモテですね、とからかうバイトの後輩を適当にあしらいながら食べかけのカレーを置いてフロアに出る。カウンターの隅に、一人で心細げに座っている女の子がいた。

俺はまた、夢か幻でも見てるんじゃないかと思ったんだ。だって将来有望どころか、

「吏一君……」

なんでそんな不安そうな目で見るんだよ。これじゃまるで夢と一緒じゃないか。困ったことに俺は、夢であんなことをしてしまった罪悪感で彼女を直視することができない。幸いにも場所と、彼女の着ている服はちがったけど。

「久しぶり、あきちゃん。セーラー服じゃなかったから、ちょっとビックリした」

「あ、うん。休日だから」

そうだよな。なんでそんな当たり前のことしか聞けないんだろうな。たぶん、あまりにも久しぶりすぎて舞いあがってるんだ俺は。落ち着け。

「どうしてあきちゃんがここに？」

「吏一君に会いにきたの」

ちよつと待ってくれ。俺はまだ夢でも見てるんだろうか。あまりにも都合が良すぎないだろうか。一度落ち着かせたはずの心臓をいとも簡単に乱してくれる今日のあきちゃんの攻撃力はハンパではない。

「『またたび』で待っても会えないから、マスターにここの場所聞いたの。お仕事かなのにごめんなさい。どうしても吏一君と話が

したくて」

あきちゃんは、俺の返事がないのを気にしたのだろう。申し訳なさそうに説明を加える。

「いや、大丈夫。忙しい時間は過ぎたから。俺も、あきちゃんに会いたかったから九月になったら『またたび』にも顔だそうと思ってただけど、毎日バイト入ってて。八月中は、あきちゃん来ないって俺もマスターから聞いてたし」

「そうなんだ。会いにきてくれてたんだね。ごめん。夏休み中は小生のお世話の手伝いをしてて……」

なんだか回りくどい会話だ。会えなかった一カ月の間を必死に探って、埋めるような。少なくとも俺はそんな気分で。その上、あきちゃんも俺のことを気にしてくれていた。うれしい。つか、かなりいい感じなんじゃねえの？ このままの勢いでデートに誘えば、と切り出すタイミングを計っていた俺に、あきちゃんは意を決したように顔を上げて、

「あのね、吏一君。おジイがいなくなっちゃった、の……」

ひどく悲しげに言ったのだ。うるんだ目で俺を見上げて。不安でたまらないって感じで。こまかいドット柄のシャツに包まれた華奢な肩を震わせて。抱きしめたい衝動を俺は現実でもこらえなければいけない羽目になった。なのに、なんでそこでジイさんが出てくるんだ！

ため息をつきたくなるのをこらえてから、

「ジイさんなら今朝ちょうどメールがきたよ」

「えっ本当！？ でも、またたびには一週間以上きてないんだよ。家に行っても留守だし」

くもっていたあきちゃんの表情がすこしだけ明るくなったのも束の間、ふたたび声が深く沈む。

「家にもいないのは、変かもな」

あきちゃんはこくりと静かに頷く。

ジイさんはパソコンを扱う魔法使いだ。それも、デスクトップ専

用の。ノートパソコンもタブレット端末もスマートフォンもダメなんだと。もし、ジイさんが本当に家にずっといないのだとしたら、俺に送ってきたメールは一体どこから？ それこそ喫茶またたび以外に、俺はジイさんの出没場所を知らない。

「家族はなにも言っただけだったの？」

俺が思いつくのはこの程度。しかしあきちゃんはずぐに首を横にふって

「おジイは一人暮らしなんだよ」

「あの歳で？」

確かに九十にしては元気なジイさんだけど、驚いた。ジイさんの家は聞くところによると町内では有名な旧家だ。てつきり、孫にかまれて気ままな隠居生活を送ってるものだと思っていた。

念のため、スマートフォンでスカイプを確認する。ジイさんはオンラインだった。

「ねえ、おジイからのメールは？ どんな内容だったの？」

あきちゃんはカウンターから身を乗り出すようにして尋ねてくる。

「ああ、ただの依頼メールだよ。ときどき、ジイさんからの頼みごとを引き受けてんの」

あきちゃんの件で呼び出されたときも同じだ。ジイさんが俺の魔法が役立つと判断したときに、お呼び出しがかかるってわけ。

「どんなお願い？」

あきちゃんの追及には、答えるかどうか一瞬迷った。

「ネットで月並町に爆破予告してる魔法使いがいるから、念のため行っただけで見てくれたって」

「爆破予告！？」

あきちゃんの声が急に大きくなる。接客中の後輩がなにごとかと振り向いたのを、なんでもないと手で追い払って、

「よくあるイタズラだよ」

「危なくないの……？」

「ジイさんが持ってきた話だから大丈夫だよ。あの人は本当は全部

わかってんじゃないかってたまに思うよ」

ジイさんは、インターネット回線につながっているデスクトップパソコンのなかに入り込める。具体的にどうやって入り込むのかは知らないが——俺が眼鏡をかけたときに見えるものやわかってしまふことを上手く他人に説明できないのと同じで——、ジイさんがその気になれば、ネット回線につないであるほかのパソコンの中身を丸ごとのぞき見することだってできるらしい。セキュリティの効かない、やっかいなハッカーみたいなもんだ。

だから今回の爆破予告犯のことも、危険がないことをたぶんジイさんは知っている。もしくは、俺になら止められると判断しているか、だ。俺に振られる依頼なんていつも大したことないものばかりなので、どちらにしても身の危険を感じる必要はないだろう。

「でも、もしもおジイの身に何かがあつたとして、吏一君までいなくなっちゃったら……」

あきちゃんはまだ不安そうな顔をしている。好きな子に心配されるのは悪い気分ではない。ジイさんの行方のことまでは俺にはなんとも言えないが、自分のことは大丈夫だと胸を張って言える。

「あきちゃん、俺は」

「そうだ、私も行く！」

「え？」

カッコイイ台詞で頼もしく決めようとしていた言葉はあっけなく破壊されて、

「私も、吏一君と一緒に爆破予告犯を捕まえにいく！」

「それはダメ。あきちゃんまで危険な目にあわせるわけにはいかないだろ」

「大丈夫。危険はないんでしょう？ それに私、吏一君よりも強いよ。もし犯人がいたら捕まえるのに私の力が必要だと思うの」

ぜったい。と断言されて、情けないことに俺はなにも言い返せなかった。脳裏によみがえるのは、あきちゃんの華麗な跳び蹴りに、吹っ飛ぶスキンヘッド。現実には、彼女の力を一度目の前で見てしま

ったら。「それで、いつ行くの？」と食い下がる彼女に、俺は力なく「明日」と答えるしかなかったのだ。

日曜日だというのに、タイミングよくバイトは休みだった。だからジイさんからのメールにもすぐオーケーが出せたんだけど。

町内唯一の映画館の前で、はやりの邦画のチケットを二枚買って待つシチュエーションだけを見れば、完全にデートだ。

「ごめんなさい、遅くなっちゃった！」

セーラー服の彼女が小走りに駆けてくる。

「いや、俺も今きたところ」

こんなベタな台詞のやりとりをしてみても、残念ながらデートの中身は所詮、爆破予告犯の様子見でしかない。ジイさんのメールに添付されてきた爆破予告には、爆弾を仕掛ける映画館だけでなく、上映作品と時間帯まで指定されていた。おかしな話だ。ここまで具体的な予告なら、ジイさんが警察や映画館側に注意くらい呼びかけていてもおかしくないのに、館内にはそんな様子はまったくない。何か、事を大きくできない事情があるのか。かぎられた情報のなかでは予想を立てることくらいしかできない。

それに、この爆破予告がこのネット掲示板に投稿されたものか知らないが、もうすこし話題にのぼっても良さそうなものだ。検索もかけたし、ツイッターやフェイスブックでもそれらしい情報を探してみたが、一切ヒットしなかった。

あきちゃんが心配している、とジイさんにあてて送ったメールの返事もこない。あきちゃんの言うとおり、ジイさんを取り巻く何かがおかしいのは確かなのかもな。

この爆破予告がジイさんに連絡がつかないことと関係しているのかはわからないが、映画館にくること以外に今のところ俺がジイさんやあきちゃんにしてやれることはなさそうだった。

「恋愛ものだね」

最後列、真ん中の席についてから、あきちゃんは映画の半券を見てぼつりと言った。俺はその言葉の意味を深く考えずにあいまいに頷く。これがあきちゃんとの初デートと呼べるのかはわからないが、好きな子と初めてとなりと並んで見る映画はいつも落ち着かなくて、内容など頭に入らない。

それに今日は大事な仕事がある。劇場内の照明が落ちたあと、映画の予告が始まる前に眼鏡を準備する。レンズ越しの目に真っ先に飛び込んできたとなりの青い光は、あきちゃんだ。セーラー服に身を包む体全体が、水の中にいるみたいに青く揺らめく光のなかにある。明るさに目が慣れるまでには、すこし時間が必要だった。できるかぎりとなりを見ないようにしながら会場内を見渡してみる。それらしい魔法の光はどこにもない。やっぱりただのイタズラだろうか。ジイさんのメールには「念のため」と書いてあった。爆破予告犯がいらないのならば、俺は気がねなくあきちゃんとのデートを楽しむだけだ。

そんな目論見もつかの間、映画の三分の一が終わったところに、それを見つけてしまった。その光はあまりにも薄すぎて、最初はただの見まちがいかと思った。眼鏡をかけ直し、もう一度見てみる。

右手前方にぼんやりとした膜のようなものが揺らめいた。あきちゃんの色やスクリーンが明るいせいもあるかもしれないが、それにしても頼りない光だ。色も、白か灰色か判然としない。すこし目を離すとすぐに見失ってしまう。幸いにも、魔法使いらしき光の主は席を立つ様子はない。視界のはしに光を監視しながら、俺はスクリーンへと目を戻した。

「あきちゃん、前から四列目の右から五番目だ」

映画がクライマックスに入るころ、そつと耳打ちする。ちいさく頷いたあきちゃんの目尻にうつすらと涙がたまっていることに気づいて、俺は動揺した。映画の内容なんか正直、ほとんど気にしてなかったのだが、スクリーンのなかでは恋人同士が別れ話の真っ最中

で。お互いに好き合っているのに、いろんな大人の事情が重なってどうしても別れなければいけない。そういう話だった。

好きなだけでは、一緒にいられない。

ほんの一カ月半前に失恋したばかりのあきちゃんは、どんな思いでこれを見ているのだろう。しずかにエンドロールが流れるなか、ぼんやりとした淡い色が、客席から動いた。

「あきちゃん、動ける？」

泣いているのかと思ったけれど、あきちゃんはすぐに立ち上がった。未だスクリーンに見入っている人々の邪魔をしないよう、背を屈めて光を追う。

劇場を出て入り口へと早足に向かう背を追う。魔法使いらしき人物は、スーツ姿の小柄な男だった。落ち着かなげにあたりを見まわす様子は、あきらかに挙動不審だ。

「なあ、ちよつとあんた」

俺がうしろから声をかける。驚いて振り返った男は俺を見て、ひつと小さく悲鳴を上げた。失礼なやつだ。

「ちよつと聞きたいことが……」

逃げられないように捕まえておこうと手を伸ばす前に、男の腕が動いた。このクソ暑いのにきつちりと首もとまで留めたシャツのボタンを、自らの指先で、強く、押した。男の指先とボタンをとりまく灰色の光。ぼんやりとしていたはずのその光は、指先がボタンに触れた途端、強い銀色に変わって、眼鏡をかけた俺の目だけを焼く。ほとんど同時に、火災報知器の音が映画館の建物いっぱいに鳴りひびいた。

「……てめえっ何しやがった！」

観客が一斉に劇場から出てくる。その混乱に乗じて男も逃げようとした。が、俺のとなりでセーラー服の襟がひるがえるほうが早い。あきちゃんの右ストレートは、軟弱そうな男のみぞおちに綺麗にきまった。たのもしすぎるぜ、あきちゃん。うめき声をあげ、倒れ込みそうになる男を支えながら人の流れに乗って外へと出る。

火災報知器は相変わらずやかましく鳴っていたが、小さな映画館に火事の起きた気配はない。

誤作動か、と周囲の誰かが呟いた。

そうじゃない。

「この人がやったの？」

あきちゃんの視線はスーツの男に向けられている。男は意識こそ失っていないものの、俺に支えられてようやく立っているような状態だ。

「ただけ弱いんだよ。……もしくは、あきちゃんが強すぎるのか。」

「ご、誤解だ！ 僕は、ただ……」

「なにが誤解だ。爆破予告とか物騒なことしやがって」

「え……ええっ！？ 爆破予告！ そ、そんなことしない、僕じゃないっ」

男は大げさなくらい首を横にふって否定する。演技にしては、小心者っぷりが板につきすぎていた。黒目がちな両目は視線が定まらず、まるで敵に狙われた小動物だ。これでは自分のほうが悪者な気分になってくる。

「でもあんた、魔法使いだろ？」

「ど、どうしてそれを！？」

過剰反応。嘘をつく余裕などなさそうだ。

「ボタン。押すんだろっ……？」

にやりと不敵な笑みを見せて、カマをかける。男の首もとを締めつけるシャツの第一ボタン。そこを指先で弾いて指摘してやると、

「う……はい」

男はあっさりと白状した。いいのかよそれで。

「火災報知器を鳴らしたんだな」

「……はい」

思ったとおりか。男が自分のボタンを押したのと、火災報知器が鳴り出したタイミングは、偶然と呼ぶにはあまりにも出来すぎていて。

「遠隔スイッチみたいなものか。で、爆弾もここ押せば爆発する仕掛けなわけ？」

「ち、違う！　そ、そそそそんなこと僕には無理だ！」

「……確かに。そんな大それたことできるようには見えないんだよな」

「でも、どうして逃げようとしたの？」

あきちゃんに顔をのぞき込まれた男は、あろうことが頬を赤く染めて顔をそらした。おいおい。

「そ、それは……」

「……もう一回、やっちゃおう？」

しかし笑顔で左手で拳を作るあきちゃんもなかなか、なんつか……可愛いからしょうがないけど。

男は男で今度は青くなっちまって。忙しいな。

「わ、わかった。話すよ。そういう指示があつたんだ。あの映画を見た後でもし誰かに声をかけられたら火災報知器を鳴らして全力で逃げろって、さ」

「なんだそりゃ」

「誰がそんなこと言ったの？」

あきちゃんは優しい声で重ねて尋ねる。拳は握ったままだったけど。

「君らも月並町の人間なら名前くらい聞いたことあるだろ。堂本家の、長老だ」

ある人は長老と呼び、またある人は魔法使いのおじいさんと呼ぶ。あきちゃんがおジと呼び、俺はジイさんと呼ぶ。その呼び名はすべてただ一人の人物——堂本治一郎（どうもと じいちろう）を指していることを、俺やあきちゃんが知らないはずはなかった。

なあ、こいつは一体どういうことなんだ。ジイさん。

魔法使いなんていない(2)

堂本さんとの約束を破って、セーラー服にそでを通した。日が落ちると半袖の夏服ではすこし肌寒い。ついこの間まで熱帯夜だったのがうそみたい。窓から吹き込んでくる夜風が直撃する二の腕をかばうようにして反対の手でさすっていると、助手席側の窓が音もなく勝手に動いて閉まった。ちらつと横を見たら、運転席についている開閉ボタンを、吏一君の指が押していた。

「あ、ありがとう」

「夜はちよつと寒いな」

吏一君は私が言わなくても、こういうことにすぐ気づく。私を女の子扱いしてくれてるんだってことがよくわかる。同時に、吏一君は女の子の扱いに慣れてるんだろうなってことも。

ハンドルをにぎる横顔を、そつとぬすみ見る。やさしくて気が利いて、とても話しやすく、だけど馴れ馴れしいわけじゃない。顔だって、うちのクラスのなかにいたとしてもダントツでモテそうなのに、これで彼女がいらないなんて本当に不思議。ううん。もしかしたら夏休みの間にできてるかもしれないけど。——そしたら、助手席になんて乗せてくれないか。

「どうかした？」

急に吏一君が顔をこっちに向けるから、びっくりした。車は赤信号で止まっていた。

「えっ……あ、あのね……聞いてもいい？」

ごまかしついでに、ずっと気になっていたことを口に出してみる。そつ、映画館で爆破予告犯を捕まえたあと、詳しく話を聞いていたときに出てきたあの言葉。

「ジェイワイエム JYM」って、なあに？」

「それじゃあ君たちもJYMなの？」

爆破予告犯あらため大外内と名乗ったサラリーマンは、吏一君もおジイの依頼で来たことを告げると、そんな風に尋ね返してきた。私にはJYMが何なのかわからなかったけど、吏一君にはすぐに頷いて、

「俺はな。この子は違う。あんた、ジイさんからどうやって連絡受けたんだ？」

この子、と示されたのは私。吏一君はそのまま私を置いてけぼりにして、話を進めていく。

「スカイプだけど」

「いつ？」

「一週間くらい前かな」

「通話で？」

「いや、チャットだよ」

「……それ、本当にジイさんだったか？ 誰かがジイさんを騙ってたって可能性は？」

そういう可能性も一つある、と吏一君は言った。私は大外内さんと一緒にぼかーん。そんなこと、考えもしなかった。

「ジイさんと連絡とれないんだ。家も留守。俺もジイさんの依頼でここに来たって言ったけど、メールだったし、本人かどうかなんて正直わかんねえよな。あんた、ほかに何か知らないか？」

「いや、ごめん。僕は何も……」

頼りない大外内さんの下がり眉が、ますますたれ下がっていく。明らかに自分より年下の吏一君相手に、完全に萎縮しているようだ。この様子では嘘をついたり誤魔化したりなんてこと、できそうになり。というかこの人、こんなんでお仕事とか大丈夫なのかな。

「そっか。ま、俺らがあんまり騒いでどうにかなるもんでもないかさすがにそろそろ身内が心配するだろ」

「あー……それはちよつと、堂本の家は難しいんじゃないかな」

楽観的に言ってみせる吏一君に、大外内さんはあくまでひかえめに、恐る恐る異論を唱えた。

「ほ、ほら、長老は堂本家から縁を切られてるから……」

「どういうこと？」

詳しい話を促されると、大外内さんは急に言い淀んで、視線をさまよわせる。

「お家事情だろう。僕も詳しいことは……」

本当は知っているんだろう。挙動が不審すぎてバレバレだ。でも、人の家の事情を他人から聞き出すなんて野暮なこと、私も吏一君もしたくなかったから、それ以上は追求しなかった。おジイが私たちに話してないってことは、きっと、知ってほしくないことなんだ。

結局、それ以上のことは何もわからなかった。映画館の火災報知器は誤作動だったってことで決着がついて、何事もなかったかのようになり周りのみんなが館内に引き返していくなか、おジイのことで何かわかったら知らせるから、と吏一君は大外内さんの連絡先と会社の名刺までもらった。抜かりないなあ。

ここまでが映画館で起きた事件の顛末だ。吏一君が車で送る、と言ってくれた帰りの車中、私はやっとJYMの説明を求めることができた。

「JYMはジイさんが作ったなんでも屋みたいなもんだよ。口止めされてるからあまり詳しいことは話せないけど、誰かが何かに困っているときに、ジイさんが自分の知ってる魔法使いのなかで対応できそうなやつに連絡して依頼するんだ。あきちゃんに初めて会ったときに俺がジイさんに呼び出されたのもそれ。俺の力なんて大して使い道がねえからあんまり呼び出されることないんだけど」

「……知らなかった。そんなことしてたんだ」

私はずっとずっと小さいころからおジイのことを知ってるのに、

そんなことしてるなんておジイは一度も教えてくれなかった。のけ者にされたみたいで、少しだけ悲しくなる。それが顔にもぼつちり出てみたい。

「ジイさんは、あきちゃんにはあんまり知ってほしくなかったみたいだな」

「どうして？」

「たぶんだけど、あきちゃんが自分もやるって言い出しそうだったからじゃないか。孫みたいに可愛がってるあきちゃんを危険な目にあわせたくなかったんだろ」

そうなのかな。おジイはやさしいから、本当にそんな風に考えてくれたのかもしれない。

だけとおジイは、魔法の扱いに関しては実はすごく厳しい。魔法も、私のこともよく知ってるおジイのことだから、私が魔法を上手く使えないってこと、おジイはわかってるんじゃないかな。それでもおジイは私から魔法を、セーラー服を取り上げずに見守ってくれてる。やっぱりやさしいね。私はそのやさしさに甘えてばかりでおジイがいない今、すごくさみしくて、不安で、怖い。

「……更一君がいてくれて、よかったな」

思わず、そんな言葉がこぼれ落ちていた。

更一君がすこし驚いたような顔でこつちを見たけど、運転中だ。前方へと向け直した横顔はちよつと照れてるみたいに見える。そういえば私、まだ更一君に言っ てなかった。あのときのお礼。

「ありがとう、更一君。……先生に、私が……たとき、そばにいてくれて、ありがとう」

告白したときも、失恋したときも、泣いていたときのことは思い出すとちよつと恥ずかしいけど、更一君がずっと一緒にいてくれたことはちゃんと覚えてる。

「礼言われるようなことはなにもしてないよ。あきちゃんが頑張ったんだ」

「ダメだったけどね」

あ。

自分で言ってから、びっくりした。いつの間に、笑って自虐ネタにできるようになったんだろう。そう、私、笑ってたんだ。夏休み中は先生のことを思い出すだけで泣きそうになってたのに。おジイのことがあったから、新学期が始まって先生の顔を見てもゆっくり感傷に浸るところじゃなかったただけだね。

「先生のことまだ好きだけど、ちよつとずつ諦めるんだ」

決めたんだ。すぐには無理だから、ちよつとずつ。自分のペースで。しばらくは諦められないかもしれないけど、そのときはそのときでしようがない。堂本さんみたいにおじさんになるまでしつこく思い続けるのかもしれないし、そんな先のことはわかんない。

「あきらめるのに一番てつとり早い方法は新しい恋ってよく言うけどな」

「吏一君までコウ君と同じこと言うんだね」

どこかで聞いたような台詞に笑ってしまふ。そういえば、コウ君のこともすっかり忘れてた。どうなったのかな、写真。私よりももっといい被写体を見つけたのかな。

「コウ君って？」

聞かれたから、私は吏一君に話すことにした。本当は、おジイに話すはずだった夏の思い出話。堂本さんに着替えをのぞかれたりコウ君にちよつとからかわれたり車にひかれそうになったりでひどく心配されたけど、ほとんど包み隠さずに話せたからすつきり。私が川で泣いていたこととか、堂本さんにパンツを見られたことなんかは恥ずかしくて言えなかったけど。

だって、家族や学校の友達には当たり前だけどほとんど話せないことばかり。私が魔法使いだってことも先生のことが好きだってことも知ってるのは、吏一君とおジイくらいだもん。吏一君が知らないのは、私が本当は男の子だってことくらいだ。

家の近くで車を止めてもらうまで、私はずっと話し続けた。吏一君はときどき相づちを打ちながら、ちゃんと最後まで聞いてくれた。

「あきちゃん。大丈夫だよ」

さよならの直前に、吏一君はやけにきっぱりと言う。何の根拠もないってわかってたけど、不思議と大丈夫な気がした。

おジイは大丈夫。

おジイがいないあいだの私も、大丈夫。

吏一君がいてくれるから、大丈夫。

翌朝、学校にいこうと家をでた直後に、吏一君からメールがきた。
『ジイさんの居場所がわかった』

本当に、と叫びかけた口もとを押さえて、スクロールさせたメールの続きには、病院の名前と住所が記されていた。

この日、私は初めて学校をサボった。電車で二駅となりの病院はそこそこ大きくて、古くて、足を一歩踏み入れればその独特な雰囲気につきかりのまれてしまう。吏一君のメールには、面会時間が午後からだってこともちゃんと書いてあった。でも、居てもたつてもいられなかったんだ。時間外だけど、だめでもともと。入れてもらえないか聞いてみよう。孫ですって言ったらどうか。そんなことを考えながら病室の場所を探していたら、後ろから聞きなれた声が出た。

「あきちゃん？」

学ラン姿の自分をその名前で呼ぶ人はすくない。振り返ると、ほとんど同じ目線に怪訝そうに眉根を寄せたみすずさんの顔があった。

「どうしたの？ 学校は？」

制服姿の私を見て、みすずさんは真つ先に痛いところを突いてくる。

「そんなことよりおジイが！ ……もしかしてみすずさんも、おジイのところに？ 知ってたの？」

みすずさんは申しわけなさそうに頷いてみせた。

気づいてみればとても簡単なことだった。おジイのところに入
りしているみすずさんが、おジイの行方を知らないわけがないんだ。
「ずいぶん心配させたみたいで、ごめんね。治一郎さんが入院して
ることもっと早くに教えてあげればよかった。昨日の夜に新沼君か
ら連絡があつたの。あきちゃんも心配してるからって教えてくれた
のは、新沼君なのよ」

私は首を横に振る。みすずさんは全然悪くないよ。私が先に気づ
けばよかったんだ。おジイの行方は、みすずさんに聞いたらわかる
かもしれないってこと。連絡先だって私は知ってた。なのに、ちっ
とも思いつかなかった。

みすずさんは私をおジイの病室まで連れて行ってくれた。歩きな
がら、吏一君とみすずさんのことを教えてくれた。

「何年か前に、治一郎さんを通じて会ったことがあるの。あきちゃ
ん、新沼君に夏休みのあいだに小学校にいたって話をしたでしょ
う？ それを聞いて私のことを思い出したんですって」

「みすずさんもJYMなの？」

「ええ、そうよ」

私の問いかけに、みすずさんは小さく頷いた。

おジイの病室は個室だった。大きなベッドに横たわるおジイの体
はあまりにも小さく見えて、なんだか悲しい気分になる。うでに点
滴がつながれていること以外は、なにも変わらないおジイ。いつも
パソコンのディスプレイを鋭く見つめる目が、今はおだやかに閉じ
られている。半月型の眼鏡はテーブルの脇に置かれていた。眠って
いるおジイには、必要ないから。

「八月終わりに、ちょうどあきちゃんが家に帰った翌日だったかし
ら。パソコンの前でとっぜん倒れてね、それからずっと意識がない
の」

ちょうど夕飯を作りにきていたみすずさんがすぐに気づいて、救
急車を呼んだ。医者診断では、特に異常は見つからなかったらし
い。なのに、おジイは目を覚まさない。眠り続けたまま、もう一週

間以上が経つ。

おジイのベッドのそばで、私はどうしたらいいのかわからない。話しかけることも、ふれることもためらわれて、ただ一人で立ちつくしているしかできなくて。話したいことがたくさんあるのに。相談したいこともたくさんあるのに。

「あきちゃん、学校に行きない。今からでも午後の授業には間に合うから」

みずずさんがしずかに、だけど先生みたいに強い口調で言う。ここにいても、私にできることはないんだと遠まわしに言われた気がして、泣きたくなった。

みずずさんはわざわざ車で校門まで送ってくれた。そうしなければ、私がこのまま学校をサボってしまうと思ったのかもしれない。本当は、おジイが大変なときにのん気に授業なんて受ける気分になれなかったけど、二時間が終わったあとの時間を狙って教室のに向かった。

「めつずらしー。宮司が遅刻？」

「違う。サボリ」

「はあ？ 来てんじゃん」

教室で真っ先に話しかけてきたクラスメートの木崎がわけがわからないという顔をしている。だけど、わけがわからないのはこちらも同じだ。

「なんで木崎が俺の席に座ってんの？」

「お前いないあいだに席替えしたんだっつ。あ、現国の教科書借りたからな。サンキュー」

木崎は、私が机のなかに入れっぱなしだった教科書を勝手に使ったらしい。人好きのする笑みをへらりと向ける。この笑顔だけで上手く世わたりできるタイプだ。

「俺の席は？」

そんな木崎とでさえ、今日の私はおだやかに会話できる自信がない。早く一人になりたかった。あっち、と示されたのは、同じ縦列

の二つ後ろの席。最後尾だ。運がいい。

自分の席についてようやくほっと息を吐く。考えないといけないことがたくさんある気がした。

そうだ、まずは吏一君にメールをしよう。教えてくれてありがとう、と。携帯電話を取り出したタイミングとほぼ同時に、前に座るセーラー服のえりがひらりとひるがえって、

「ねー、サボりってマジ？ 宮司って地味なやつかと思ってたけど意外とやるね」

メイクばっちりの女子生徒がこれでもかというくらい拡張されたくつきり二重でこちらを見つめる。流だ。ながれ樋川流。ひかわながれクラスメートの一人、といっても今まで話したことはない。もともと私、女子と話すタイプじゃないしね。きれいな名前だったから覚えているだけ。本人はそうでもないけど。たぶん、メイクしないほうがかわいい。

「よけいなこと言うなよ、木崎」

樋川の向こうがわ、こちらを見てニヤニヤ笑みを浮かべている男に文句をつけてやる。

「えー？ なに俺と宮司の秘密だった？ まっじごめんごめん。そうならそうと早く言ってくれりゃあ」

「うわー木崎きもいよ」

二人が話しているのを無視して今のうちに吏一君にメールを……。 「まー席前後だしよろしくー。ってか宮司って近くで見るとさー、意外とかわいい系？」

「あつれ、流ちゃん知らんかった？ こいつけっこー女顔っつーの？ 中学のころからぜんぜん変わらんよ」

「だって前髪長すぎなんだもん。顔見えないよ。つか、前見えてるー？ 切れば？ 私切ったげようか？ 意外とうまいよー」

「……いや、いい」

つか、メール送りたいんだけど。私が携帯電話とにらめっこしてることなんておかまいなしに樋川は話しかけてくる。自分の都合ばかりで、図々しくて、油断するとその勢いに飲まれてしまうから無

視したかったけど、相手は女の子だし木崎の友人だからあからさまに冷たくもできなくて、中途半端。

木崎は中学校からの友達だ。昔はただのお調子者だったのに、高校デビューだとかで突然あかぬけた。調子に乗りすぎて高校入ってすぐできた彼女を二股かけてこっぴどくフラれてからはちよつと大人しくしてるみたいだけど……って、これはどうでもいいや。

「わ、まつげながーい。きれいな二重だし、顔ちっちゃいし、てか男にしてはパーツが小さめだね。唇も真っ赤でぼてってしてるし、ってか肌すべすべ！ マジうらやましいっ」

「あの……あんまり触らないで。まわり見てるし」

いつの間にか伸びてきたピンクのラメ入りのネイルの指が前髪を持ち上げて、勝手に観賞を始めていた。ガン見されて居心地は悪いが、女の子相手では手をはねのけるわけにもいなくて困る。ただ、さすがにほつたをべたべた触られたりするのには、ちよつと勘弁してほしい。

「ごめんごめん。髪の毛もちよーさらさらなんだもん。ね、やっぱり前髪切ろうよ。イケるって」

名残惜しそうにゆっくり離れていく指先が、ちよつきんとハサミの形になる。

「俺はどこにもいく気ないから」

「流ちゃん、むだむだー。俺もおんなじこと何回も言ったもん」

「えー？ 木崎に言われるのと女の子に言われるのとじゃ違うんだって！」

「いや違うないけど」

「ええー？ 宮司って変だよーえいつデコだし！」

「遊ぶな。やめろって」

再び前髪を持ち上げられたので、今度はゆるやかに身を引いて抵抗した。やっぱり、女の子相手だとうやうやって対処したらいいのかわからない。

「いひひ。怒ったー？ ごめんねー」

「怒ってないけど」

どちらかというと、戸惑っている。

樋川は少し茶色に染めたストレートの自分の髪の毛をいじりながら、ふと思い出したようにまた顔を上げた。

「あ、わかった！ さっきから誰かに似てるなーって思ってたんだけど、あの子だ。幸せのチエンメの子」

「……何それ」

「知らない？ ちょっと前に回ってきたんだー」

携帯電話を取り出した樋川は、一通のメールを見せてくれた。

タイトル：幸せのチエンメール

本文：いま、好きな人はいますか？

片思いですか？

両思いですか？

幸せですか？

不幸ですか？

もしもあなたの恋がうまくいっていないのなら、この写メを一時間以内に五人に回してください。

写真の女の子が、あなたの代わりに悲しいことをすべて引き受けて泣いてくれます。

添付されていた写真が携帯の画面いっぱいに写った瞬間、頭の中が、真っ白になった。だって、この子は。この女の子は。

「ね、似てない？」

「どれー？ 俺にも見せてー。……あ、マジで泣いてんじゃん。横顔だしよくわかんねえな。ま、似てるっちゃ似てるかも」

樋川と木崎は写真を見ながら好き勝手なことを言っている。そうじゃない。似てるんじゃない。これは真正正銘、私だ。あきちゃんだ。

携帯電話の四角い画面のなかには、見たことのある風景が、見た

ことのある服装の私が、写っている。川に足をつけて、先生のことを思い出しながら思いつきり泣いたあの夏の日。誰もいないと思っただのに、あのときカメラのシャッター音がして、現れた一人の男の子。それが、コウ君との出会い。

この写真は、コウ君が撮ったものだ。間違いない。

「おい、どうした？ 宮司、だいじよぶか？」

気がつけば木崎が心配そうにとなりに立っている。樋川も不思議そうに私の顔をのぞき込んでいた。

「……な、んでもない。これ、誰から回ってきたの？」

「いろんな子からきたよ。みんな幸せになりたいんだねー。私は回してないけどさ。なに、マジでどしたの？ こわい顔してるよ」

「……あ、いや……もしかしたら、それ親戚の子かも」

とっさに嘘をついた。

「え、そうなの！？ だから似てるのかなー」

「このメール、誰が最初に回したかわからない？」

コウ君と出会ったのはお盆前だった。夏休みのあいだに一体どれほど回っているのか。「えーそんなのわかるわけないじゃん」

「わかるところまででいいから。……自分の写真が勝手にまわされてたらいやだろ？」

心臓が妙にばくと鼓動している。自分がまだ冷静に会話できていることが不思議だった。怒っているとかそんなんじゃないくて、悲しいともちがう。ただ、ショックだったんだ。ほんの数回しか会ってないけど仲良くなれたと思ってたのに。裏切られた気分だった。「んじゃあ、友達のよしみで俺からもお願い、流ちゃん！ 乗りかかった船ってやつでさ」

「木崎はどうでもいいけどおー……うーん、この子はかわいそうだもんなあー。ちょっとみんなに聞いてみるね」

了承してくれたあとの樋川は速かった。携帯メールを打つ、指の動きが、だ。

「あ、そんなかわい、もし突き止めたら前髪切ってね」

携帯画面から一瞬顔を上げ、濃いアイライナーの目もとが二ヒツといたずらっぽく笑った。どうしてそうなるの。

メールといえば、吏一君のところにきてたおジイからのメール。あれは一体誰が送ったんだろう。おジイが倒れたのは八月の終わりの一週間以上前で、それっきり目を覚ましてない。吏一君はほんの二日前に、おジイからの依頼メールを受け取ったって言ってた。おジイが本当に目を覚ましていないなら、メールを送れるはずがない。誰かが、おジイを騙っているのかもしれない。

吏一君が言ってたひとつの可能性が、急に真実味をおびてくる。その夜、吏一君と電話ですこしだけ話をした。やっぱり吏一君もおんなじことを考えてた。吏一君は今度おジイの家に行つてパソコンを調べてみるって。すごいなあ。私が思いつかなかったことを、ぽんってやってのけちゃう。私も一緒に行きたかったけど、吏一君はバイトのない平日の昼間しか動けないし、私はその時間、学校がある。サボったらまたみすずさんに怒られそうだし、くやしいけどおとなしくしてることにする。私が行つても役に立たないのも事実だしね。

チェンメの話はしなかった。これ以上、心配ごとを増やすのもどうかなって思つて。おジイのことで私にできることが何もないならせめて、自分のことくらい自分でなんとかしなくちゃ。

代わりに、おジイのお見まいに行つたよって話をした。吏一君も昼間にバイト行く前に寄ったんだって。あとから気づいたことだけど、もしかしたら鉢合わせする可能性もあったんだよね。私あのとキ学ラン着てたんだって。

「そつえばさ、あきちゃん。夏休みにジイさんと会つた？ ジイさんが小学校まで会いにきたとかさ」

「え……会ってないよ？」

「一度も？」

「うん、一度も」

念押しする吏一君に向かって、受話器越しに頷く。どうしてそんなこと聞くんだろう。

「だよな。ごめんな、変なこと聞いて」

吏一君には前に話したはずだ。私が夏休みの間ずっと月並小学校にいたことも、おジイとずっと会っていないことも。吏一君は「念のため」って言ってたけど、気にかかる言い方だった。ちゃんと面と向かって話していれば、もっと突っ込んで聞けたかもしれない。携帯電話越しの声だけじゃ、ごまかされているのかどうかも判断できなかった。

会いたいな。

つい、出そうになった言葉をあわてて飲みこんだ。吏一君はやさしいから、うっかり甘えてしまいそうになる。会って話したいな。大丈夫だよって、きっと、吏一君は言ってくれるから。

魔法使いなんていない(3)

『おはよう(^ - ^)』

昨日はメールの返事送れなくてごめんね――(・・)――
気がついたら寝ちゃった(< - >)
窓開けたままだったから、寒くて起きたよ――←←←

『おはよ。たぶんまた寝るけど。』

風邪ひかないように気をつけて。
学校いつてらっしゃい!』

『いつてきまーす(^^) /』

おやすみ。』

車を発進させる前に、あきちゃんからのメールを確認する。メールですらかわいい。にやけそうになる口元に手をあてて――誰が見てるわけでもないが。メールの返事をうつ。ここ最近、あきちゃんとはほぼ毎日メールをやりとりする仲だ。

『おはよう(二回目) 今からジイさんち行ってくる』

道すがら多聞の店の前を通ると、店の扉には珍しくCLOSEDの看板がかかっていた。定休日はない、といっただったか店主は言っていた。自称出不精の店主はたいていの買い物ネットですませてしまう。食料や日用品もすべて、だ。出不精っつーかほとんど引きこもりだな、あれは。

しかし今日は違った。店の前を通りすぎ、数十メートルもいかないうちに道脇を歩く多聞のうしろ姿を見つけたのだ。追い越したところで気づいてブレーキを踏み、運転席の窓を開ける。狐のような

細い目をした男が顔を上げ、こちらに気づいた。

「めずらしいな。どこ行くんだ？ 駅くらいまでなら乗つけてくぜ？」

九月とはいえ、まだ日差しは強い。影をえらんで歩いていても、外は暑そうだった。

「ありがとう。でも、いいよ。たまには動かないと体がなまる。君は今日もまたバイトかい？」

「いや、今日はちよつと野暮用」

実のところバイトも夜から入っているのだが、言うともた毎日それしかないのかと笑われそうだからやめておく。

「なにか心配ごとでもあるのかい？」

唐突といえばあまりにも唐突に、多聞は尋ねてきた。

心配ごと、か。ジイさんの容態やジイさんを騙るメール、それから、あきちゃんのこと。心配ごとがないと言ったら嘘になるが、指摘されるほど顔や態度に出しているつもりはなかった。

「そついう顔してる」

にこりと目を細めた糸目はあいかわらずどこか胡散臭い。

「読むなよ、かってに。心配ごとつーか、しょうに合わないことするもんじゃねーって。隠しごととか苦手なんだよ」

事情を知らない多聞にはなんのことかわからないだろう。ひとりごとみたいに言ったら、思いのほかグチっぽくなった。

「ああ、確かに苦手そうだな。君みたいに言ってることと腹のなかで考えていることが大体一致する人間と一緒にいると安心するよ」

「あんたは腹んなか真っ黒って感じたよな」

「ありがとう」

「ほめてねえんだけど」

後続車にクラクションを鳴らされて、会話もそこそこに俺は車を発進させた。バックミラーに映る多聞が軽く手を振っているのが見えて、窓の外に片手を出してひらりと振り返す。

実は、あきちゃんに話していないことが一つだけある。これ以上

心配ごとを増やしたくなって言えなかったことが。

ジイさんの見舞いに行ったときのことだ。何かわかるかもしれないと思って、俺はサイドテーブルに置いてあったジイさんの眼鏡をかけてみた。俺の魔法は不安定で、こちらがほしい情報がかならずしも手に入るとはかぎらない。だから、ジイさんの眼鏡をかけて俺が見たものが、今回の件に関係あるとは断言できないのだ。

眼鏡をかけて見たものが――あきちゃんの泣き顔が――答えだとは思いたくない。俺が見たのは、セーラー服ではなかったけれど確かにあきちゃんだった。半パンにサンダル、半袖のシャツという涼しげな格好だったから、きっと夏なのだろう。だから彼女に、ジイさんに夏休みに会ったかと聞いたのだ。さすがに、泣いたかどうかは聞けなかった。

あきちゃんにはジイさんに会っていないと言う。ジイさんがぬすみ見でもしてたのか？　なんのために？

里中さんから聞いたジイさんの家は、町の南側、俺の住む住宅街からは駅をはさんでちょうど対角線上にあった。車で三十分の距離を走るあいだにいろいろな可能性を考えてみたが、答えには辿りつけない。

やがて、古びた平屋の前で待っている里中さんの姿が見えた。ひらひらと手をふる里中さんの誘導に従って車を停め、一緒に家のなかに入る。

部屋は質素なりビングとふすまで仕切られた和室の二部屋だけだった。ジイさんのデスクトップパソコンは和室のほうに設置されていた。電源を入れるあいだに、里中さんがキッチンでお茶の用意をしてくれる。古い型だからか、立ち上がるまで妙に時間がかかる。冷たいお茶を入れてくれた里中さんに礼を言い、やたらと動作の遅いディスプレイと向き合った。ジイさん、よくこんなマシン使ってたな。ウィルスにでも感染してんじゃねえのか。重すぎて、メールソフトすら起動できない。

念のためにウィルススキャンをかけてみることにする。待つあい

だに後ろを振り向いて、

「里中さん、ジイさんの家のことを教えてくれないか？ ジイさんは堂本家から縁切られてるって聞いたけど、今回のこととその辺のお家事情は関係ねえの？ ジイさんにうらみ、とかさ」

本当なら本人に尋ねるべきなのだろうが、当の本人の意識がないのだからしょうがないと納得させて、俺はこの際だから聞いてみた。たぶん、これから俺がジイさんの傍で魔法を使い続けるならば、いずれは知ることになるだろう。

「新沼君は、治一郎さんが誰かにあんな目にあわされたんじゃないかって、思うの？」

里中さんはやわらかい視線を向けてきたが、試されているような気分だった。答えもおのずと慎重になる。

「そうじゃないといいな、と思ってる。ジイさんが倒れただけならそんなこと思わなかったよ。俺と大外内さんにきたジイさんからのメールのせいだな。あのメールはどう考えても変だ。それに、堂本家の当主は誰かに狙われてんだろ？ とぼっちりがジイさんに来てるってことはねえのかな」

あきちゃんから聞いた、狐の面をつけた男の話——彼女自身も巻き込まれた夏休みのあの事件が今回のことと関係しているかもしれない。あくまで可能性の話だ。確かなことなどひとつもない。

「そうね……。ねえ、新沼君は月並町の魔法使いが二つの派閥に分かれてるってことは知ってる？」

俺は首を横にふって答える。もともと俺の家は旧家でもなんでもない。親戚に魔法使いがいたって話も聞いたことがないので、この町の魔法使いの系譜からは外れた人間なのだろう。

「一つは堂本家ね。基本的な考え方は、若いころに治一郎さんが提案したのと同じ——魔法使いはひっそりと暮らしていくべきだ。しかしわれわれの力が誰かの役に立つのならば、その力の行使を決して惜しみはしない」

その言葉はジイさん本人から聞いたことがある。JYMで魔法を

使ってみるかと問われたときに、教えられた理念そのままだ。

「だけど一方で、魔法使いの力をもつと有益に、ビジネスに利用しようとする人たちもいるの。それが、青柳家^{あやぎ}」

どこかで聞き覚えのある名前だとすぐに思った。ああ、あれだ。

「青柳……って、アオヤギグループとなにか関係あんの？」

「大ありよ。その取締役が青柳家の現当主だもの」

アオヤギグループといえば、月並町のとまり町に本社を持つ地元屈指の大企業だ。この辺りだとアオヤギグループと関わらずに商売することのほうが難しい。俺がバイトしているカフェバーも確かアオヤギグループの傘下企業の手がける事業だったはずで。

「堂本家と青柳家の対立は魔法使いに対する考え方のちがいね。それでも昔に比べればずっとおだやかになったものよ。一時期は道ですれ違っただけで一触即発なんて時代もあったんだから」

「里中さんは堂本家の分家？」

「そうよ、待っててね。古いものだけど、系図を見せてあげる」

そう言っただけの引き出しを開けた里中さんは、丸く巻かれた大きな一枚紙を畳に広げた。ほとんど一畳分の大きさだ。二枚重ねの紙の一枚目は、堂本家を中心に里中、宮司、熊谷、大外内などといくつもの分家が一目でわかるような図が描かれている。

二枚目は青柳家のものだった。こちらと同じように、芝原、木崎、三島と、月並町にいまも存在する分家が並ぶ。知っている名字もいくつかあった。

「いまの若い子には家同士の対立なんてほとんど関係ないみたいだけれどね。自分の家が魔法使いの分家だってことを知らない人もたくさんいるし、時代は変わるものよ。でもね、本家はそういうわけにはいかないの。堂本家と青柳家の対立は私たち分家の人間が思っているよりもずっと根が深い。——なのに、治一郎さんは、あるとき青柳の人間を助けた。どういう経緯で助けたのかは私にはわからないけど、そのせいであの人は堂本家と縁を切られてしまった。本家には本家の事情があったのでしょけど、あんまりだと思ったわ。」

だから私は勝手に治一郎さんのお手伝いをしているの」

すべてを話し終えて、里中さんは手につかんだコップの中身を勢いよく空にした。

「その辺の事情を全部知ってる里中さんは今回のことどう思っているの？ 青柳家の話をしてくれたってことは、少なからずそいつらがあやしいとは思ってたんだろ？ ちがう？」

コップをテーブルに置くのを待って、俺は意見を請う。正直なところ、たったいま事情をかいつまんで聞いただけの俺に判断できることは思えなかった。

「……難しい質問ね。治一郎さんは人にうらまれるような人ではないけれど……。青柳家のいまの当主なら、治一郎さんのことを邪魔だと思えば、なんらかの手段をとってくる可能性はゼロとは言い切れないわ」

「ジイさんは青柳家の人間を助けたのに？」

「青柳家の当主を助けたわけではないから……。青柳家の当主はね、ことビジネスに関しては手段を選ばない。っていうのは私も人の噂で聞いたことだけ。ただ、青柳家は魔法使いの力を使って大きな事業をしようとしているみたい。本家の人間ならもつとくわしいことがわかるかもしれないわね」

それとなく聞いてみようかしら、とつぶやいた里中さんが、不意に思い出したように付けくわえた。

「そうそう、青柳家の人間はみんな魔法使いなの」

その瞬間、背後のデスクトップパソコンが悲鳴のように警告音を鳴らした。画面を振り返ると、スキャンが終わっている。案の定、検出されたウイルスが画面に示されていた。

「やっぱりだ、ウイルス感染してる」

「ウイルス？ ……それって対策していてもかかるものなの？ 治一郎さん、パソコンが感染すると自分の体調も悪くなるから、ウイルス対策だけはしっかりしておくんだって言ってたのよ」

「新しいやつがどんどん出てくるから、絶対安全とは言えねえんだ

……あ、そうか。ジイさんが倒れた原因ってこれかもしれない。パソコンはジイさんの魔法の道具だから、こいつが攻撃されたらジイさんの体調も悪くなるってのはおかしい話じゃねえし」

ということは、ウイルスを駆除してやればジイさんが目を覚ます可能性だってあるわけだ。この思いつきは試してみる価値があると思うた。

「ジイさんが倒れたのってここに座ってたときだろ？ ほかに考えられねえよ。持病もねえんだし。ウイルスに警戒してたのに感染したってのが引つかかるけど、たぶんすっかりメールでも開いて……」
俺がほとんど勝った気分で、ウイルス説を説明していたときだ。クリックもしていないのに、パソコン画面に自動的にメールが立ち上がった。

俺は大事なことをいくつか忘れていた。ジイさんが倒れたあとにも送られてきたメール。あれは、このメールアドレスから送られたんじゃないかったのか。気づいたときにはもう遅かった。いくらキーボードを叩いてもマウスを操作しても、パソコンはこちらのいうことなど一切きかない。

「遠隔操作……？」

立ち上げられたメールのなかから、一通の既存メールが勝手にひらく。差出人不明。件名なし。本文なし。添付ファイルあり。なんでこんな見るからに怪しいメールを開いちゃったんだよジイさん。その答えはすぐにわかった。

マウスポインタが添付ファイルをクリックしてダウンロードを始める。俺はただ黙って見ているしかない。やがて、画面いっぱい写真が何枚も何枚も何枚も、何十枚も開かれる。全部同じ写真だった。俺はその写真を知っていた。見たことがあったんだ。

ジイさんの眼鏡をかけたときに。

一緒に画面をのぞきこんでいた里中さんも気づいて、あつと声をあげる。

「これ、あきちゃん……！？」

川に足をつけて、すずしげな格好をしたあきちゃんが、写真のなかで静かに泣いていた。

「里中さん！ あきちゃんって、この時間だとまだ学校？」

部屋のかべにかかった時計を見上げると、時刻は午後三時をすこし回ったところで。

「どうかしら、休み明けテストがあるって言うてたから早く終わってるかもしれないわ」

あきちゃんの携帯電話を鳴らす。すぐに留守番センターにつながって、通話を切った。電源が入ってないってことはテスト中か、そうじゃないければ――。

「ジイさんの病院に行ってるのかもしれない」

「待って、待ちなさい新沼君。ちよつと落ち着いて。そんなに慌て飛び出したら事故しちゃうわよ。あきちゃんがあぶない目に遭ってるわけじゃないんだから」

「だけどこれは立派な脅しだぜ？ しかも、このパソコンをどっかで勝手にいじってるやつは電源が入ったことを知ってまた同じ写真を見せつけるようにして開きやがった。次にねらうのはあきちゃんだって言うてんのと同じじゃねえか！」

気づいたら、ほとんど怒鳴るようにして叫んでいた。完全に頭が血がのぼっていることを自覚して、熱を冷ますようにしてかぶりを振る。あきちゃんが危ないかもしれないと焦っているからって、里中さんに怒鳴ることじゃない。

「……すみません。でも、あきちゃんには早いところ警告しといたほうがいい気がして。俺、ジイさんの眼鏡かけたときにあきちゃんの泣き顔を見て、だけど心配かけないほうがいいと思って黙ってた。あれはジイさんが見たこの写真だったんだと思う……」

もっと早くにジイさんのパソコンを調べに来ればよかった。そうすれば、あきちゃんにも説明してもっと詳しい話を聞けたかもしれないのに。写真を撮られた覚えはないか、撮ったやつに覚えはないか、そもそもこれは本当にあきちゃんの写真なのか。合成とか方法

ならいくらでも考えられる。

後手後手に回ってる気分だ。早くしないとあきちゃんのこと手遅れになるんじゃないかと、気ばかりが急いて。

「大丈夫よ。あの子は強い子だし、夏休みの事件のことがあったから念のために堂本家のガードが近くについているはずよ。……そんなに心配なら、見てみましょうか」

里中さんは俺を上げますように肩を叩いてから、べつの紙をたんすの引き出しから引っ張ってきた。これまた大きな紙だ。広げると月並町とその周辺全体が見わたせる白地図だった。

「私の魔法、まだ新沼君には見せたことがなかったわよね。手を貸してくれる？ よく見ていてね」

里中さんが差し出す左手を俺はわけもわからず軽く握る。そのまま、彼女は右手の人差指で、白地図の端のほうにゆっくりと指先を落としていく。ほとんど垂直に。目指す先はジイさんの入院している病院だ。ぴたり、と里中さんの指先と地図とが触れあったとき、目の前に病院の屋上が広がった。

「なんだ、これ……」

「これが私の魔法。治一郎さんは『鳥瞰図』と名づけてくれたわ」なるほど。地図の上から眺めるこの感じ。鳥の気分といえなくはないが。視点だけが病院の上空にありながら俺自身が座っているのは相変わらず畳のうえなので、感觸的には視界をはみ出すほどの大きなスクリーンで映画を見ているのに近いのかもしれない。

画面が急にぐんと近づいて、病棟の廊下を上から見る形になる。

「もう少し右かしら」と里中さんが微調整をするたびに目ん玉を引っ張られるようで気持ち悪かった。いくつかの病室をさまよい、やっと見つけたジイさんの部屋。その部屋の天井から見下ろす形に視点が固定される。病室のなかに見えたのは、ベッドに眠るジイさんの顔。そのかたわらにたたずむ、私服姿のあきちゃんの小さな頭がつむじ。

それから、そのとなりに並ぶ頭がもうひとつ。真上からでは顔が

見えない。肩幅からして男のようだが。みずさんがすこしばかり二人の顔が見える位置へと場所を移動させた。ななめ上から見下ろす形で、あきちゃんの隣に立つ男の顔を確認した俺は、思わず息をのんだ。知っている顔だったからだ。それも、ここに来る前に見たばかりの。

「多聞……？」

俺は同時に思い出した。とういか、どうしてもっと早くに思い出さなかったのが不思議でしようがない。キツネのような面をした、愛想だけはいい椅子屋の店主——あおやぎたもん青柳多聞。

昔、月並町に住んでいて、一月ほど前に戻ってきたとあの男は話していた。そして起こった夏休みの事件。次にジイさんが倒れて、そして今度はあきちゃんが――。

ただの偶然と思うにはあまりにも出来すぎたタイミングに、俺は今度こそみずずさんの手を振り払い、家を飛び出して車を発進させていた。

魔法使いなんていない(4)

家に帰るとすぐに私服に着替えてから病院へ向かった。おジイが目覚ますまで、毎日お見舞いに行こうって決めたんだ。そんなことをしても意味はないのかもしれない。だけど、なにもせずにいることのほうが私にはつらかった。

それに、もしかしたら吏一君にも会えるかもしれない。今日はおジイのパソコンを調べに行くと言っていたから、何かわかったことを教えてくれるかもしれないし。そんな期待を胸に、引き開けた病室の扉。その向こう側に、先客がいた。

うつろ姿は一瞬、吏一君かと思った。よく見れば吏一君よりも背が低めだし、服装の雰囲気も体つきもちがう。私の目が自分の都合のいいように見せたただけだ。

おジイのベッドのすぐ脇に立ったままで、先客は扉の音に気づき振り返る。糸のように細い目が私を見つめた。あれ、このひと……。鋭い糸目は、しなりの良い弓のように笑みの形に変わって、

「もしかして、あきちゃん？ 久しぶり」

私のよく知るなつかしい声で、名前を呼ぶ。

「タモンおにいちちゃん！」

病室だというのに大きな声を出してしまっただけ、私は慌てて手のひらで口元を押さえる。

だってだって、本当にびっくりしたんだもん。だけど、それ以上にうれしかった。駆け寄って、小さなころにみたいに抱きつくことはさすがにできなかったけど、扉を閉めて近くまで行くとタモンおにいちちゃんはやさしく頭を撫でてくれる。「大きくなったな」なんておじさんみたいなのを言う。

「だってもう高校生だよ。一体いつ戻ってきたの？ あ、もしかしておジイのことを聞いて……？ 今どこに住んでるの？」

私の矢継ぎ早の質問にタモンおにいちちゃんはくすりと笑ってひと

つひとつ答えた。

「先月帰ってきたんだ。今は町の北側のほうに住んでる。ジイさんとはしばらく連絡とってなかったから……まさかこんなことになってるなんて知らなかったよ。あきちゃんとも、十年ぶりくらい？」

「うそ、そんなに経ってないよ！」

怒ってみたけど、実際それくらい経っているのかもしれない。いま目の前にあるタモンおにいちゃんの顔は、記憶のなかにあるのとはやっぱりちよつと違ってる。だけど表情は変わらない。小さいころに私やお姉ちゃんとたくさん遊んでくれたやさしいお兄ちゃん。

そして、私の初恋のひと。私がまだ小学生のころに突然引越していなくなっちゃったおにいちゃん。海の方この遠い国に行ったんだよ、っておジイが教えてくれたとき、私は泣いたつけ。

「タモンおにいちゃん、ほんといつの間にかいなくなってたんだもん」「ごめん。あきちゃんの泣き顔を見たら、後ろ髪を引かれるかなって思ってたんだよ」

「うそばかり！ どうせ見つかったらめんどくさいなーって思ってたんだ」

「そんなことないよ」

タモンおにいちゃんはちつとも真実味のない顔で笑いながら否定する。そんなことあるんだ。しょうがないよね。あのころの私は彼のことが大好きで「おにいちゃんのお嫁さんになる！」って言うって鬱陶しく付きまとってたから。

「なつかしいな。綾ちゃんは元気？」

「元気だよ。たぶん。お姉ちゃんは大学入ってから一人暮らししてるから」

直接会って話をしたわけじゃないけど、お母さんの話を聞くかぎり元気そうだったから、うそは言ってない。タモンおにいちゃんのなかではきつと、私とお姉ちゃんは今でも仲のいい姉弟なんだ。その思い出を無理にこわしたくはなかった。

「そっか。もう、町にはいないんだね。また昔みたいにジイさんと

君たち姉弟とご飯でも食べれたらって思ったんだけど、残念だな。知り合いはみんな町を出てしまってるから、一人暮らしには慣れててもけっこうさみしいもんだよ」

そう言つて、タモンおにいちちゃんはほんの少し悲しそうに目を伏せる。

「おジイが目を覚ましたら、また一緒にご飯食べたいね」

口に出してみると、それはひどく空虚な夢物語のように思えた。

おジイが目を覚ましたら……それって一体いつ？

自分で提案しておきながら、ベッドの上で静かに呼吸をくり返すだけのおジイを見て途方に暮れる。私やみずさんがいくら話しかけても、タモンおにいちちゃんが海外から戻ってきてもおジイの目が開かれることはない。

一体どうすれば、おジイは目を覚ましてくれるんだろう。

「大丈夫だよ。これくらいでくたばるようなジイさんじゃないだろう？」

私の不安顔、読みとったタモンおにいちちゃんの手が、ぼんつてやさしく頭を撫でる。もう小学生じゃないんだけだな。そう思ったけど、今は私も弱ってるからって理由を付けて、子供あつかいにありがたく甘えさせてもらうことにした。

途中まで一緒に帰りながら、タモンおにいちちゃんは外国で暮らしていた間の話をたくさん聞かせてくれた。私の知らない世界の話。海外どこるか県外にだって修学旅行以外で行ったことのない私は、月並町とその周辺の本当にせまい世界で生きているんだなあって。

私はこの町が好きだからほかの場所に住みたいとはあまり思わないけど、いつかどこか遠くを旅してみたいという願望がないわけじゃない。旅行記やテレビの旅番組を見るたびそういう気分になるのは、何も私だけに限ったことじゃないだろう。知っている人の旅話ならばなおさら。

タモンおにいちちゃんは今、椅子屋を経営してるんだって。今度遊びにおいでって、もらったシヨップカードを見て、私は初めてタモ

ンおにいちやんの名前の書き方を知った。多くを聞くと書いて、たもん。青柳多聞。

夜になつてから、吏一君にメールをした。おジイの家に行つて、何かわかつたかなつて思つて。だけどメールは返つてこなかつた。バイト中なのかもしれない。でもね、いつもなら手が空いたときに返事をくれるから、二時間もたたないうちに返ってくるんだよ。

日付が変わるまで待つてみたけど、結局、吏一君から連絡はこなかつた。

『おはよ。昨日はごめん。忙しすぎて返事できなかった。』

残念ながらジイさんのパソコンからは何にも出てこなかつた。でも、俺が絶対なんとかするから、あきちゃんは安心してて。

昨日ジイさんの見舞い行つた？

なにか変わったことはなかつた？』

吏一君からのメールだ！ 眠っているあいだに返事がきていたらしい。ケータイのアラームを止めたそのままの指で中身を開いて確認する。送信時間は午前四時。そんな時間までお仕事だったんだ。

『おはよー&遅くまでお疲れさまー！』

忙しいときにメールしちゃつてこつちこそごめんね（<―>）
吏一君もムリして倒れたりしちゃダメだよ（；；；）

きのうも行つてきたよー。おジイのようすは特に変化なしでした←

『↑

たたたたつと片手の親指だけで文字を打って送信を押したあとでふと思い出したのは、多聞お兄ちゃんに会ったこと。そういえばあれも変わったといえは変わったことだった。だけどすでにメールは送信されました、と告げたあとで、もう一度送りなおすようなことでもないし、吏一君は多聞お兄ちゃんのこと知らないし。

すこしだけ待ってみたけど、吏一君からの返事はなし。きつとまだ寝てるんだろう。私は諦めて携帯電話とのにらめっこをやめた。

いつもどおりの一日がはじまる。休み明けテストが終わって通常授業の時間割になれば、いつまでも夏休みの延長気分ではいられない。

日本史の授業がない分、一日は余計に長く感じられた。最後のホームルームの時間は担任の佐々倉先生が教壇に立ってたけど、それもすぐに学級委員にバトンタッチして、「文化祭の出し物を決めます」って。

私はこんなことをしている場合なんだろうか。私がこうやって一日のほとんどを学校生活に費やしてる最中も、吏一君やみすずさんはおジイのために動いてる。

今回だけの話じゃない。二人はもうずっと前から、おジイの組織するJYMの一員として、困った人を助けるために魔法使いの力を使っている。

じゃあ、私は？ 私だって魔法使いなのに。私はなんにもしていない。セーラー服を着ればできることはたくさんあるのに。なんにもできないわけじゃないのに。私だけ、のんびり学校生活を送っていていいのかな。ほかにもっとできることがあるんじゃないかな。文化祭なんてやってる場合なのかな。正直なところ、お祭り気分になんてどうやったってなれないよ。

「——どこにも手をあげないやつは余つてるところに入れるということ。まとめると、うちのクラスの出し物は執事&メイド喫茶で決定。執事係のリーダーは木崎な。メイドのほうは樋川がリーダー、

と」

ほら、文化祭の出し物決めなんて、私が考え事をしているあいだに勝手に決まっていくな。学級委員長の三目善幸はいつも手際よく話を進めてくれるので、この手の話し合いで揉めることはほとんどないと言っている。

「ねえ、女子のメイド係、ひとり少ないんだけどー」

目の前の席の女子が勢いよく片手をあげる。樋川だ。こういうときにも三目学級委員長はそつなく対応してしまうのだ。

「大丈夫、さつきどこにも手えあげなかったやつが……宮司がいるから」

そんな敏腕学級委員長に名前を呼ばれた気がして、ハッと顔をあげる。黒板前で真面目ぶって頷く三目は私と目を合わせた瞬間、不敵に笑った。

「よろしくな、メイド役」

うちのクラスでこういう話し合いが滞りなくホームルームの時間内に終わるのは、三目がいるからだ。つまり、自分がうらまれることを恐れず、多少強引に話を前に進める役割を担っているからだ。

クラスメートから笑いと拍手が沸き起こるなか、冗談じゃない！と私が反論するまえに、ホームルームの終了を知らせるチャイムが鳴った。「空気読めよ」と三目が無言で送ってくる合図を、ギリッと奥歯でかみ砕く。

「宮司おいしーじゃん！」

「だったらお前がやれよー！」

「やーだよー、俺には執事っていう役目があるもんね。大丈夫、何かあったらサポートするって！」

「お前のサポートなんか当てになるかつ」

ニヤついた顔で振り返る木崎に反論してみたものの、すでにクラスメートの半分はこの話題に興味を失っている様子だ。チャイムが鳴ったんだから早く帰らせろよ、という空気が教室内に漂っているように感じるのは、決して私の気のせいではないだろう。こうなっ

たら選択肢は「大人しく引き下がる」の一択だ。

「いーじゃん、宮司ならいけるって」

なにがいけるんだろ。樋川にダメ押しされて逃げ場をなくした私は、せめて、木崎と樋川の示し合わせたようなグッジョブサインを思いっきり睨みつけてやった。例によって長い前髪越しなので効果があつたかどうかはわからなかったけど。

メイド役じゃなくて、そうじゃなくて、私にもなにかできることがある気がするんだ。おジイのために、なにか。眠っているおジイを起こすことはできなくても、手助けくらいはできるんじゃないかな。

吏一君は「安心してて」と言っていたけど、やっぱり私もなにかしたい。吏一君ひとりだと心配だとか任せておけないとかじゃないよ。

ただ、私がそばにいて、吏一君のためにできることがあるんじゃないかなって。間接的に、おジイを目覚めさせるお手伝いくらいはできるんじゃないかなって。そうだいいな。

よし、思い立ったが吉日。

帰り道を歩きながら、携帯電話で吏一君の電話番号を呼びだす。応答を待つあいだ、なんて切りだそうか考えて、考えて、考えて、鳴り続ける呼び出し音がいつまでもやまないの、一度受話器を置いた。

バイト中、かな。平日の夕方ならそれほど混んではないはずだけど。道端で信号待ちをしながら、しばらく携帯電話とにらめっこをしていたが、着信履歴を見てかけ直してくれるかな、なんて淡い期待は無駄だったようだ。せっかく盛り上がっていた気分が再び沈んでしまう。

バイト先に行ってみようか。でも、本当にメールも電話もできないくらいに忙しくて大変なのかもしれない。

また、夜にかけてみよう。信号が青に変わると同時に、気持ちも切り替えて歩き出す。

だけど夜になっても、吏一君からの応答はなかった。きたのはメール一通だけ。

『ごめん。今ちよつと電話できない。

なにかあつた？

メールでもいい？』

『そつか、忙しいところごめんねm（――）m
なにか手伝えることないかなって思つてメールしてみた！』

『ありがと。でも今は大丈夫。また連絡するよ』

『うん、わかつたよ（^^）また手伝えることがあつたらいつでも
言つてね！

おやすみ
』

『おやすみ
』

たつたひらがな四文字のあいさつを見つめて、数十秒。うーん。
どうしてだろう、この言い様のない違和感。

仮にだよ。もし、私が吏一君の彼女だったら、浮気をうたがうれ
ベルのそつけなさかもしれない。幸いにも私は彼女でもなんでもな
いんだけど、それでも変だなって思つちゃう。

なにが変なのかはよくわからないけど。

吏一君は、嘘がつけない人だ。なにか大変なことが起こっている
なら、きちんと状況を説明してくれる人だ――と思う。

そうしないってことは、私には言いたくないことなのかな。もし
くは、言えないことなのかもしれない。

おやすみってメールのやりとりを終わらせる言葉を一度送ってし
まったけど、やっぱり気になって、もう一度だけ送信。

『いつなら電話かけても平気？
どうしても、声を聞いてたしかめておきたいの』

もしかして——そんなことは考えたくないけど——おジイのメールがおジイの手で送られたものではない可能性があったように、吏一君も、吏一君じゃないかもしれない。なんてのは私の考えすぎかな。そうだといいんだけど。

お願い。早くメールの返事をちょうだい。電話で声を聞かせて。吏一君がほんものだってことを、たしかめさせて。そうしたら、少しは安心して眠れるから。

「うわー宮司ひつどい顔。せつかくのカワイー顔がだいなし！ 徹夜でもしたのー？」

席に着くなり振り返った樋川がどん引きするほどに、今朝の私の顔はひどかったらしい。自覚はあったんだよ。だけどどうせ前髪で目の下のクマは隠れてるんだから大丈夫、と思ったのは甘かったよ。うだ。

「そんなにひどい？」

「ってか、顔色悪い。保健室行ってきたら？」

「大丈夫。ただの寝不足だから」

「ほんと？　だったら放課後にメイド服の採寸するからちよつと残っててよ」

「やっぱり気分悪いから早く帰りたい」

「えー？」

「宮司、やっぱいいや？」

樋川の高くて大きな声が聞こえたのだろう。離れた席からわざわざ歩いてこちらに向かってきたのは、三目だ。私をはめた張本人。
「いやに決まってるよ」

「そうか……じゃあしょうがないか。学級委員の俺が責任をとってメイド役か……誰も見たくないだろうな、身長一八〇センチの大男のメイド姿なんて。衣裳係もサイズ調整が大変だろうなあ。なににより俺には学級委員の仕事もあるし、給仕にあまり出られないとほかのメイドや執事に迷惑をかけてしまうかも。全体の指揮や生徒会や先生との連絡役やシフトの調整やもろの学級委員の仕事を宮司に任せても、いいかな？ もちろんメイド係を引き受けてくれたほうが俺は大助かりなんだけどね」

三目は真面目な顔をして懇々と説く。そう、こういう交渉をしてくるやつなんだ。メイドの仕事と学級委員の仕事。俺へ選択肢を与えたように見せて、実際のところ選択肢などないも同然。いや、そもそもホームルームで手をあげなかった私が悪いんだけど。メイド係をやりたくないとか当日は文化系クラブのほうで忙しいって人は最初からきちんと裏方の料理係や当日までの看板係や衣装係に立候補していたのだ。話し合いに参加しなかった私が悪い。三目ばかりを責めるわけにはいかなかった。

「私も三目のメイドよりは宮司がいいなー。ぜったいかわいいと思う」

樋川はちよつと黙ってて。

「……メイド、やるから……たのむから、人がこない時間帯にして」
「ありがとう！ 恩に着るよ、宮司」

さわやかに握手を求められた私はその手をとることしかできなかった。

メイド役を完全に引き受けてしまったショックと、吏一君から連絡がこない寂しさと、おジイのことが心配なのと、自分のどうしようもない気持ちと、昨夜ほとんど眠れなかった分の眠気と戦いながら散々な一日の半分が終わるころ、私はみずさんに電話をした。思い出したんだ。みずずさんも吏一君とおジイの家に行くつて聞いてたことを。昼休みの校舎裏の一角はそだけひっそりと静まり返っていて、呼び出し音がやけに大きく響く。

『もしもし?』

ほどなく、みずずさんのやわらかい声——本物のみずずさんの声——が聞こえてほつとした。みずずさんにまで連絡がとれなくなったら、私もうどうしたらいいのかわからないよ。

「今朝から吏一君と連絡がとれないの。なにか知らない?」

『本当に? 変ねえ……』

「本当だよ。昨日までメールは返ってきてたけど様子が変わだし、電話しても出ないしかけ直してもくれないし、吏一君までおジイみたいにニセモノだったらどうしようって……っ」

口に出してしまったらそれが本当のことのように思えて、溜めこんでいた不安が一気にせり上がってくる。ぐつと堪えることができるのは、ここが学校だったからだ。

『あきちゃん、落ち着こう。新沼君は大丈夫よ。彼は彼なりに考えがあつて動いてるの。今はまだあきちゃんには話せないけど……』

いつもならばきちんと説明してくれるはずのみずずさんも、今日は妙に歯切れが悪い。

「……どうということ?」

『メールなら返してくれるんでしょう? あの子も誤魔化し方が下手な子ね。電話なんてしたらあきちゃんの剣幕に押されて、うつかり喋ってしまいそうだもの』

「だったら! じゃあ……吏一君は無事なの? 誤魔化すってなにを? どうして私には内緒なの?」

声が大きくなりそうな口元を手のひらで隠すようにして尋ねたけれど、みずずさんは明確な答えを教えてはくれなかった。ただ、最後の質問だけにはきっぱりと、

『決まってるでしょう。あきちゃんに心配かけたくないからよ』

そんな風に言われたら、どうしたらいいのかわからなくなる。心配なんてとつくにしているのに、私をこれ以上不安にさせるようなことを吏一君はしてるの?

「……吏一君は、大丈夫なの?」

『大丈夫よ。信じてあげて』

ね、とやさしく念を押されて、また、ゆらぐ。結局私は、吏一君がなんとかしてくれるのを、ただ黙って待つことしかできないんだろうか。

『ごめんね。あきちゃん……』

「みすずさん——！」

通話が切られそうな気配がして、あわてて引き止める。このままでいいわけがない。ただの自己満足でわがままなのかもしれないけど、それでも、

「みすずさんお願い！ 私に何かできることって本当はないのかな。私も、おジイのときみたいな気持ちになるのはいやだよ……私だけ何も知らずにいるのは、いやだ。みすずさんの知ってることを教えてほしいの」

仲間外れにされた子供が拗ねてるだけと思われてもしょうがないけど、聞きわけのいい子になって、なにもできずに最後に後悔するくらいなら駄々っ子の方がずっとマシだ。

長い沈黙があった。もうすぐ昼休みが終わってしまう。

「みすずさんが何も教えてくれなくても私は一人で吏一君やおジイのためにできることを探すから一緒だよ。もし、それがみすずさんたちの迷惑になるんだったら、ちゃんと納得できるように教えてほしい」

私も三目のこと言えない。我ながら卑怯な脅しだと思う。みすずさんのやさしさに付け込もうとしている。

携帯電話の向こう側で小さくため息。いつも頼もしくて、笑顔で私の不安を吹き飛ばしてくれるはずのみすずさんの声は、酷く疲れているようだった。

『あきちゃん、ごめんね。本当は私にもどうしたらいいのかわからないの……新沼君は私にも、全部は教えてくれなくて。彼はひとりで何とかしようとしてるみたい』

そうして、みすずさんは教えてくれた。あの日、何があったのか。

みすずさんの知る限りのことを。

魔法使いなんていない(5)

ぼんやりとした視界にまず入ってきたのは、見慣れないむきだしのコンクリートの天井だった。仰向けに転がっていた身を起こそうとすると、鳩尾と背中が悲鳴を上げる。くっそ、思いっきり殴る蹴るしやがって。

硬く冷たい床に手をついてようやく体を起こして辺りを見回すと、十畳程度のなんてことはない部屋だった。家具らしきものは一つもない。フローリングの床に俺が一人で転がっていただけだ。

ベランダへと続く窓から強い西日が射しこんでいる。腕時計に目を落とし、時間を確認する。午後四時すぎ——ジイさんの家を出てから一時間も経っていない。

ポケットに入れていたスマートフォンの存在を確認して少し安心した。通信手段をうばわれてないってことは、俺はべつに誘拐されたわけではないらしい。成人男をつかまえて誘拐というのも変な話だが、意識を奪われている間に勝手にこんな場所に運ばれたという一連の流れだけを見れば立派な拉致である。俺んち身代金払えるような家じゃねえんだけどな。

幸か不幸か、身代金目的でないことだけは確かだ。なぜわかるかって。そりゃ、こんなことをした張本人がそう言ってたからだ。青柳の目的は金じゃない。俺自身だってな。

順を追って話そうか。俺がみすすさんの制止を聞かずにジイさんの家を飛び出して、病院へと車を走らせているところからだ。

住宅街の一本道を制限速度オーバーで走り抜ける途中、着信音が鳴った。あきちゃんかもしれない、と画面を確認しようとして、使わない灰皿に固定したスマートフォンへと手を伸ばす。一瞬、前方から目を話した隙に、左後方から出てきたバイクが目の前でUター

ン。とつさに踏んだブレーキの音が目をつんざく。バイクのブレーキ音も混ざっていたのかもしれない。車のナンバープレートとバイクのタイヤが接触するスレスレのところで、

「……つぶね」

危うく事故になってしまふところだ。なんて馬鹿なことをするバイク野郎だとフロントガラス越しに乗り手を確認すると、ちょうどフルフェイスのヘルメットを脱いだ男と目が合った。男はそのままバイクを降りて、運転席の窓ガラスを叩く。

俺はそいつの顔を知っていた。痩せた体にくすんだ金髪頭、眼光の強い目は昔から変わらない。

「車から降りろ、吏一」

「リョウ、さん……なんの真似っすか。俺いま急いでるんで」

窓を開けたのが最初の失敗だったのだろう。窓の隙間から手をつっこんだ浅井リョウは、ロックを勝手に解除してドアを開く。降りろ、と同じことを二度は言わずに、顎でしゃくって促した。状況はまったく飲みこめないが、こういうときのリョウさんには逆らわない方がいいと知っていたから、俺は渋々と――念のため、スマホをズボンの後ろポケットに突っ込んでから――外に出る。

「何の用ですか」

俺が車から降りた途端、リョウさんはやりと機嫌のいい笑みを見せる。これはあまりよくない兆候だ。リョウさんは面倒見のいい先輩だったが、たまに有無を言わせぬ無茶振りをしてることがある。案の定、

「ちよつと協力してくんね？ お前を必要としてる人がいるんだわ」

「いや、ケンカはもう何年もやってないですし、急いでるんでまた今度ってことで」

とにかく逃げようと運転席のドアに手をかけようとした時だ。

「ちげーよ、吏一。これはビジネスの話だぜ。青柳さんがお前をほしがってる」

リョウさんの口から思わぬ名前が飛び出して、俺は困惑する。逃

げる手を止めて振り返ると、彼はさらにたたみ掛けるように言った。
「あの写真見ただろ？ 交渉しようって言ってたんだぜ」

写真。泣いているあきちゃんの写真。ジイさんのパソコンに送られてきたウイルス付きの添付写真。

「デメエがあきちゃんを……ッ!？」

胸ぐらをつかもうと繰り出した手よりも、リョウさんの足のほうが早かった。腹部に硬いブーツの爪先を抉るようにぶち込まれて、痛みよりもシヨツクに声が出なくなる。

「暴力はよくないぜ、吏一」

どっちが、と文句を言う前に今度は背中に重い一撃を食らい、俺の意識はそこで途切れた。

最初は脅して大人しくさせて連れてくるつもりだったのかもしれない。そんな回りくどい真似、リョウさんはきつと途中で面倒くさくなったのだろう。喧嘩っ早い先輩の思考は容易に予想できる。

あきちゃんは無事だろうか。青柳多聞が彼女に手を出すなら——
思い出す狐のような面に沸き上がる腹立たしさをぶつけるように、ぐつと拳に力を入れて部屋の白い壁を殴りつけた。

ともかく、彼女を脅しの材料にしてくるなら、俺が大人しくしているかぎりはきつと無事だろう。リョウさんは無茶苦茶する人だが、理に適わない事はたぶんしない。

それよりも今は、スマホの着信履歴に残る名前のほうが気になった。車を運転しているときに鳴った電話だ。残念ながら発信元はあきちゃんではなかったが、このタイミングで連絡があることを不審に思う程度には関係者だ。リョウさんと青柳家がつながっているのなら彼女もきつと、無関係ではないのだろう。

玄関につながる扉の向こうに誰もいないのを確認してから、電話をかけ直す。今のうちに部屋から逃げ出す手もあったが、どうせ今ここから逃げてもリョウさんはまた来るだろうし、俺が逃げること

であきちゃんをわざわざ危険にさらすこともない。呼び出しコールは一回でつながった。

『もしもし吏一君！？ 大丈夫！？』

出るなりものすごい勢いで安否を確認する声は、彰子さんのものだった。

「一応大丈夫ですけど、なんで？ 彰子さん何か知ってんの？」

『一応？ 大丈夫ならいいんだけどね、うちの兄が吏一君と、あのセーラー服の子のこと探ってるみたいだったから、ちょっと気になって。最初は佐々倉絡みかと思ったんだけどそうじゃないみたいなのよね。青柳家ってわかる？ 三島はその分家に当たるんだけど、本家の指示で動いてるみたいで。私も詳しいことは分からないけど、変なことになる前に一応知らせておこうと思って』

なるほど。そういうことか。確かに「三島」の名前は里中さんの見せてくれた系図のなかにもあった。

「ありがとう、彰子さん」

でも、もう遅いみたいだ。

玄関のほうからドアの開く音が聞こえた。足音は二つ。ほどなく俺のいる部屋の扉が開いて、一度見たら忘れられないスキンヘッドがその姿を現す。彰子さん曰く金魚のフンである浅井リヨウを後ろに従えて。

「悪いが電話を切ってくれるか？」

スキンヘッド、もとい彰子さんの兄貴は意外にも紳士的な態度で俺に命じた。切らなければ後ろに控えるリヨウさんが迷わず飛び出してきそうではあったが。言われた通りにしてスマホを後ろポケットにねじ込む。彰子さんに今の三島兄の声が聞こえていれば、勘の良い彼女のことだ。何が起こったか察してくれるだろう。

「リヨウが手荒な事をしたようですまなかったな。こっちとしてはきちんと話をした上で納得してもらってから着いてきてもらうつもりだったんだが」

「脅して納得させんなら同じことだろ」

あきちゃんやジイさんを盾にとつておいて、何が話をした上で、だ。殴られて気を失っているうちに拉致されるのと何が違うんだ。俺の反論に、三島兄は冷静だった。

「そう取ってもらってもかまわない。――挨拶が遅れたが、俺は三島大貴。^{しまたいき}青柳の代理で話をさせてもらう。正式な仕事の依頼だ。そう悪い話ではないと思うがな。堂本の長老にとつても、君自身にとつても」

「だったらなんでジイさんをあんな目に遭わせんだ？」

「あの人はこちらの話を一切聞かずに妨害するからだ。本当は、やろうとしていることは非常に似ている。ただ、こちらは月並町のすべての魔法使いのためにビジネス化しようとしているだけだつてのに、どうも金儲けが気に入らないらしい」

仕方がなかった、と言う三島大貴の表情はサングラスをかけているせいで読みとりにくかったが、大袈裟に眉を顰めたことだけはわかった。

「堂本の長老に直接手をくだしたのは俺ではないが、君の協力が確認できればすぐに目を覚ますと聞いている」

俺が納得のいかない顔をしていたからだろう。三島はそう付け加えると、それで、と本題に入ろうとする。

「待てよ。青柳家がジイさんを眠らせるように指示したのは間違いないんだな。写真は？ ジイさんのところに送られてきた写真は誰が撮ったんだ？」

サングラスの向こう側の三島の表情はやはり読めない。首を横に振って肩をすくめただけで。

「俺は知らない。べつの者が関与しているということしか聞かされていない。悪いな」

淀みのない返答に、嘘をついたり隠しだてをしている様子はなかった。そもそも今さら嘘をつくメリットがあるとも思えない。あきちゃんを泣かしたやつはまた別にいるってことか。

「話を進めさせてもらうぞ。君には、アオヤギグループが立ちあげ

る月並町雇用活性化事業に協力してほしい。早い話が魔法使いの派遣会社だ。魔法使いであれば誰でも登録して働ける体制をつくる。

それぞれの力を最大限に活かせる場面で、最大限に使うことができる。もちろん、力量と仕事内容に見合った報酬を出す。ボランティアで爆破予告現場に行くなんてバカな真似はもうしなくてもいい」

嫌味を含んだ言葉に、頭に血がのぼりかける。しばらく黙って聞いていようと思っていたのだが、つい口が出てしまう。

「やっぱりあれもてめえらの仕掛けかよ」

「そうだ。君の魔法が本物かどうか確かめさせてもらうために打った作戦だ。君のことは前から目をつけてたんだが、どういう力を使うのか確証はなかったからな。魔法使いを見つけられる力がある君なら、月並町内のすべての魔法使いを見つけ出してスカウトするとができる」

「無理だな。いつも見えるわけじゃねえし、人が多すぎると見えにくいし、ある程度距離が近くねえと見えねえし。町ん中いちいち探して歩けてのかよ。面倒くせえ」

「そうか？ 何キロ離れたところにいても大勢の一般人の中から数人の魔法使いを見つけ出せるようになれば問題ないだろう。すぐにそうなる」

吐き捨てるように言った言葉を、三島はいとも簡単に否定してみせる。確かな自信とともに。

「信じられないか？ 青柳はそういう力を持っている。魔法の力を最大限に引き出す力を。誰の魔法でも、だ。『それぞれの力を最大限に活かせる場面で、最大限に使うことができる』と言ったのは正しくそのままでの意味だ」

魔法の力を増幅させる。言葉として理解はできても、具体的に力を使っている場面は想像しにくかった。あきちゃんの力を最大限に引き出したら、あれよりさらに強くなるってことか？

「賛同する魔法使いはもう何人か集まっている。彼らだけで事業を立ち上げてもいいが、どうせならば使える力が多いほうがいいだろ

う。人材集めに協力してくれないか。もちろん、学生の間は学業に専念してもらってかまわない。大学卒業後はアオヤギグループの傘下企業に正社員として採用する用意もある」

この就職難の時代に地元大企業への入社切符までつけようというわけだ。なるほど。悪くはない。もとよりジイさんとあきちゃんを人質にとられている身だ。選択権はないのだろう。何より、これまで大して役に立たないと思ってきた自分の魔法を活かす場所がそこに用意されている。俺自身のメリットも、大義名分も、わざわざ用意してくれちゃって有り難いことこの上ないな、まったく。

だけどな、

「断る」

きつぱりと言い切る返答に、三島の眉毛が大きく動いた。

「つつても断らせてくれないんだろうな。あきちゃんとジイさんのことがあるもんな」

「わかってるじゃないか」

「どうせほかの魔法使いにも選択肢なんかハナから与えないつもりだろ？ 派遣会社だなんて言っというて、俺の力で魔法使い探し出して、そいつの力があんならにとつて利用価値が高けりや今みたいに説得するんだろ？ 無理矢理に登録させて働かせるんだろ？ そいつは魔法使いを駒として使うための管理システムだ。ジイさんとやろうとしていることは同じつつつてたけどな、ジイさんが目指してたのはそんなじゃねえよ！」

ジイさんならば決して彼らの意見に賛同しないだろう。金儲けが気にくわないとかそんな理由じゃない。理念が、決定的に違うのだ。——魔法使いはひっそりと暮らしていくべきだ。しかしわれわれの力が誰かの役に立つのなら、その力の行使を決して惜しみはしない。

JYMにはジイさんの理念があった。

魔法の力は決して万能ではない。マイナスに働くことだって少ない。たとえば今すぐに魔法が使えなくなっただって俺は困らない

し、むしろ大歓迎だ（運転中にサングラスをかけられるようになるし、コンタクトを入れなくても眼鏡をかければ済むようになる）。力があるせいで、困ったり悩んだりする人だっている。佐々倉先生だってそうだ。彼は自分が魔法使いだってことを知らないが、対処に悩んでいた。そういう魔法使いを知っているから、ジイさんはYMを立ち上げたんだ。誰かのために力を使えるなら、魔法使いでいることも悪くない、とみんなが思えるように。里中さんのように、力を持ってしまった子供たちが上手く魔法と付き合えるようにサポートを買って出る人もいる。俺も、自分のできる範囲で——あきちゃんの恋を手伝ったりとかそんな程度だけだな——魔法を使ってきた。

「せっかく手に入れた力だ。どうせなら大きなことに使いたいと思わないのか？」

「力を使いたい奴ばかりじゃないだろ。あんたはなりたくて魔法使いになったのか？」

三島兄は何も言い返してこなかった。相変わらずサングラスで隠れた両目からは何の感情も読みとれない。ただ、リョウさんが遅々として進まない話し合いに苛立っていることは非常にわかりやすかった。立ったままで貧乏ゆすりとは器用なことだ。

この人はたぶん二、三発殴ってさっさと言うことをきかせればいいとか思ってるんだろうな。殴られるのはご免なので、俺は話を先に進めることにした。こちらが何を言ってもどうせ俺の力を利用したいんだろう。あちらさんは。

「いいよ、もう。三島さんは代理人なんだろう？俺が多聞と直接話をつける」

こんな周りにくいことをしなくてもいいじゃないか。本人と話して説得できるかどうかはわからないが、俺は賛同しないってことをバシッと言ってやる。それでも向こうがあきちゃんやジイさんに何かするっていうならその時は……そこまでは正直まだ考えてねえけど。

てつきりダメだと言われるのかと思ったが、二人とも妙な表情のまま返す言葉を忘れたように、口をぽかんと開けて固まっている。驚いて、声が出ないと言った風だ。

「……多聞だと？ 多聞ってまさか……吏一っお前、青柳多聞を知ってんのか！？」

リヨウさんがこの部屋に入って初めて口を開いた。信じられない、と言いたげに。どういうことだと尋ねかけた俺よりも先にスキンヘッドが口を割りこませた。

「多聞は関係ない。お前が協力すればそれでいい」

「え、でも多聞がいるなら話が変わってくるんじゃないツスカ？」
「いいから黙ってる！」

スキンヘッドの一喝に、リヨウさんがしゅんと大人しくなる。なんだ？ どういう意味だ、このやりとり。こいつらのボスは青柳多聞ではないのか。

完成間近だと思っていたジグソーパズルを途中で引っ繰り返された気分だ。わかったつもりでいた謎が、一回転して戻ってきた。もしかして俺は、何か大変な読み間違えをしてるんじゃないのか。

それ以降、俺が何を言っても、青柳多聞に関する質問は三島にすべて無視された。

「今度俺たちの雇い主に会わせよう。実際に力を開放されてみればきっと気が変わる」

次の約束を勝手に取りつけられてから、俺は解放された。

外に出てみると、そこは町を囲む山の中腹に建設されたばかりのマンションだった。当然ながら青柳のグループ会社が不動産業として手掛けている物件だ。やたらと広い駐車場に停められていた俺の車は、きつとりリヨウさんが運んだのだらう。駐車の仕事が乱暴だったから絶対そうだ。

青柳多聞に会わなければ。

その前に里中さんに連絡するのが先か（きつと心配している）。彰子さんにももう一度電話するべきだらう（三島大貴について何か

聞けるかもしれない）。

あきちゃんには――泣きそうな声で俺に助けを求めてきた彼女の顔を思い出して、なにも告げないことに決めた。

魔法使いなんていない(6)

秋の雨は重たい。ビニール傘を差して歩きながら、私はまとわりつく憂鬱さを振り払うように顔を上げた。見上げた先の空は暗い。長く降り続く六月の雨がレースのカーテンならば、この時期の雨は毛布だ。どさつと落ちてきて視界を塞いだかと思えば、毛布をはぎ取られると一気に寒さが襲ってくる。雨が降るたび、冬に近づく。

朝から降りだした雨は、天気予報によると夕方まで続くらしい。やっぱり昨日のうちに来ればよかった。学校の昼休憩にみずずさんと電話したあとの午後の授業は、ほとんど頭に入ってこなかった。放課後になると同時に教室を飛び出すことばかり考えていて——だけれど、教室を出ようとしたところを樋川に引き留められて——すっかり忘れてただけれど、放課後はメイド服の採寸があつたんだ。女子の輪のなかでたった一人、居たたまれない思いで採寸を終えたあとに殴り込みに行く元気はさすがにもうなかった。

そう、殴り込み。傘を左肩と首で支えながら、私はポケットから一枚の名刺を取り出す。青柳多聞の経営する椅子屋の住所を確認してほどなく、ひっそりと静まり返った住宅地の真ん中にたたずむ小さな店を見つけた。すでに正午に近い時間だというのに、椅子屋の看板にはCLOSEDと表示されている。

留守だったらどうしよう、と今さら考えても仕方がないので扉をノックしてみる。しばらく待ってみたが返事はなかった。小さな屋根の下にもぐりこんで傘を閉じ、扉を遠慮がちに押して——あ、開いた。

照明の灯っていない店内はひどく暗い。天気が良いければ、奥に中庭の見える大きな窓から光が入ってきていたかもしれないのに。暗い室内に立ち並ぶ椅子だけが私を迎える。扉を閉めると雨音が消えて、ますます静寂が強調された。

「こ、こんにちはー！ 多聞おにいちゃん」

大きな声は店内いっぱいに響いて、すぐに奥のほうで何か物音がした。大股に歩く足音が一つこちらへと近づいてくる。奥のほうから出てきた多聞おにいちゃんは私を見て、すぐに笑って歓迎してくれた。

「あきちゃん、来てくれたの？ 雨酷かっただろう」

「平気だよ。……聞きたいことがあって、来たの」

私の硬い表情に気づいたのだろう。多聞おにいちゃんが「何を？ 急にどうしたの」と尋ねながら私との距離を詰める。私は殴り込み、と言ったけれど本当に殴りに来たわけじゃない。ただ、答えによつては多聞おにいちゃんでも容赦しないよ。

「吏一君はどこにいるの？」

「吏一って、もしかして、新沼吏一のことかい？」

「やっぱり知ってるんだ」

「知り合いだよ。……そんな怖い顔してどうしたんだい？ まるで俺が誘拐でもしたみたいじゃないか」

「知ってるんでしょう？」

私は断定する。多聞おにいちゃんは糸のような目を細めて、肩をすくめてみせた。

みすずさんは順を追って話してくれた。おジイのパソコンがウイルスに感染していたこと。ウイルスを運んだメールには私の写真が添付されていたこと。みすずさんの魔法で、私と多聞おにいちゃんが病室にいるのを見て、多聞お兄ちゃんのことを怪しんだ吏一君が飛び出して行ったこと。すぐにみすずさんも追いかけたけど、車を出すのに手間取って病院に着いたときにはもう誰の姿もなかったこと。数時間後、吏一君からみすずさんにメールが届いた。

「あきちゃんは無事です。」

今回のジイさんの件、俺に任せてくれませんか？

少しの間、心配かけるかもしれませんが俺は大丈夫です。

青柳多聞には話をつけました。彼は一応敵ではないので安心してく

ださい』

電話をかけて詳しいことを聞きだそうとしたけど、吏一君は黙ってた。みずずさんは「私に話せないようなことはやめなさい」って止めたけど、吏一君は頑なだった。これしかないって。

吏一君が言わないのは、話すとみずずさんに反対されるからじゃないかな。反対されるようなこと、しようとしてるんじゃないのかな。

「多聞おにいちちゃんが、吏一君に何か言っただんじゃないの？」

ほとんど決めつけるように私は言った。多聞おにいちちゃんは面白そうに口元を歪めて、

「良くも悪くも素直なやつだな。中途半端に誤魔化すくらいならいっそも思い切った嘘を吐くほうが楽だろうに」

吏一君のことを、そんな風に言ってみせる。

実は、みずずさんも似たようなことを言っていた。吏一君はなんも嘘を言ってない。ただ、意図的に話していないことがある。それはいくら尋ねても教えてくれなかったって。

「それで、どうして俺のところに来たんだい？俺は敵じゃないんだろう」

「じゃあ、誰がおジイに酷いことしたの？俺の写真を送りつけて脅すみたいな真似して！」

得体の知れない『敵』を探すように、私の頭のなかをたくさん人の顔が通り過ぎていく。おジイの安らかな寝顔、眼鏡をかけた吏一君、みずずさん、堂本さん、直登くん、佐々倉先生、美佳ちゃん、大外内さん、多聞おにいちちゃん、三島先生、コウ君、狐面の男――。

私が殴りに行かなきゃいけない相手は、本当は、

「多聞おにいちちゃんは知ってるんじゃないの？」

「知ってるよ」

細い目がたわんで、狐みたいににっこりと笑う。

「でも、あきちゃんには教えない」

「っ！ どうして!？」

「こつちにはこつちの都合があつてね。あきちゃんは吏一の邪魔をしそうだから、教えられない」

「邪魔なんて……っ！」

「足枷といつてもいい。吏一が誰のために動いてるのか、まさかあきちゃん自身がわかつてないなんてことないよな。ジイさんだけのためじゃないよ」

多聞おにいちちゃんは私ができるだけ考えないようにしていたことを、容赦なく目の前に突き付けた。

そうだ。わかつてる。本当はちゃんとわかつてる。吏一君が一人でなんとかしようとしてるのは、私のせいだ。吏一君が私を頼れないのは、私自身が弱点になっちゃってるからなんだ。

コウ君に撮られたあの写真がパソコンにウイルスを運び、おジイをあんな目に遭わせて。今度は、吏一君の足枷になつて。ほかの誰でもない私のせいで吏一君が何かに巻き込まれようとしているなら、私は。

「思い悩むことないよ。結局は、彼が自分で選んで決めたことだ」

多聞おにいちちゃんの声は甘美な響きを持っていた。吏一君の意思を尊重するフリをして、自分が楽になりたいだけの考え方だ。

「吏一君にはほかに選択肢があつたの？」

すこしだけ、考えるような間があつた。

「吏一がもうすこし他人に対して薄情で、もつと自分を大切にすりやつたつたら、ほかの選択肢もあつたかもしれないな」

それつてつまり、ないも同然じゃないか。

多聞おにいちちゃんがどれくらい吏一君のことを知っているのかはわからないけど、吏一君はやさしいから、自分が貧乏くじを引いてなんとかなるんだつたら、そうしちゃうんだ。

「多聞おにいちちゃん、やつぱり私も譲れないよ。吏一君と直接話をする。どこにいるのか教えて。誰がおジイを酷い目に遭わせたのかも。やつぱり青柳家の当主なの？」

多聞おにいちやんが身内をかばっているのなら、その可能性は高いと思っただけ、

「悪いけど……俺は吏一と違って自分が一番大切なんだ。いくらあきちゃんでもこれ以上邪魔をする気なら椅子に縛りつけるよ」

顔はにつこりと愛想よく微笑んでいたけれど、その細い両目は一ミリたりとも楽しげではなかった。多聞おにいちやんは、本気なんだ。

「……吏一君は、どうなるの」

「簡単に言いなりになるほど吏一もバカじゃないさ。もうお帰り」
優しい口調だったが、有無を言わせぬ迫力に押されて、私はもう何も言えなかった。

外に出ると雨足は来たときよりも随分と強くなっていた。重たい足を踏み出す。跳ね上がる水しぶきが容赦なく足下をぬらした。スニーカーも、ズボンの裾ももうぐしゃぐしゃだ。

傘が、重い。次の手を考えなくちゃ。多聞おにいちやんがダメなら、次はどうしたらいい？ 吏一君のために何ができる？ おジイも、吏一君も、みんなが私のところにちゃんと戻ってくるためには、どうしたら――。

考えているのに、重たい毛布をかぶせられたみたいに息苦しくて、いい考えなんて一つも出てこなくて、思考は完全にどん詰まりに行き当たったみたいだ。引き返して新しい道を探さなきゃだけど、そこは最初から一本道だった。多聞おにいちやんのほかに手がかりなんてなかった。水を吸った毛布は重たすぎて、私にはもう打つ手がないよ。

こんなときにおジイや吏一君がいたら、きっと上手く解決方法を見つけてくれるんだろう。私を正しい道に連れて行ってくれるんだろう。大丈夫だよって。私の頭上を覆う毛布もひっぺがして、きちんと前が見えるように、もう一度顔を上げて歩き出せるように。い

つだっておジイが私の背中を押してくれる。手を差し伸べてくれる、吏一君もいる。

おジイがいなくなっちゃったとき、真っ先に会いに行くべき相手は吏一君だと思った。もともとおジイとの共通の知り合いは少ないけど、吏一君の顔が一番に浮かんで。

きっと、吏一君ならなんとかしてくれるんじゃないかって、無意識に頼っていたんじゃないかな。事実、吏一君はちゃんとおジイの居所を突き止めてくれたし、今だってなんとかしようと動いてくれる。

多聞おにいちちゃんの言うように吏一君に任せて、私は大人しく待っていたほうがいいのか。何もしないほうが、いいのか。どうせ一人じゃ何もできないんだから。

考えがどんどん内向きになっていくのはわかってても、残された道はそれしかない気がした。いや、この道は決して新しい道なんかじゃない。どん詰まりの底で、ただ立ち止まって待っているだけだ。誰かがこの行き詰まりの先に、新しい道を作ってくれるのをただ待っている。

それでいいのかな。

でも、それしかできないでしょう？

いくら魔法が使えても、私一人にできることなんて一つもないんだよ。多聞おにいちちゃんの説得すらできなくて、たとえ吏一君の居場所を突き止めたとして、私は一体どうする気なんだろう。足手まといになるだけなんじゃないの？ 吏一君の邪魔になるだけなんじゃないの？ ただ自分がじっとしていられないって、わがままだけじゃないの？

ぷつん、とそこで思考が途切れた。何メートルか前方、透明な傘の向こう側に、見覚えのある顔があつて。

私は慌てて傘を顔の前にかざしたけど、ビニール傘じゃ意味がないことに気づき、ピンで止めていた前髪をおろした。暗くなった視界は、学校でのいつもの私。彰彦のもの。

気づいてほしいのか、気づいてほしくないのか私にはよくわからなかった。ただ、こんなぐしゃぐしゃな気持ちで会うのは嫌だ。きつと酷い顔をしてるだろうから。

それなのに、ゆつくりと歩いて近づいてくる傘の下で顔を上げた彼は私を確かに見て、優しく笑ったんだ。――先生、五メートルも手前で気づくなんて反則です。

「宮司」

先生は、いつもよりもちょっと軽い調子で名前を呼んだ。教室で呼ばれるときは少し違う。

「こんにちは」

軽く挨拶しただけでさよならするものと思ったのに、先生は足を止めた。

「靴、びしょ濡れじゃないか。歩いて帰るのか？」

「……はい」

「宮司の家って駅の向こう側だっけ。車乗せて行こうか？」

「え……いいえ結構です。悪いし」

「遠慮しなくていいよ。どうせもうこっちの用事は終わったから、帰る方向も同じだし。何かほかに用事があるんだったら無理にとは言わないけど」

「いえ、ないです……」

そういつて先生は片手に持った本屋の袋を持ち上げる。少し離れた駐車場を指さしてから、ポケットからキーケースを取り出した。何だかよくわからないままに、私は先生の車の助手席に座っていた。こんなことって、あるんだな。重たい毛布が頭にかぶさったままだからか、自分に起こったことだとは思えないまま、走り出す車の窓から雨の町を眺める。私の家まで、車ならば十分程度の距離だ。すこし前だったらきつと嬉しくて、ドキドキして、どうしたらいいかわからなかっただろうな。

「宮司、どうかした？」

「え？」

「元気がないみたいだから。やっぱりメイドは嫌だったか」

茶化すみたいに先生が言う。メイドは嫌だけど、本気で悩むほど嫌なわけじゃないってこと、わかってるから私も笑って否定する。

「それは、もういいんです。」

「そうか。宮司がおかしかったのはそれよりもっと前からだもんな。夏休み中に何かあった？」

先生の口調はやさしかったけど、酷く痛いところを突かれたように心臓が跳ね上がった。先生はどうしてそういうこと気づくんだろう。ホームルームで上の空だったり、遅刻したり、元気がなかったり、確かに最近の私は私らしくなかったけれど、木崎だってそんなこと突っ込んでほなかった。あいつの場合はそれが楽だから有り難いんだけど。

私がお話を話すのを、先生は待っているみたいだった。ためらいがちに、口を開く。

「……俺一人には、どうすることもできなくて」

言葉にすると情けなさすぎて、視線をゆるゆると膝の上に落とす。膝から下のズボンは水気を吸って色を濃く変えていた。先生は何も言わない。私がさらに続きを話すのを待っているのか、かける言葉を探しているのか。

そんな沈黙に耐えかねた時だった。

「宮司、見て！」

急に、声を弾ませる先生に、思わず私は顔を上げていた。フロントガラスの向こう側は未だ雨が降っていたけれど、もっと向こう側、雨雲の途切れた先、月並町を囲う山の際に、

「あ……虹だ」

小さく、おぼろげに。すぐにまた強くなった雨が霧のようにあたりを覆って、虹は見えなくなってしまった。でもこの調子なら、すぐにこの辺りも雨はあがるだろう。

「虹を見つけるとちよっと得した気分にならない？ 雨が上がったらまた周りを探してみるといいよ。お手軽だからね」

ゲームの裏技でも教えてくれるみたいに言つて、先生は無邪気に笑う。

「あ、はい」

「自分にできないことを知っているのは悪いことじゃないよ」

話の続きを、先生はその穏やかな表情のまま口にした。視線は前方に向けられていたので、私はこっそりとその横顔を盗み見てた。

「無力だと感じることはたくさんある。自分には無理かもしれない、自分になんかできるはずがない。そうかもしれない。だけどそれでも足掻いていたら、ひょんなところから助けてくれる人が現れて、なんとかなるもんだ。一人じゃ無理でもね」

「でも、俺にはそんな人脈、ないです……」

「そうかな。一度、しっかり顔を上げて周りを見てごらん。今まで目に入らなかったものが見えるかもしれない」

今度は素直に「はい」とは言えなかった。そう簡単に見つかるものならば、こんなに悩んではいけないのだから。雨上がりの虹だって、案外見つけるのは難しい。そういうのは、運、なのかな。

「先生も、この間まで悩みごとが——あ、誰にも内緒だよ。あったんだけど、自分にはどうにもできなくて人に助けられた」

先生の話には、思い当ることがあった。たぶん、魔法のことだ。

じゃあ、それを解決できたのは、先生を助けてくれた人は——三島先生の顔が浮かんで、嫌な感情がせり上がってくる。惚気話だったらどうしようかと思っただけど、違った。

「助けてくれた子が、いたんだ。その子はうちの学校の生徒だったけど、先生は残念ながらその子のことを知らなくて、でもその子は先生のことをよく知ってたよ」

「……それは、先生が先生だからじゃ……？ 先生のこと知らない生徒はいない」

「そうかもしれない。でもその子は、俺が自分では気づかないこともきちんと見て評価してくれたんだよ。とてもうれしかったし、自分が知らないところでそういう風に見てくれてた子がいたのは、

とても救われた。きっと、宮司のことも気にかけてくれる人がいるよ。自分では気づかなくても、その人はどこかで宮司の助けになりたいと思ってるかもしれない」

なんて言ったらいいのかわからなくて、俯いた。ドキドキと心臓の音がうるさい。顔が、熱い。どうしよう。こんな不意打ち、困ります。

だって、告白はほかの誰でもない私のためだった。私が伝えたくて伝えただけ。それで満足だった。

先生がどんな風に受け止めるかなんて全然予想してなかった。考えてなかった。心に留めてくれたらうれしいなって思ってたけど……たしかに思ってたけど！

頭のなかがいっぱいいいっぱいで、さっきまでの手詰まり状態の「どうしよう」と今の「どうしよう」は別物。

どうしよう。

私、うれしいんだ。私の気持ちが先生の心にちゃんと届いて、助けになったことが。

俯いた顔はなかなか上げられなかった。

「この辺でいいです。ありがとうございます」

家までもう数十メートルのところで車を止めてもらう。

「雨が止んだね」

先生は空を指差し、そう言うってから車を発進させた。私は思わず虹を探して、辺りをぐるりと見回す。一回転しても虹は見つからない。やっぱりダメか、と上空にやっていた視線を下ろした先に、飛びこんできたもの。

町中ですら今はもう見かけられることはあまりない。あっても使わないから、たぶん気づかないんだ。ずっとそこにあったはずなのに、私は今初めて気がついた。こんなに家のすぐ傍で。ううん、視界のなかには入ってたけど意識してなかったんだ、きっと。

こんなところに、公衆電話があったなんて。

申し訳程度の雨避けに囲われた古ぼけた緑の公衆電話。それが、

見つけてくれた喜びを表現するように、にわかに存在を主張するようになり、けたたましい呼びだし音を鳴らし始めた。

一瞬ビクリとしてから、電話を見詰めたまま固まった。でもこれは、この電話は、私がとらなきゃ！

どうしてか分からないけどそう直感して、恐る恐る側に近づく。

受話器に触れた瞬間に分かった。この電話は、間違いなく私宛てだ。重い受話器を持ち上げ、耳の側に近づける。

「もしもし……？」

「よお、やっと泣きついてきたか」

やさしい憎まれ口が、受話器の向こう側から聞こえてくる。どうして、とは聞けなかった。当たり前前に、魔法使いだからと返されそうなのがして。

「泣いてなんか……！」

「泣きべそかいてンじゃねえか」

ちがう、と首を横に振って否定する。でも、声は出なかった。だってなんだか安心してしまったんだ。

本当だね、先生。こんな私でも、おジイや吏一君やみずすさんのほかに、味方になってくれそうな人が、助けてくれそうな人がいた。

「……これって、堂本さんの魔法なの？」

「ガキを泣かすための魔法じゃねえはずなんだが」

余計な茶々を入れてから、堂本さんは説明してくれた。

「助けを求めているヤツの目の前に公衆電話があると勝手に電話がつかちまう厄介な魔法だ」と。「似合わないね」と私は笑った。

魔法使いなんていない(7)

話は、三日前の夜にさかのぼる。俺がリョウさんに拉致された日のことだ。家に帰る前に立ち寄った椅子屋で、青柳多聞は相変わらず人を食ったような笑みで俺を迎えた。まわりくどいことは苦手だが、真つ向勝負で勝てる相手のようには思えなかった。なので、「聞きたいことがある」と、話の切りだし方は中途半端なものになる。「青柳家の当主ってお前の知り合いか？」

糸のような目が見開かれ、固まったのは一瞬。動揺を押し隠すように、多聞は笑う。

「父親だ」

答えはあつさりとしたものだった。

「じゃあ、次の当主はお前が……？」

「それはない。俺は青柳家とはとつくに縁を切った人間なんだよ。ほかに質問が？」

次の問いを促され、くわしい事情を聞くタイミングを失した。それにしても、多聞は最初の動揺など始めからなかったかのように、落ち着きを払った、あの掴みどころのない笑みで悠然と構えている。こちらが問い詰めてやろうと意気込んできたのに、とんだ肩すかしだ。だったら、

「堂本治一郎とお前の関係は？ あきちゃんって女の子のことは？」

「近所に住んでいたから、二人とも昔からよく知ってる。小さいころのあきちゃんには遊び相手になれとよくせがまれたし、ジイさんは恩人だよ。聞きたいことはそれだけかい？」

淀みのない多聞の返答は、まるで最初からそれを聞かれることをわかっていたようで気味が悪い。

青柳家の人間は全員が魔法使い。

里中さんが教えてくれたことを思い出して、妙な寒気がした。らしくない。こんな遠まわしな探りは性に合わない。やめだ。

「……なあ、お前も魔法使いなんだろう？　なんか知ってんの？　ジイさん倒れたことと青柳家がやろうとしてることとあきちゃんを盾にとってることと、お前ってなんか関係してる？　だとしたら、それって俺にとっては相当シヨックなんだけど」

ぶつちやけてしまうと、ため息が一緒にもれた。長い付き合いというわけではないし、青柳多聞という人間のことをそれほどよく知っているわけではない。それでも、悪いヤツではないと判断していたのだ。俺なりに。

多聞はなぜだか堪え切れないというように、笑いだしていた。

「笑うとこじやねえだろ」

「いや……はは……ごめん、そっちの聞き方のほうが吏一らしい。……全部話すよ。長くなるから、その辺の椅子に座って。コーヒーでいい？」

シャレたデザインのデスクチェアは座り心地も悪くなかった。小さな丸いテーブルにアイスコーヒーを二つ。多聞はわざわざ奥の部屋から愛用品らしい木の椅子を抱えて持ってくると、テーブルをはさんで向かい合わせに座る。

「掻い摘んで説明すると、俺の父親はね、俺の魔法を利用したいんだよ。実際俺はあの人のためにずっと魔法を使ってきたけどいい加減に嫌になってしまつて、成人してすぐに海外に逃げた。そのときに力を貸してくれたのがジイさんだった。恩人ってのはそういうこと」

「じゃあ、ジイさんが堂本家から縁切られてんのって」

「そう、俺のせい。敵対する青柳家の人間を助けたから」

悪びれた様子も見せず多聞は肯定する。

「まあそれも今年の春頃に一度見つかったせいで、こんなものが出ることになっただけだな」

指で示す先には、コーヒーのグラスの下に敷かれたコースターがある。青い空にオレンジのアルファベットの並ぶそれは以前にもこ

こで見た。いや、ここだけではない。綾と一緒に入ったカフェでも、俺のバイトするカフェバーでも、そしてここ数力月の間に町内に増えたアオヤギグループの系列店でも。

「Are you a wizard？」

多聞がきれいな発音でコースターに書かれた文字を読みあげた。

俺は多聞の言葉の意味を測りかねて、怪訝に眉をひそめて先を促す。「俺の魔法を使つて、魔法使いを探すにはこいつが必要なのだ。町中の魔法使いをあぶりだすために、こんなものを作ったんだ。俺は二度とあの人のところで魔法を使うのはごめんだったからもちろん丁寧に断つた。そうしたら、どうなったか」

クイズの問題でも出すように、多聞は一度言葉を切る。俺を真っ直ぐに見つめる細い目がどこか悲しげに歪んでいた。俺には答えが想像もつかなかったので素直に首を横に振つた。

「新沼吏一に矛先が向いた」

急に自分の名前が出てきて、息をのむ。

「君の情報をどうやって手に入れたのかはわからない。新沼家は魔法使いの系譜からも外れているし、ジイさんにも見当がつかなかった。ただ、青柳の情報網を使えばその辺はどうとでもなるだろうし大した問題じゃない。問題は、青柳家が随分と強引な手に出たことだ」

「それでジイさんは……」

「ジイさんのことだけじゃない。堂本景一も——堂本家の現当主も狙われた。事が起こるよりもっと前に、青柳家ははつきりと宣戦布告してるんだよ。邪魔をするな、と。それに従わなかったからジイさんはあんなことになったし、それに対して堂本家は沈黙を貫くしかない。だからもう、君を助けられる人はいない」

酷い事をさらりと告げながら、多聞はにつこりと目を細めた。話し通して喉がかわいたのか、グラスに手を伸ばす。水滴を弾くコースターが、テーブルのうえに残された。

「俺はべつに助けてほしくてここに來たわけじゃねえよ。ただ、は

つきりさせたかっただけだ」

青柳多聞がジイさんやあきちゃんに何かしたというのなら、俺はたぶん目の前の狐面を思いつきり殴っていた。そうならなくて良かったと心の底から安堵している自分がいる。それなのに多聞は、

「本当にそう思っているのかい？ 本当は、君が青柳家のところで魔法を使わなくてすむ方法が一つだけあるのに？ まさか気づいてないわけじゃないだろ」

俺が気づかないフリをしていたことをわざわざ持ち出してきやがる。確かに、俺が助かる方法が一つだけある。あきちゃんやジイさんのことを見捨てずに、青柳家と話をつける方法が、一つだけ。

「お前を売ればいいんだろっ」

青柳家の当主がほしがっている、青柳多聞を差し出せばいい。俺はこいつの代わりだ。おそらく、多聞の魔法は俺のと同じように魔法使いを探しだすことができる力なのだろう。だったら、多聞がいれば俺は必要なくなる。

多聞は笑みを深くして頷いた。

「でも、君にはできない」

ああそうだ。と返すのはさすがに癪だったので、コーヒーに手を伸ばした。つか、自分なら助けられるってわかってて絶対助けないって最初から決めてるくせに、俺に選択肢があるかのように聞くのって、すげえ性格悪い。知ってたけど。

「言つとくけど、俺はお前のこと完全に信用してるわけじゃねえかな。大体ずつと海外で大人しくしてりやいいのにこっちにわざわざ戻ってきてんのも腑に落ちねえし、あきちゃんやジイさんと知り合いだってこともずつと黙ってやがったじゃねえか」

「その辺のことはジイさんも共犯だよ。俺が月並町に戻ってきたのも、いろいろと事情があつてね。それに、俺と君が会ったのはまったくの偶然だし、黙っておこうと決めたのは俺じゃない。本当は、ジイさんがあんなことになる前に手を打てればよかったんだけど、そう上手くはいかなくて。——1つだけ、君に望みがあるとすれば、

俺もジイさんもこのまま青柳家の好き勝手させるつもりはないってことだよ。ただ、こつちが行動を起こすためにはジイさんが目を覚まさないことには話にならないし、すぐになんとかできるとは思えない。早くて一年、もしかしたらそれ以上、君に我慢してもらうことになるかもしれない。それまでは、信じて待て、としか言えないな」

初めて、多聞の表情に謝罪の色が垣間見えた気がした。いつそ最後までふてぶてしくしていればいいものを。この狐め。

「じゃあさ、一つだけ教えろよ。お前の魔法ってどういうものなわけ？」

多聞ばかりがすべてを知っていて、俺が何も知らない状態では何を信じたらいいいのかわからない。魔法使いは自分の魔法のことを軽々しく口にするべきではない。旧家の人間にとってはほとんど掟に近い不文律。多聞のように父親に魔法を利用してきた者ならばなおさら、教えたくはないだろう。俺が、いつ手のひらを返すかもわからない。

コーヒーグラスをテーブルに置いた多聞がふいに立ちあがった。

俺のほうにゆっくりと近づいてくる。

「立つんだ」と妙な威圧感に俺は黙って椅子から腰を浮かせた。多聞はそのまま俺が先ほどまで座っていた椅子に座りなおし目を閉じる。

「俺の魔法は、椅子を使うんだ。椅子に座ると、まえに座っていた人の考えていたことがわかってしまう……ああ、君は俺の性格が悪いつて思ってたのか。酷いな」

「なっ!?!」

大して傷ついた様子もなくさらりと言って、多聞は目を開けた。

「その気になれば、君が今朝なにを食べてきたかも、なにを思っここに来たのかも、ここ一週間の自慰の回数だってわかるよ」

「げえっ趣味わりい! さっさと立てよ」

腕を掴んで椅子から立たせると、多聞はしずかに笑った。

「そう、悪趣味だろう。最悪の魔法だ」

笑っているくせに、心底、自分の魔法が嫌いなのだとすぐにわかった。そんなのは、心を読まなくてもわかる。でも、そういう相手になんと言ったらいいのかわからなかった。

ああ、そうか。だから多聞はあまり家から出たがらないし、俺の助手席にも乗ろうとしなかったのか。

「ある程度は力を制御できるようになったから、座った瞬間にすべてがわかるわけじゃない。ただ、あまりにも強い思いなんかはこちらが拒否する前に勝手に入ってくるから困るんだ」

そうして多聞は自分の椅子に座りなおす。たぶんあの椅子は他人が座っていない椅子なのだろう。自分以外の誰の思いも宿らない椅子だから、安心して座ることができる。

とんでもなく面倒くさくて、とんでもなく怖い魔法だ。そういう力と向き合わなければいけない目の前の男が、急にひどく可哀想に思えた。

多聞はすこしばかり言い淀んだあと、眉根を寄せて俺をまっすぐに見た。言にくいこともあつさりと口にしてしまうこの男が躊躇うのは珍しい。なんだよ、と促すと、

「うん、悪く思ふなよ。恋愛感情は一番入ってきやすくて……おせっかいなことを言うようだけど、あきちゃんはやめといたほうがいい」

やっぱり最悪だ、この魔法。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908s/>

月並町の魔法使い

2012年1月9日20時45分発行